

山鹿市文化財調査報告書 第11集

か と う だ ひがし ばる
方保田東原遺跡 13

— 10次調査分 指定区域内遺構確認調査 —

2010

熊本県 山鹿市教育委員会

山鹿市文化財調査報告書 第11集

か と う だ ひがし ばる
方保田東原遺跡 13

— 10次調査分 指定区域内遺構確認調査 —

2010

熊本県 山鹿市教育委員会

第2調査区B-5区出土



1 赤色顔料精製用石杵（454）正面



2 赤色顔料精製用石杵（454）正面



3 赤色顔料精製用石杵（454）側面



4 赤色顔料精製用石杵（454）側面



5 赤色顔料精製用石杵 (454) 研磨面



6 赤色顔料精製用石杵 上面



7 第2調査区9号住居跡出土 赤色顔料付着石材



8 第2調査区9号住居跡出土 赤色顔料付着石材

序 文

今回報告する調査は、平成6年度に方保田東原遺跡整備の基礎資料を得るために実施したものです。調査は遺構の確認と露出展示の可能性を求めて実施いたしましたので、土器溜めの遺物はそのまま埋め戻しを行なっております。しかし、貴重な資料として赤色顔料精製用石杵の出土など遺跡の価値を高める成果を得ることができました。

本報告書をご活用いただき、方保田東原遺跡の理解を深め、文化財保護の一助となることを願う次第であります。

平成22年3月31日

山鹿市教育長 杉本 作徳

例 言

- 1 本書は山鹿市教育委員会が、史跡整備に際し平成6年度に実施した発掘調査報告書である。
- 2 本調査は山鹿市立博物館で実施した。
- 3 整理作業は山鹿市出土文化財管理センターにおいて行った。
- 4 遺物および図面、写真などは全て山鹿市出土文化財管理センターに保管している。
- 5 本書に掲載した写真は全て中村幸史郎が撮影した。なお、遺物写真左上の数字は遺物実測図番号である。
- 6 本書に掲載した遺物実測図は大森よう子、小原朱実、城葉子、野満彩子、石橋洋子が作成した。一部装飾古墳館池田朋生学芸員の手を煩わせた。
- 7 本書の執筆および編集は中村が行ったが、一部宮崎歩、池田朋生の両氏の手を煩わせた。

本文目次

巻頭図版

I 調査の経過	1
1 調査に至る経過	
2 調査の組織	
3 調査の経過	
II 遺跡の環境	3
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
III 調査の結果	6
1 調査区の設定	6
2 第1調査区の遺構と遺物	7
(1) 1号住居跡	8
(2) 2号住居跡	11
(3) 3号住居跡	11
(4) 土器溜め1	14
(5) 土器溜め2	14
(6) 道路状遺構1	15
(7) 道路状遺構2	19
(8) 遺構に伴わない遺物	19
① I区出土の遺物	19
② II区出土の遺物	23
③ III区出土の遺物	23
④ IV区出土の遺物	26
⑤ E区出土の遺物	26
⑥ W区出土の遺物	26
⑦ 装飾品	26
⑧ 軽石製品	33
⑨ 鉄器	33
⑩ 石器	34
⑪ 縄文土器	37
3 第2調査区の遺構と遺物	53
(1) 1・2・3号住居跡	54
(2) 4号住居跡	58
(3) 5号住居跡	58
(4) 6号住居跡	59
(5) 7号住居跡	59
(6) 8号住居跡	61
(7) 9号住居跡	64
(8) 10号住居跡	67
(9) 11号住居跡	68
(10) 遺構に伴わない遺物	72
① A-1区出土の遺物	72
② A-2区出土の遺物	72
③ A-3区出土の遺物	73
④ A-5区出土の遺物	73
⑤ A-7区出土の遺物	73
⑥ A-8区出土の遺物	73
⑦ B-4区出土の遺物	74
⑧ B-5区出土の遺物	74
⑨ 一括遺物	80

⑩ 特殊遺物	81
⑪ 石器	81
⑫ ガラス小玉	83
⑬ 鉄器・青銅器	83
⑭ 縄文土器	83
IV 考察	84
山鹿市方保田東原遺跡出土石片の測色	
V まとめ	87
VI 補遺	87
VII あとがき	89

表目次

第1表	第1調査区出土遺物観察表①	40
第2表	第1調査区出土遺物観察表②	41
第3表	第1調査区出土遺物観察表③	42
第4表	第1調査区出土遺物観察表④	43
第5表	第1調査区出土遺物観察表⑤	44
第6表	第1調査区出土遺物観察表⑥	45
第7表	第1調査区出土遺物観察表⑦	46
第8表	第1調査区出土遺物観察表⑧	47
第9表	第1調査区出土遺物観察表⑨	48
第10表	第1調査区出土遺物観察表⑩	49
第11表	第1調査区出土遺物観察表⑪	50
第12表	第1調査区出土遺物観察表⑫	51
第13表	L字状石片測色表	84
第14表	ベンガラと確認された赤色の測色値	85
第15表	第2調査区出土遺物観察表①	92
第16表	第2調査区出土遺物観察表②	93
第17表	第2調査区出土遺物観察表③	94
第18表	第2調査区出土遺物観察表④	95
第19表	第2調査区出土遺物観察表⑤	96
第20表	第2調査区出土遺物観察表⑥	97
第21表	第2調査区出土遺物観察表⑦	98
第22表	第2調査区出土遺物観察表⑧	99
第23表	第2調査区出土遺物観察表⑨	100
第24表	第2調査区出土遺物観察表⑩	101
第25表	第2調査区出土遺物観察表⑪	102

挿図目次

第1図	周辺道路分布図	4
第2図	遺跡地形図	5
第3図	調査区配置図	6
第4図	第1調査区遺構配置図	7
第5図	1号住居跡実測図	8
第6図	1号住居跡出土遺物実測図	9
第7図	2号住居跡実測図	10
第8図	2号住居跡出土遺物実測図	10
第9図	3号住居跡実測図	11
第10図	3号住居跡出土遺物実測図	12
第11図	3号住居跡出土遺物実測図	13

第12図	土器溜め1実測図	14
第13図	土器溜め2実測図	15
第14図	道路状遺構1実測図①	16
第15図	道路状遺構1実測図②	17
第16図	道路状遺構2実測図③	18
第17図	道路状遺構1実測図④	19
第18図	道路状遺構2実測図	20
第19図	遺構に伴わない遺物実測図① (Ⅰ区出土の遺物)	21
第20図	遺構に伴わない遺物実測図② (#)	22
第21図	遺構に伴わない遺物実測図③ (Ⅱ区出土の遺物)	24
第22図	遺構に伴わない遺物実測図④ (#)	25
第23図	遺構に伴わない遺物実測図⑤ (Ⅲ区出土の遺物)	27
第24図	遺構に伴わない遺物実測図⑥ (Ⅳ・Ⅴ区出土の遺物)	28
第25図	遺構に伴わない遺物実測図⑦ (E・W区出土の遺物)	29
第26図	遺構に伴わない遺物実測図⑧ (装飾品・軽石製品)	30
第27図	遺構に伴わない遺物実測図⑨ (鉄器)	30
第28図	遺構に伴わない遺物実測図⑩ (石器)	31
第29図	遺構に伴わない遺物実測図⑪ (#)	32
第30図	遺構に伴わない遺物実測図⑫ (#)	33
第31図	遺構に伴わない遺物実測図⑬ (#)	34
第32図	遺構に伴わない遺物実測図⑭ (#)	35
第33図	遺構に伴わない遺物実測図⑮ (#)	36
第34図	遺構に伴わない遺物実測図⑯ (縄文土器)	38
第35図	第2調査区遺構配置図	52
第36図	1・2・3号住居跡実測図	53
第37図	1号住居跡出土遺物実測図	54
第38図	2・3号住居跡出土遺物実測図	55
第39図	4号住居跡実測図	56
第40図	4号住居跡出土遺物実測図	56
第41図	5・6号住居跡実測図	57
第42図	5号住居跡出土遺物実測図	58
第43図	6号住居跡出土遺物実測図	58
第44図	7号住居跡実測図	59
第45図	7号住居跡出土遺物実測図	59
第46図	8号住居跡実測図	60
第47図	8号住居跡出土遺物実測図	61
第48図	9号住居跡実測図	62
第49図	9号住居跡出土遺物実測図	63
第50図	9号住居跡出土遺物実測図	64
第51図	9号住居跡出土遺物実測図	65
第52図	10号住居跡実測図	66
第53図	10号住居跡出土遺物実測図	67
第54図	10号住居跡出土遺物実測図	68
第55図	11号住居跡実測図	69
第56図	11号住居跡出土遺物実測図	70
第57図	11号住居跡出土遺物実測図	71
第58図	11号住居跡出土遺物実測図	71
第59図	遺構に伴わない遺物実測図① (Ⅰ・Ⅱ区出土の遺物)	72
第60図	遺構に伴わない遺物実測図② (Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区出土の遺物)	73
第61図	遺構に伴わない遺物実測図③ (Ⅲ区出土の遺物)	74
第62図	B-5区実測図	75
第63図	遺構に伴わない遺物実測図④ (Ⅲ-5区出土の遺物)	76

第64図	遺構に伴わない遺物実測図⑤ (#)	77
第65図	遺構に伴わない遺物実測図⑥ (#)	77
第66図	遺構に伴わない遺物実測図⑦ (#)	78
第67図	遺構に伴わない遺物実測図⑧ (#)	78
第68図	遺構に伴わない遺物実測図⑨ (一括遺物)	79
第69図	遺構に伴わない遺物実測図⑩ (一括遺物・特殊遺物)	80
第70図	遺構に伴わない遺物実測図⑪ (供養遺物・石器・ガラス片)	81
第71図	遺構に伴わない遺物実測図⑫ (鉄器)	82
第72図	遺構に伴わない遺物実測図⑬ (縄文土器)	83
第73図	L字状石片色見本	85
第74図	補遺分遺物実測図	88

図版目次

巻頭図版

1	第2調査区B-5区出土赤色顔料精製用石片	
2	#	
3	#	
4	#	
5	#	
6	#	
7	第2調査区9号住居跡出土赤色顔料付着石材	
8	#	
写真1	L字状石片側面 (×500倍)	85
写真2	水銀朱付着土器 (×500倍)	85
P L 1	1 調査地遠景	105
	2 第1調査区作業風景	
	3 1・3号住居跡	
P L 2	1 1～3号住居跡	106
	2 3号住居跡	
	3 3号住居跡遺物出土状況	
P L 3	1 土器溜め1 全景	107
	2 # 近景	
	3 # 大型壺	
P L 4	1 土器溜め2 部分	108
	2 # 部分	
	3 第1調査区遺構検出状況	
P L 5	1 1号住居跡出土遺物 (3)	109
	2 # (4)	
	3 # (13)	
	4 2号住居跡出土遺物 (20)	
	5 # (21)	
	6 # (22)	
	7 # (23)	
	8 # (24)	
P L 6	1 3号住居跡出土遺物 (27)	110
	2 # (28)	
	3 # (29)	
	4 # (30)	
	5 # (31)	
	6 # (32)	
	7 # (33)	

P L 7	1	3号住居跡出土遺物	(35).....	111	6	Ⅲ-8区出土遺物	(146)	
	2	"	(37)		7	"	(147)	
	3	"	(39)		8	"	(150)	
	4	"	(40)		P L 14	1	Ⅳ-1区出土遺物	(151).....118
	5	"	(41)			2	Ⅳ-4区出土遺物	(153)
	6	"	(44)			3	"	(156)
	7	"	(49)			4	Ⅳ-6区出土遺物	(159)
	8	"	(51)			5	"	(160)
P L 8	1	"	(54).....	112		6	"	(161)
	2	Ⅰ-2区出土遺物	(56)			7	"	(162)
	3	"	(57)			8	Ⅳ-8区出土遺物	(164)
	4	"	(57)		P L 15	1	"	(166).....119
	5	"	(57)			2	E-2区出土遺物	(169)
	6	"	(62)			3	W-1区出土遺物	(173)
	7	Ⅰ-3区出土遺物	(65)			4	W-3区出土遺物	(182)
	8	"	(66)			5	"	(186)
P L 9	1	Ⅰ-4区出土遺物	(70).....	113		6	"	(194)
	2	Ⅰ-5区出土遺物	(72)			7	"	(196)
	3	"	(73)			8	"	(200~203)
	4	Ⅰ-7区出土遺物	(79)		P L 16	1	裝飾品	(204).....120
	5	Ⅰ-8区出土遺物	(87)			2	軽石製品	(207)
	6	"	(87)			3	"	(208)
	7	"	(88)			4	"	(209)
P L 10	1	Ⅱ-3区出土遺物	(92).....	114		5	鉄器	(210)
	2	"	(92)			6	"	(211)
	3	Ⅱ-4区出土遺物	(95)			7	"	(212)
	4	"	(97)			8	"	(213)
	5	Ⅱ-5区出土遺物	(98)		P L 17	1	"	(214).....121
	6	"	(99)			2	"	(215)
	7	Ⅱ-6区出土遺物	(100)			3	"	(216)
	8	"	(101)			4	"	(217)
P L 11	1	Ⅱ-7区出土遺物	(102).....	115		5	"	(218)
	2	"	(104)			6	"	(220)
	3	"	(105)			7	"	(221)
	4	"	(109)			8	"	(222)
	5	"	(110)		P L 18	1	石器	(223).....122
	6	"	(112)			2	"	(224)
	7	"	(113)			3	"	(230)
	8	"	(114)			4	"	(235)
P L 12	1	Ⅱ-8区出土遺物	(118).....	116		5	"	(236)
	2	"	(120)			6	"	(239)
	3	"	(121)			7	"	(240)
	4	"	(123)			8	"	(241)
	5	Ⅲ-3区出土遺物	(129)		P L 19	1	"	(242).....123
	6	Ⅲ-5区出土遺物	(131)			2	"	(244)
	7	Ⅲ-6区出土遺物	(132)			3	"	(245)
	8	"	(133)			4	"	(247)
P L 13	1	"	(134).....	117		5	"	(253)
	2	"	(135)			6	"	(255)
	3	Ⅲ-7区出土遺物	(141)			7	"	(258)
	4	"	(143)			8	"	(259)
	5	"	(145)		P L 20	1	縄文土器	(261).....124

2	#	(262)	3	#	(326)
3	#	(263)	4	#	(327)
4	#	(264)	5	#	(330)
5	#	(266)	6	#	(331)
6	#	(270)	7	#	(332)
7	#	(271)	8	#	(333)
8	#	(272)	P L 30	1	# (334).....134
P L 21	1	第2调查区全景..... 125	2	#	(336)
2		遭耕検出状況	3	#	(340)
3		3・6・8号住居跡	4	#	(345)
P L 22	1	6号住居跡..... 126	5		10号住居跡出土遺物 (346)
2	#		6	#	(347)
3		4~6号住居跡	7	#	(350)
P L 23	1	10号住居跡..... 127	8	#	(352)
2	#		P L 31	1	# (354).....135
3	#		2	#	(356)
P L 24	1	# 128	3	#	(358)
2		11号住居跡	4	#	(362)
3		B-5区遺物出土状況	5	#	(363)
P L 25	1	1号住居跡出土遺物 (274).....129	6	#	(364)
2	#	(274)	7	#	(366)
3	#	(275)	8	#	(368)
4	#	(277)	P L 32	1	# (371).....136
5		3号住居跡出土遺物 (280)	2	#	(372)
6	#	(282)	3	#	(374)
7	#	(283)	4	#	(375)
8	#	(284)	5		11号住居跡出土遺物 (380)
P L 26	1	# (285).....130	6	#	(384)
2	#	(286)	7	#	(385)
3	#	(287)	8	#	(385)
4	#	(288)	P L 33	1	# (386).....137
5	#	(289)	2	#	(386)
6	#	(290)	3	#	(388)
7	#	(291)	4	#	(389)
8	#	(291)	5	#	(390)
P L 27	1	4号住居跡出土遺物 (294).....131	6	#	(399)
2		5号住居跡出土遺物 (298)	7	#	(403)
3		6号住居跡出土遺物 (299)	8	#	(404)
4	#	(300)	P L 34	1	A-1区出土遺物 (405).....138
5	#	(300)	2	#	(406)
6	#	(301)	3	#	(407)
7	#	(304)	4	#	(409)
8	#	(305)	5		A-2区出土遺物 (411)
P L 28	1	7号住居跡出土遺物 (310).....132	6	#	(412)
2		8号住居跡出土遺物 (312)	7	#	(413)
3	#	(316)	8	#	(414)
4	#	(316)	P L 35	1	A-3区出土遺物 (422).....139
5	#	(318)	2		A-5区出土遺物 (423)
6		9号住居跡出土遺物 (321)	3		A-7区出土遺物 (424)
7	#	(324)	4		A-8区出土遺物 (428)
P L 29	1	# (325).....133	5		B-4区出土遺物 (431)
2	#	(325)	6	#	(432)

	7	B-5区出土遺物	(433)	
	8	"	(433)	
P L 36	1	"	(434).....140	
	2	"	(436)	
	3	"	(437)	
	4	"	(438)	
	5	"	(440)	
	6	"	(441)	
	7	"	(442)	
	8	"	(442)	
P L 37	1	"	(445).....141	
	2	"	(446)	
	3	"	(447)	
	4	"	(448)	
	5	"	(449)	
	6	"	(450)	
	7	"	(450)	
	8	"	(451)	
P L 38	1	"	(452).....142	
	2	"	(453)	
	3	"	(454)	
	4	"	(454)	
	5	"	(454)	
	6	"	(454)	
	7	"	(454)	
	8	"	(455)	
P L 39	1	"	(456).....143	
	2	"	(457)	
	3	"	(458)	
	4	"	(459)	
	5	一括遺物	(461)	
	6	"	(462)	
	7	"	(464)	
	8	"	(466)	
P L 40	1	"	(468).....144	
	2	"	(469)	
	3	"	(471)	
	4	"	(472)	
	5	"	(477)	
	6	"	(478)	
	7	"	(480)	
	8	"	(481)	
P L 41	1	特殊遺物	(483).....145	
	2	"	(483)	
	3	"	(484)	
	4	"	(485)	
	5	"	(486)	
	6	"	(490)	
	7	"	(491)	
	8	"	(492)	
P L 42	1	"	(495).....146	
	2	"	(496)	

	3	石器	(501)	
	4	"	(501)	
	5	"	(502)	
	6	"	(503)	
	7	ガラス小玉	(504~507)	
	8	鉄器	(508)	
P L 43	1	"	(509).....147	
	2	"	(510)	
	3	"	(511)	
	4	"	(512)	
	5	"	(513)	
	6	"	(514)	
	7	"	(515)	
	8	鉄器	(516)	
P L 44	1	遺構に伴わない遺物	(517).....148	
	2	"	(518)	
	3	"	(519)	
	4	"	(520)	
	5	"	(523)	
	6	"	(526)	
	7	古銭	(529)	
	8	縄文土器	(530)	
P L 45	1	"	(531).....149	
	2	"	(532)	
	3	"	(534)	
	4	補遺の遺物	(535)	
	5	"	(536)	
	6	"	(537)	
	7	"	(538)	
	8	"	(539)	
P L 46	1	"	(540).....150	
	2	"	(541)	
	3	"	(542)	
	4	"	(543)	
	5	"	(544)	
	6	"	(545)	
	7	"	(546)	
	8	"	(547)	

I 調査の経過

1 調査に至る経過

方保田東原遺跡は、昭和60年2月19日付で、約2.7haを国の史跡として指定を行った。

平成3年からは史跡の整備に向けた整備策定委員会を立ち上げ、学識経験者として熊本大学白木原和美教授、別府大学賀川光夫教授、福岡大学小田富士雄教授にお願いし、文化庁からは記念物課田中哲雄主任調査官に指導を願うこととなった。なお平成6年度には白木原教授の退官に伴い、後任に同じく熊本大学の甲元真之教授にお願いした。

平成5年3月には整備基本計画を策定し、報告書の作成を行った。これに基づいた方保田東原遺跡の整備計画の推進に先立ち、文化庁記念物課の指導のもと、整備のための資料収集を目的とした遺構確認調査を行うこととなった。

このため、平成6年度事業として、遺構展示を行うための情報の収集を目的に遺構確認調査を実施した。調査では、集落の中心部と遺跡周辺における環境の状況把握を行うものとした。

集落の中心地確認地点として調査対象にしたのは工場北側の部分(第1調査区)、環境の状況把握のための確認地点として台地北側端部の畑(第2調査区)を対象とし、この2箇所において遺構確認調査を行なうこととした。従って、調査の基本方針として遺構面の確認に留め、極力積極的な掘り下げは行わないこととした。

2 調査の組織

調査主体	山鹿市教育委員会
調査総括	中原 哲哉(山鹿市教育長 兼市立博物館長)
調査事務	永田 哲也(文化課長) 木村 理郎(文化課文化振興係長) 次木万里子(文化課主任主事) 八木由美(博物館主任主事) 山下 透(博物館技師)
調査指導	賀川 光夫(別府大学教授) 小田富士雄(福岡大学教授) 甲元 真之(熊本大学教授) 田中 哲雄(文化庁主任調査官)
調査担当	中村幸史郎(博物館副館長 兼文化財係長)
調査補助	吉田 政博(現荒尾市政策企画課 市史編纂室)
発掘作業	伊豆永敏光、井上秀実、飯田民子、飯

田ツヤ子、石橋朝子、牛崎安恵、奥村千鶴子、奥村泰子、坂田精一、高橋信子、高橋道昭、高本ミチ子、富田スミ子、平尾トシ子、福山須美子、福山千代美、福山陽子、前川誠一、宮崎静子、森崎一馬、森本タツ子、吉井新助、若杉敬子、若杉教子、若杉美也子

整理作業 出土文化財管理センター(生島統夫、石橋洋子、小原朱実、大森よう子、城葉子、野満彩子、森みつよ、山口美智子)

調査協力 文化財環境整備研究所(現九州文化財研究所)、高木正文(熊本県文化課)、池田朋生(県立芸術古墳館)

3 調査の経過

平成6年(1994)

7月4日(月) 晴れ

国指定区域内の調査を行うため、現状変更届の作成を行う。

9月6日(日) 晴れ

文化庁から県文化課を経由して現状変更(発掘調査)の許可通知到着

9月16日(金) 晴れ

発掘調査のための準備作業を行う。機材の運搬及びテント設置。テント内に機材を入れ込む。

9月19日(月) 晴れ

調査区の設定を行う。国指定地区内における遺跡整備のための遺構確認調査として、91-13番地と91-14番地に第1調査区を設定し、東西20m、南北30mの範囲とした。20-1番地と21番地に第2調査区を設定し、東西30m南北10mの範囲とした。

9月20日(火) くもり

ウンボとキャリアカーを使って表土剥ぎ作業を行う。吉井さんと高橋さんに操作をお願いする。

9月21日(水) くもり

作業員を集め機械での作業の傍ら、削平面の整地を行う。午後は文化財保護委員会出席のため中村は現場を離れたが、その後文化財保護委員会の現地視察で案内した。

9月22日(木) くもり

中原哲哉教育長現地視察

9月26日(月) 晴れ

第1調査区の表土剥ぎはほぼ終了、作業員により整地作業に取り掛かる。第2調査区の表土剥ぎを開始。中村は午前中熊本市の県立美術館において開催された熊本県博物館協議会理事会に出席。

9月28日(水) くもり

雨が降らないため遺構検出作業が困難になっている。第1調査区南側で古墳時代の遺物がまわって出土している。

9月30日(金) 晴れ

ようやく遺構検出している状況になってきた。水分が少なく土の色が見えず、硬くて作業しにくい。

10月4日(火) 晴れ

富田スミ子さん宅より動力ポンプとタンクを借りて、菊池川から水を運び散水作業を行った。これまで硬くて白っぽかった土が何とか色が確認できるまでに回復した。部分的に焼土も見えている。肥後国衆一揆顕彰会議担当者会のため中村は午前中現場を離れる。

10月5日(水) 晴れ

熊本県市町村文化財担当者連絡協議会理事会出席のため中村は午前中熊本市へ出張。午後2時過ぎ現場に戻る。

10月6日(木) 晴れ

中原哲哉教育長、永田哲也文化課長、北井澄夫前教育長、現地見学のため来訪。ローリングタワーを2列4段で組み立て、竹により補強する。遺構土色の観察に最高である。

10月11日(火) くもり

台風接近中につき風は強い。しかし雨は望めなさそうである。遺物の出土は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器が数箇所かまわって出土している。明日以降、遺構との関連性を追究したい。

10月13日(木) 晴れ

萩尾測量により国土座標の杭打ち作業。

10月14日(金) 晴れ

笠形土製品が出土した。

10月18日(火) 晴れ

大型の土製勾玉出土。近くから特殊な土器が出土。器台が蓋が不明である。

10月20日(木) くもり一時雨

直径30cm程度の中に小石を敷き詰めた穴が17個検出された。道路状遺構の可能性も残している。肥後国衆一揆顕彰会議担当者会参加のため午後は3時まで現場を離れる。三加和町及び南関町より担当者見学のため来訪。

10月28日(金) 晴れ

第1調査区において住居跡が複数出ているが、切り合い関係が不明で、それぞれのプランが決まらない状況である。

本日午後から第2調査区の遺構確認作業を開始。

10月31日(月) 晴れ

鹿本郡内小学校社会科研究会23名、現場見学のため来訪。

11月8日(火) 晴れ

第2調査区は地表下60cmまで掘り下げた。調査区の南側から多量の土器の破片が出土している。

11月15日(火) くもり

大道小学校5・6年生、現場見学に訪れる。

11月21日(月) くもりのち雨

山鹿市教職員新規採用者研修で発掘体験させる。

第2調査区から紡錘車出土

11月23日(水) 晴れ

一日発掘調査隊を実施。約100名の参加がある。

11月25日(金) くもり

第2調査区より全面丹塗りの石杵が出土。極めて珍しい遺物である。

12月5日(月) 晴れ

第2調査区から古銭出土。腐食がひどく貨幣の名称や時期は不明。

12月15日(木) くもり

第2調査区西端部より、破損した銅鐙が1点出土。

12月20日(火) 晴れ

第2調査区東端部で溝らしい遺構が見えてきた。今日で年内の作業は終了。

平成7年(1995)

1月9日(月) くもり

本日より調査再開

1月11日(水) 晴れ

第1調査区の住居跡の切り合い関係を明らかにする。

1月17日(火) 晴れ

今朝神戸市を中心に兵庫県南部に大規模な地震発生。死者の数が多数になりそうとのこと、ラジオ放送を聞きながらの調査になった。

1月26日(木) くもり

第2調査区で住居跡を11軒確認できそうである。

2月3日(金) 晴れ

福岡大学小田富雄教授を招いて現場の調査指導をお願いした。調査は実測のみで、作業員はお休みである。

2月20日(月) くもり

実測が終了した部分の一部遺物取り上げを行う。そのため作業員5名集める。

2月23日(木) 晴れ

方保田東原遺跡整備検討委員会開催。委員の方々現場視察。

2月28日(火) くもり一時雨

作業員を入れた作業はほぼ終了した。あとは図面に集中して終わらせることである。

3月中 この間、遺構及び遺物の実測作業に専念する。

3月26日(日)はれ

第1調査区は終了したので押しプルを使って埋め戻し作業を行う。将来露出展示ができるような配慮から、土器溜めは木材で周囲を囲み、中には山砂で保護して埋め戻した。

3月28日(火)くもり

全ての作業を終了した。

(作業日誌より抜粋)

II 遺跡の環境 (第1・2図)

1 地理的環境

九州のほぼ中心部に位置する熊本県には、火の国熊本象徴として阿蘇山が存在する。

しかし、阿蘇山そのものは無く、巨大カルデラ内に阿蘇五岳として根子岳、高岳、中岳、鳥帽子岳、杵島岳が存在し、その総称としての阿蘇山である。

活火山としては中岳が知られているが、近年数箇所からガスの噴出が確認されている。

さて、およそ9万年前の大爆発でカルデラを中心に流れ出した火砕流(阿蘇溶結凝灰岩aso4)は、熊本県はもとより大分県や宮崎県にも広がっており、広大な草原台地を作り出している。さらに、西側に流れ出した火砕流は有明海に達し、現在の遠浅の干潟を形成させる要因となっている。

火砕流により台地が形成されているが、川の流れと密接に関係し、氾濫原の形成に深く関わっており、台地によって川の流れに阻害を発生させ、場所によっては湖水や氾濫原となったものと考えられる。今日ではこのような場所は肥沃な穀倉地帯となっている。

熊本県北部を流れる菊池川は、阿蘇外輪山北側の菊池渓谷に源を発し、周辺の大小65の流れを集めて有明海へと注いでいる。菊池平野には菊池川の支流が多く注ぎ込んでおり、山鹿市西端から和水町菊水地区にかけては古代から穀倉地帯となっているため、雨期には川の流れに支障をきたし、毎年氾濫していた。このため山鹿市から菊池市にかけて広大な氾濫原が形成され、菊池平野(きくろくへい)と呼んでいて、古代から穀倉地帯として「茂賀の浦三千町」とも呼ばれている。現在も平野部においては島の名が付いた地名が多いのは、微高地に集落を形成しているため、水害の際に平野部が湖水と化し、集落が島状になってしまうことに起因している。

遺跡の多くは平野周辺の台地上に多く残されており、方保田東原遺跡も菊池川中流域で、支流の方保田川と菊池川に挟まれるような舌状台地状に

形成された、河岸段丘上に存在する遺跡である。地形的には東から西に向かって延びる舌状を呈しており、南には菊池川、北から西には方保田川が回り込んで合流している。この段丘の近くでは合志川、千田川、方保田川が合流しているため、本流である菊池川は蛇行しつつ流れており、方保田の台地を浸食し続けている。

2 歴史的環境

弥生時代稲作が普及すると、人びとの生活も縄文時代までの狩猟採集の経済形態から、農耕栽培へと形態変化が見られる。集落形成も土地と水を求めた結果、平野部周辺での集落形成が定着してくる。併せて、稲作に関し土地と水をめぐって、周辺集落との権力闘争の結果、防衛機能を備える集落が作られ、環濠集落や高地性集落などが見られるようになる。

熊本県下においてはもっぱら台地上においての環濠集落が多く確認されているが、玉名市柳町遺跡などのように氾濫原の低湿地に形成された遺跡も存在している。立地条件の違いは、集落間における権力差に起因するものではと考える。

菊池川中流域では、台地上に形成された遺跡が多く、方保田東原遺跡も舌状台地に形成された遺跡で、菊池川と方保田川を外堀として集落が形成されている拠点集落である。

山鹿市でも津袋大塚遺跡や蒲生上の原遺跡などの他、同じ台地上に多くの遺跡が存在している。

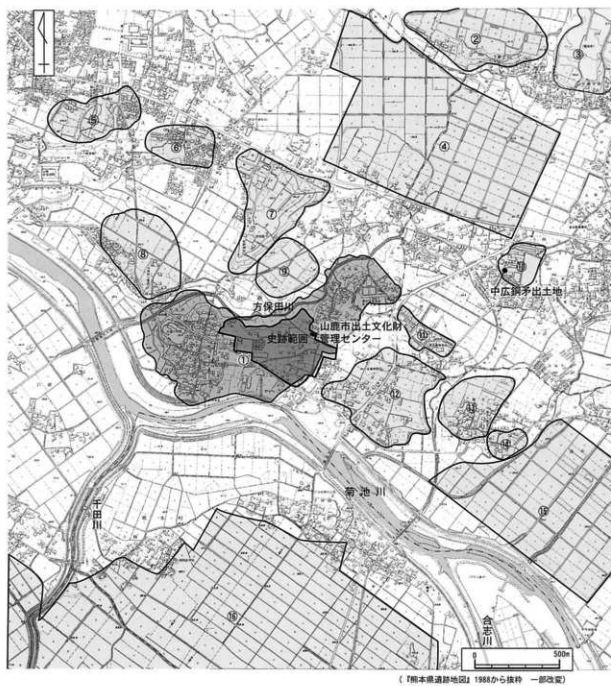
菊池市の小野崎遺跡と台(うてな)遺跡も菊池川を挟んで南と北に分かれるように台地上に存在する拠点集落遺跡である。

菊池平野を挟んで拠点集落が多く見られ、菊池市街地に近い部分では平野内にも遺跡が残されている。古墳時代になるとほとんどの古墳も台地上に作られているが、山鹿市では白塚、金屋塚古墳、御堂塚古墳。菊池市では蛇塚古墳などは平野の中に築かれている。

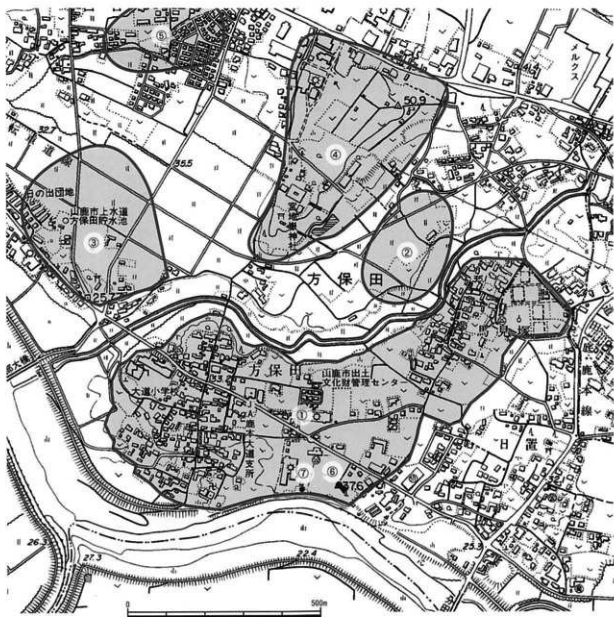
方保田東原遺跡周辺では、菊池川によって遺跡の南側を著しく浸食されている場所である。このため、台地の縁に築造されている端山塚古墳(山鹿市指定文化財)は南側半分を削り取られ、墳頂部から川へと一直線に崖面を形成している。かつては古墳の南側に畑が存在していたが、今では姿形も見られない。

この部分には現在確認されているだけでなく、東から清水山古墳、亀塚古墳、端山塚古墳、京塚古墳へと続いている。古墳そのものは石棺系の埋葬主体であろう。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけては集落



第1図 周辺遺跡分布図



- | | | |
|-----------|----------|---------|
| ① 方保田東原遺跡 | ④ 馬見塚古墳群 | ⑦ 端山塚古墳 |
| ② 石原遺跡 | ⑤ 古岡白石遺跡 | ⑧ 方保田城跡 |
| ③ 方保田遺跡 | ⑥ 亀塚古墳 | |

第2図 遺跡地形図

遺跡で、古墳時代中期には墓域としての機能性を有している。遺跡の北側の方保田川を挟んだ丘陵地には直径40mを超える円墳をはじめとした馬見塚古墳群が残っている。

方保田東原遺跡の南側には発達した氾濫原が広がっており、古代条里制の跡もかつては残っていたが、昭和40～50年代の圃場整備事業で姿を消してしまった。

しかし、この地が古くから穀倉地帯となっていることには変わりなく、江戸時代には収穫された年貢米を川平田船に積み込み、菊池川を下って高瀬（現玉名）の蔵に運んでいた。

当時の様子を描いた大きな絵馬2点が、山鹿大宮神社の楼門に掲げられており、高瀬から大坂に向けて米を運ぶ帆掛け舟の風景と、大坂港に到着した様子を描いている。

III 調査の成果

1 調査区の設定 (第3図)

今回の調査区は2箇所設定した。方保田東原遺跡における集落の中心地を確認するため、及び、将来の整備に備えて遺構の露出展示ができればの確認のため、工場北側の指定地内の方保田字東原91-13番地と91-14番地を跨ぐ形で南北30m、東西20mの範囲を調査対象とし、第1調査区とした。

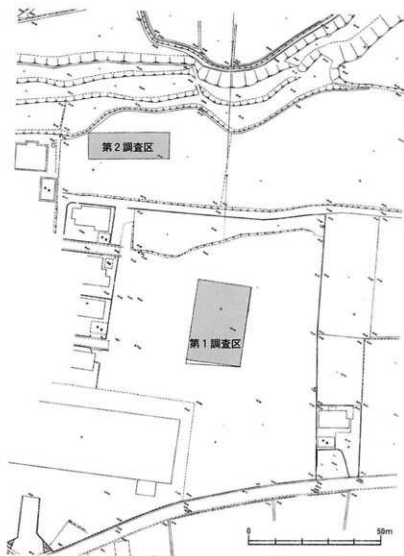
調査区内は東西20mを半分にE、W区とし、南北30mを10mの範囲で南から1～3区に分けた。さらに、遺構実測図の作成段階で、方眼紙の範囲を東西5mで分け、東側からI～IV区とした。南北は4mで南側から1～8区に分けた。

また、方保田東原遺跡の中では数箇所溝が発見されているが、環濠集落として遺跡を取り囲むような溝の確認ができていなかった。このため、環濠の状況確認を目的として方保田川を見下ろす台地北側の方保田字東原20-1、21番地を跨いで東西30m、南北10mの調査区を調査対象とし、第2調査区とした。

なお、トレンチ設定段階で長軸が1m東西方向にずれていたため変形した形となった。

調査区は南北10mの範囲を、南側をA区、北側をB区に分け、東西方向は西側を基点として方眼紙の範囲で4mに区切り、1～8区に分けた。

区分けについては第1調査区、第2調査区共に煩雑になってしまったが、当時のまま報告することとした。



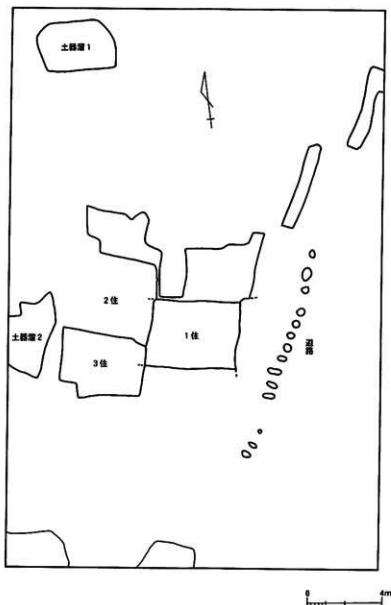
第3図 調査区配置図

2 第1調査区の遺構と遺物（第4図）

調査区内では、遺構の上面での確認に留めることとし、検出作業に時間を割いてしまう結果となった。2箇所で攪乱された部分が検出され、中には瓦礫が埋められていた。おそらく昭和56年から58年にかけて宅地造成し、その後住宅を建設した際の廃材をまとめて穴の中に廃棄したものと推

察できた。

遺構としては重複して遺構が存在していたため、輪郭を確認することが難しかった。そのため、明確に確認できたのは弥生時代終末期の竪穴住居跡3軒、土器溜め2箇所と道路状遺構が初めて検出できた。



第4図 第1調査区遺構配置図

(1) 1号住居跡 (第5図)

調査区の中心部に近い位置にあり、東側は遺構(住居跡?)に切れ、西側は2号住居跡と3号住居跡に切られていた。そのため住居跡の壁は南北のみ3.6mを測る。東西壁は5m程度の規模になろう。中央部からやや東に炭化物がまとまっており、炉跡を残していた。また、南壁に沿うように、上面には焼土が見られたが、埋没後のもので住居跡に伴うものではなかった。遺物は土器が主であるが、ガラス小玉3点が出土している。

住居跡の東側から少し遺物が出たので、まとめて紹介しておく。

遺物 (第6図)

1は在地系甕である。口縁部と胴部の接点はないが、タタキ目や胎土から同一個体と考えられる。胴部上位にキメ細やかな叩き目を施し、下位は削り落としている。煤の付着が著しい。底部は丸底になる。

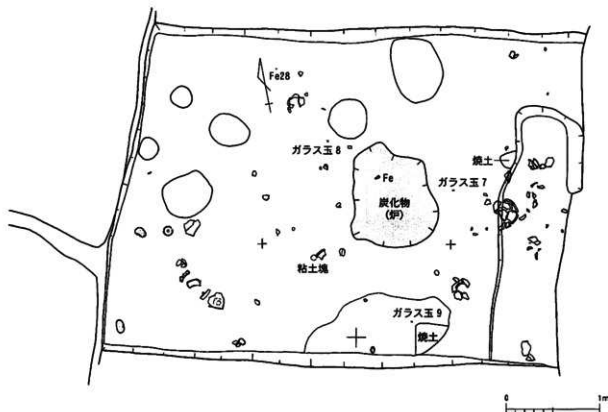
2も在地系甕で丸底の底部である。表面には煤、内面は焦げ目が付いており、使用頻度が窺える資料である。

3は壺の口縁部である。小さく立ち上がる二重口縁で、頸部外側には刺突文を配している。

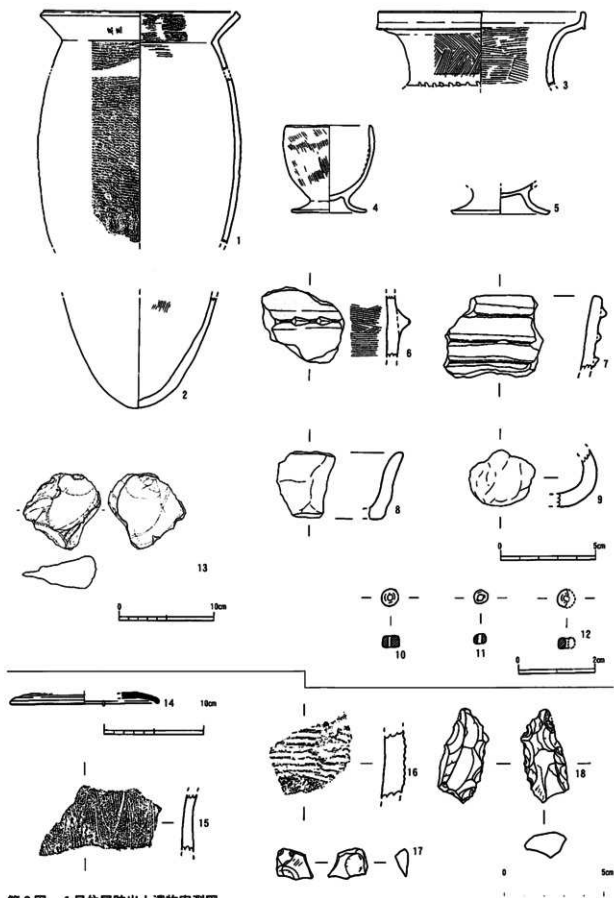
4と5は脚付の鉢である。4はコップ状の本体に小さな脚を付けており、胴部内面は器面剥離が見られる。5は脚部のみである。6は赤色顔料が付着している壺胴部の破片である。7は縄文土器の破片で口縁部に3条の貼付け文を施し、竊木式土器の破片である。混入したものであろう。8と9は手捏ね土器である。10から12はガラス製小玉である。12は半欠けで、色は全てコバルトブルーである。(中村)

13は不定形な幅広の剥片である。表面末端の縁辺には調整痕らしき大振りな剥離痕が残る。一見、後期旧石器の剥片、あるいはスクレイパーのようにも見えるが、安山岩に特有な風化の激しい石材を用いて、打面を特に作せず剥離していることから、縄文早期に見られる二次加工剥片と見られる。五木村頭地田口遺跡、植木町ラスギ遺跡など、縄文早期の中原式と呼ばれる円筒形条痕文土器や、押型文土器の包含層からままた出土する。

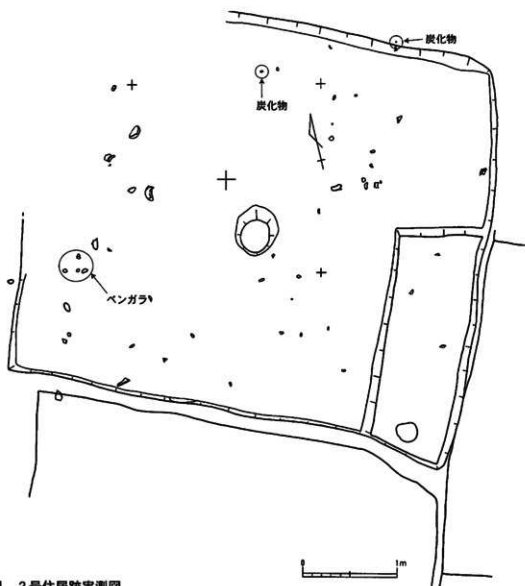
機能としては、石匙的な使用で用いられると見られ、やや後出のものは打面を残しつつつまみを作出する。このタイプの石匙は、熊本市石の本遺跡、山江村城・馬遺跡などで見られる。(池田)



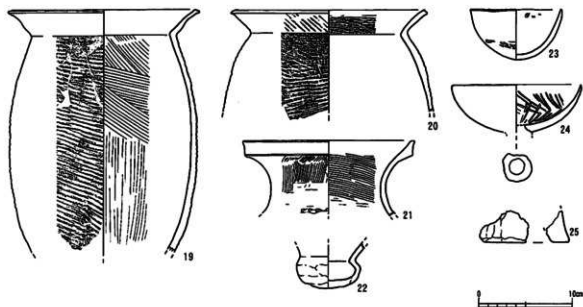
第5図 1号住居跡実測図



第6图 1号住居跡出土遺物実測図



第7図 2号住居跡実測図



第8図 2号住居跡出土遺物実測図

14から18は住居東側から出土した遺物である。したがって住居に伴うものではない。14は須恵器坏蓋片である。15は壺の頸部片で細かい櫛描波状文を施している。古式土師の壺である。16は縄文土器片で、表面には貝殻条痕文を施している。17は黒曜石の破片である。剥離面は見られるが石器としての刃部はなく、剥片である。18は安山岩で、刃部らしく調整をしているが不整形の石器である。

(2) 2号住居跡 (第7図)

東壁は1号住居跡に切れ、南壁は3号住居跡を切っていた。西側壁は他の遺構(住居跡?)と重複して確認出来なかった。このため本来の規模は不明である。なお東側壁に沿ってベッドを配していた。

遺物 (第8図)

19と20は在地形裏で長胴丸底になる。19表面には煤の付着が著しい。21と22は壺である。21は口縁部のみで頸部に刺突文を配している。口唇部は山形をなし、白川流域に多く出土する壺である。22は粗い作りの小型丸底壺である。23と24は鉢である。23は小型の完形品である。24は古式土師の

脚付鉢で、脚部を欠損し、内面にはヘラによる研磨が施されている。25は底部にくぼみがあるので、土製支脚もしくは杵型器台の破片であるが、胎土と焼成が悪いため断定しがたい。

(3) 3号住居跡 (第9図)

東側は1号住居跡、北側は2号住居跡を切っている。東西4.5m、南北3m程度の不整形な住居跡である。床面は硬化しており、南西コーナーには埋没後に焼土が堆積していた。西壁に沿って遺物がまともっており、廃棄された物でなく住居に伴うものである。

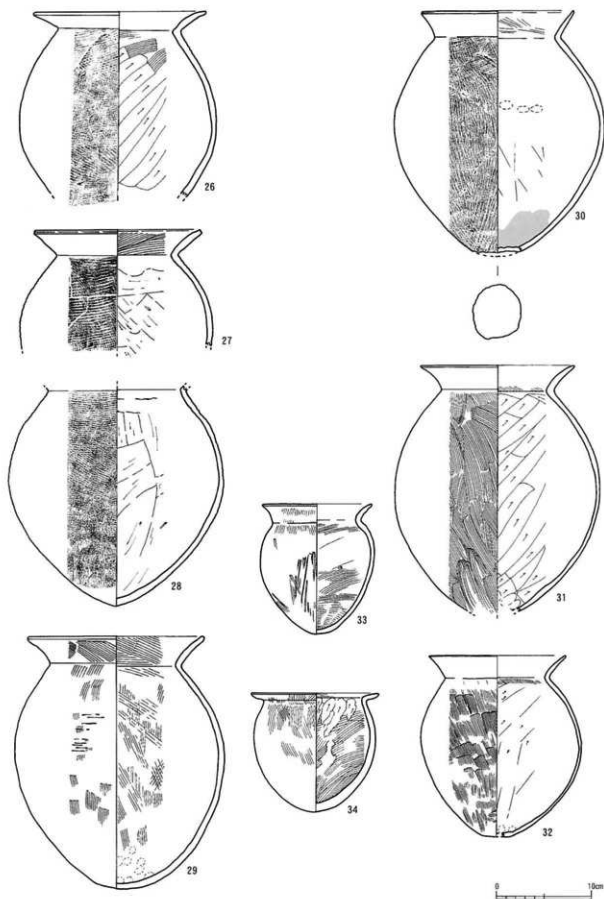
遺物 (第10・11図)

26から34は外来系の甕である。26から30までは庄内系で31から34は布留系である。26と27は底部を欠いているが、胴部表面には叩き目調整を施し、煤の付着が著しい。

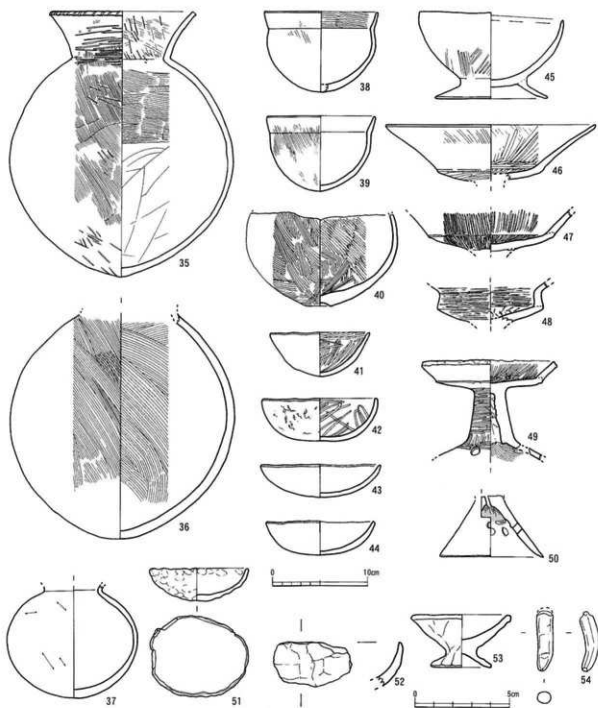
28は口縁部を欠いているが、胴部表面には細かな叩き目を施し、尖り気味の底内面には焦げ付きが見られる。29は叩き目が少なくハケ目調整が主に見られる。内面にもハケ目調整を行っている。30も粗いハケ目で肩部の叩き目を掻き消している。



第9図 3号住居跡実測図



第10図 3号住居跡出土遺物実測図



第11图 3号住居跡出土遺物実測図

底部を欠いているが、二次穿孔のような状態で、甗としての使用が行なわれていたかのようなものである。31は布留系の甗である。半裁に近い状態で底部を欠いている。32は底部が小さな平底となっている。やや小型の甗である。33と34は小型の甗である。33は完形品である。

35から37は壺である。35は口唇部に刻みを配している。この壺は胴部に火を受け、口縁部から底部にいたるまで煤の付着が見られ、壺として通常の使われ方ではなく、甗の代用品としての使用である。36は口縁部を欠いている。これも底部近くに煤の付着が見られる。37は口縁部を欠いているが、薄手のつくりで端整な胴部の壺である。38から45は鉢である。38と39は口縁部が開く鉢である。40は口縁部を欠いている。底部は小さくくぼんでいる。表面には火を受けて煤の付着も見られる。41は完形品の小型の鉢である。内面にはヘラによる研磨を施している。42も完形品である。43と44も鉢である。45は脚付鉢である。46から50は高坏である。46は脚部を欠いている。47と48は坏部片である。49は口縁部と脚部を欠いている。

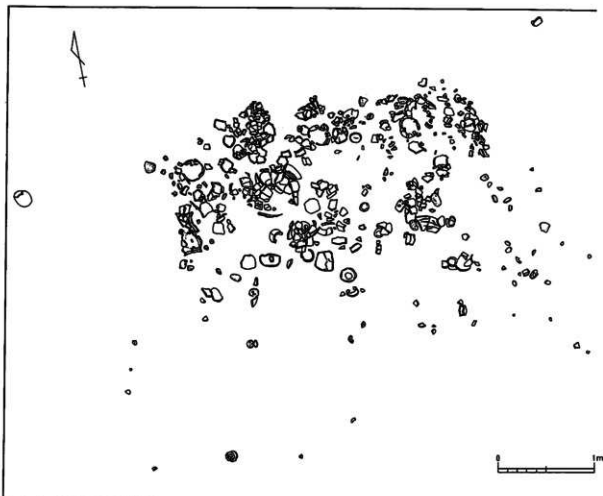
脚には4個の透かし穴を配している。50は脚部のみである。3個の透かし穴を配している。51は手捏ね土器で不整形な鉢である。52と53はミニチュア土器である。54は土製勾玉である。

(4)土器溜め 1 (第12図)

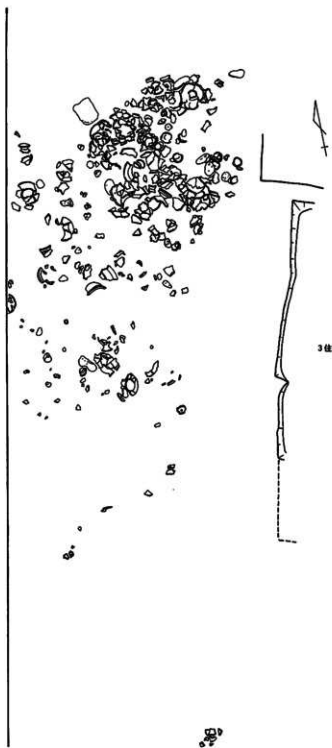
調査区北西隅のⅣ-8区で確認された土器溜めである。この段階では明確な範囲を示すラインは確認できなかったが、大型の二重口縁壺を中心として3.5m×2.5mの長方形の範囲で広がっていた。遺物は出土状況の図化と写真撮影を行い、将来の露出展示に備えて取り上げず、周囲を木材で囲んで山砂を充填するように埋め戻している。遺物の時期は庄内期の様相であった。

(5)土器溜め 2 (第13図)

調査区中央部西側のW-2区の中でⅣ-4区で確認された土器溜めである。西側は調査区外に伸びているため本来の規模は不明だが、現状では、4m×2.5m程度の広がりを持っている。こちらも調査段階では範囲を示すラインは確認できな



第12図 土器溜め 1 実測図

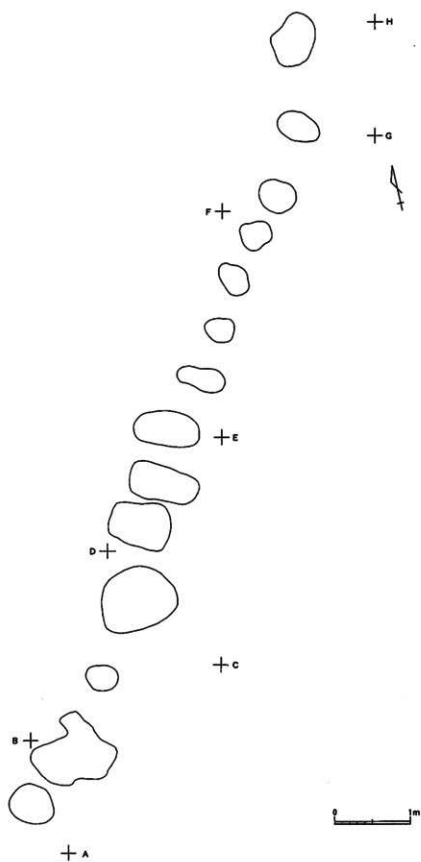


第13図 土器溜め2 実測図

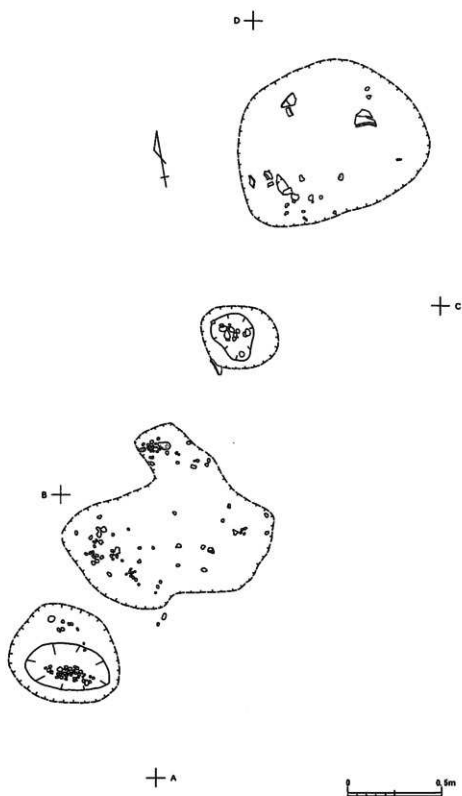
かった。こちらも遺物は出土状況の図化と写真撮影を行い、将来の露出展示に備えて取り上げず、周囲を木材で囲んで山砂を充填するように埋め戻している。遺物の時期は弥生終末期の在地系甕の様相であった。

(6)道路状遺構 1 (第14～17図)

調査区E-1区からE-2区にかけて、南南西から北北東に向かって伸びる道路状遺構である。12mの長さで、小判型に小石を敷き詰めた飛び石状集石が14個確認された。飛び石状集石の大きさは30cmから1m以上とまちまちであるが、おおむね人の歩幅に合うように60cm前後の間隔で配され



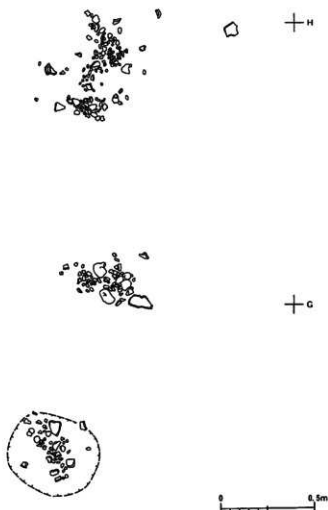
第14圖 道路状遺構1実測図①



第15圖 道路状遺構 1 実測図②



第16図 道路状遺構1 実測図③



第17図 道路状遺構 1 実測図④

ていた。

集石には人の指先程度の小石から拳大の石とともに小さく粉砕した土器片が混入し、硬く締まった状態であった。土器には須恵器は見られず、須恵器出現の5世紀以前の時期を求めることができる。

(7)道路状遺構 2 (第18図)

調査区E-3区において確認された道路状遺構である。道路状遺構1の北側に伸びるような形で2本の硬化面が確認され、直線とはならず少しずつれた状況であった。

1本は長さ4.6m、幅60cm。もう1本はL字状に曲がりながら長さ4.5m、幅70cmの規模である。

(8)遺構に伴わない遺物 (第19～34図)

①I区出土の遺物 (第19～20図)

55から62はI-2区出土の遺物である。

55は土師器の小形丸底壺で、外側のくびれが不明瞭である。56も土師器の壺である。外面胴部に細かな刷毛目を僅かに残している。57も土師器で、釣鐘状の土器である。特殊な形状で上部には乳頭状の貼り付け文を配し、頂上部には蓋をするように天上部を作り、その上に突起を貼り付けていたが、剥離している。このことから、釣鐘状の土器であると判断した。58は注口土器の注口部分の破片である。スプーンの柄のようにしているが中空になっているところから注口土器とした。59と60は土師器の甕である。61と62は土師器の碗である。

63から67はI-3区出土の遺物である。

63は土製品である。底部にくぼみがあるところから杵型器台の可能性もあるが、作りが雑であり、

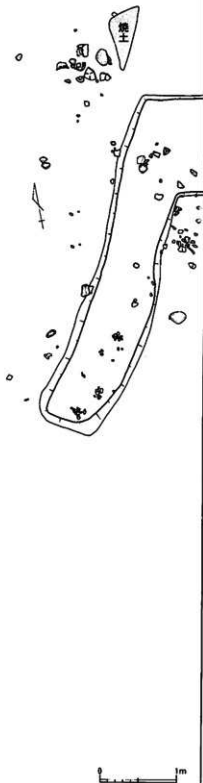
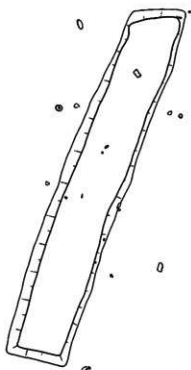
手捏ねの土製品とした。64も手捏ねの甕で脚台部分のみである。65と66は土師器の碗である。65は半分に煤の付着が著しい。66は口縁部の立ち上がりが高く反っている。67は瓦で軒平瓦である。忍冬唐草文を施している。

68から71はⅠ-4区出土の遺物である。

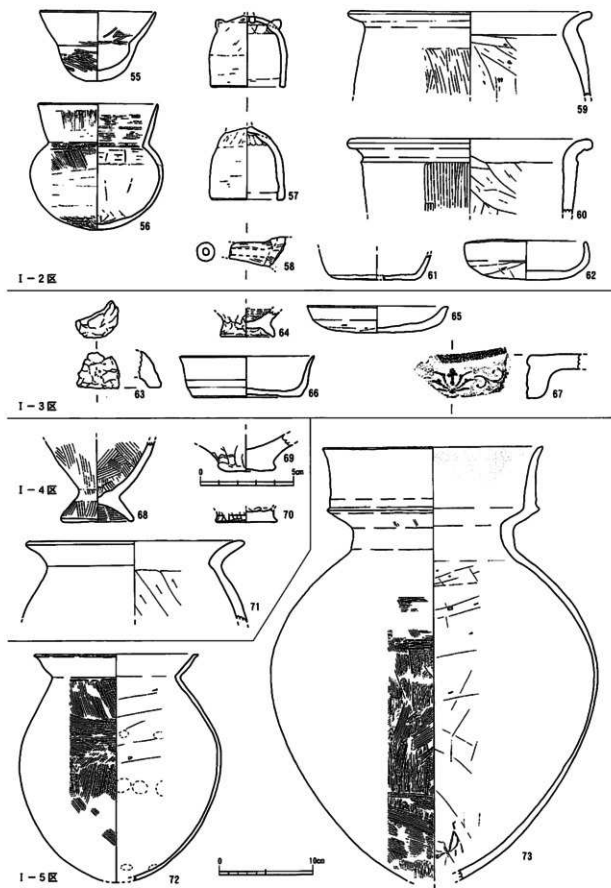
68は小形の在地系甕の底部である。69は手捏ね土器の破片である。70は縄文土器である。円盤状土製品のようなが、一面は器壁が延びているので底部とした。浅鉢であろう。71は土師器の甕である。

72と73はⅠ-5区出土の遺物である。

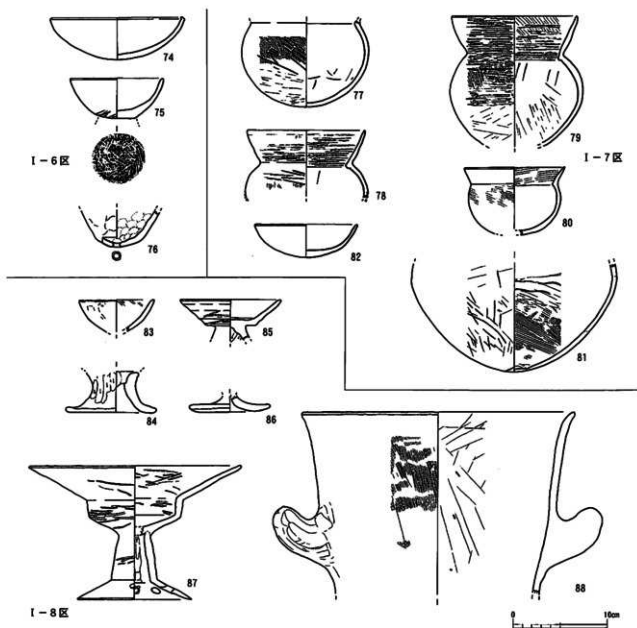
72は外来系で布留期の甕である。外面には煤の付着、内面には焦げ付きが著しい。73は二重口縁の壺で、比較的大型である。口縁部内面には黒色に顔料が塗られている。このような例は大型の二重口縁壺に見られ、特殊な使用方法によるものであろう。今後の課題である。



第18図 道路状遺構2実測図



第19図 遺構に伴わない遺物実測図① (I区出土の遺物)



第20図 遺構に伴わない遺物実測図② (I区出土の遺物)

74から76はI-6区出土の遺物である。

74は碗である。口唇部は丹精に仕上げている。
75は脚台を欠損した鉢である。76は鉢を転用して
甌としている。

77から82はI-7区出土の遺物である。

82のみ鉢で残りは全て甌である。

77は胴部だけの破片である。破損後火を受けて
おり部分的に断面まで煤が付着している。78は口
縁部から肩部までの甌で、煤の付着が見られる。
79は底部の一部を欠いている。80は小形丸底甌の

破片である。81は甌の底部を半載し、鉢として再
利用したものである。載断面の摩滅から再利用し
たと判断した。82は小形の鉢である。

83から88はI-8区出土の遺物である。

83は手捏ね鉢の破片である。84は脚台である。
85は小形の高坏で脚台据部を欠いた破片である。
86は小形の脚台片である。87は高坏である。88は
土師器の甌片である。底部はなく、牛角把手をつ
けている。

②Ⅱ区出土の遺物（第21～22図）

89と90はⅡ-1区出土の遺物である。

89はジョッキ形土器の破片である。90は土製スプーンの柄である。

91と92はⅡ-3区出土の遺物である。小型の鉢の破片である。92は滑石製鍋の破片を再利用した石製品である。残念ながらほぼ半分程度を欠損している。本来は小判型に整形され、頂上部に直径15mmの円孔を穿て、携帯用の紐を通せるように加工している。用途としては携帯用カイロとして利用したのであろう。

93から97はⅡ-4区出土の遺物である。

93は在地系甕口縁片である。94は甕口縁部で、頸部に櫛描文を配している。95は脚部を欠いた高坏である。96は土師器の甕の破片である。97は須恵器の坏蓋である。甕としての使用が認められる。

98と99はⅡ-5区出土の遺物である。

98は大型のジョッキ形土器の破片である。把手は見えないが、平底の状況からジョッキ形土器と判断した。99は須恵器の坏である。底部に小さな高台を作っている。

100と101はⅡ-6区出土の遺物である。

100は手捏ねの鉢の完形品で、整形時の指の痕が残っている。101は大型の鉢の破片である。器壁は薄く仕上げている。

102から116はⅡ-7区出土の遺物である。

102は外来系（布留）甕である。外面には煤、内面には焦げ付きが見られ、使用頻度の高さを示している。器面は刷毛目調整であるが、頸部に猫の爪で引っ掻いたような傷を数本見ることができる。103は甕の胴部である。外面には煤、内面には焦げ付きが見られる。104は甕で、外面はヘラ研磨仕上げで、竜目痕を残している。移動の際に籠で包んでいたことが判る資料である。105も甕である。半裁されたような状態で、外面には煤が付着している。内面は粗い削りが見られる。106は甕の破片である。器面は丁寧にヘラ研磨仕上げを施している。107は小型丸底甕の破片である。108は小型の鉢の破片である。109は小型の甕である。110は小型器台である。外来系で丁寧なヘラ研磨仕上げで表面に一部煤の付着が見られる。111は大型甕の破片で底部のみである。112から117は土師器の甕である。112は完形品である。113は火を受けて器面剥離が見られる。114は大型で器面剥離が見られる。115は口縁部のみの破片である。116は底部のみで、これらは接点が見られないが胎土や色調から同一個体の可能性が高い甕である。117から123まではⅡ-8区出土の遺物である。117は小型の甕である。118と119は甕である。

118は小型で、119は口縁部のみである。120から122は手捏ね土器で、120と121は鉢である。122は底部のみである。123は土製品で支脚の破片である。

③Ⅲ区出土の遺物（第23～24図）

124はⅢ-1区出土の遺物である。土師器の甕の破片である。

125と126はⅢ-2区出土の遺物である。125は土師器の甕の破片で口縁部周辺のみである。126は甕の破片で、口縁部から肩部にかけての破片である。

127から129はⅢ-3区出土の遺物である。

127と128は土師器の甕で、口縁部と底部の破片である。共に煤の付着が見られ、使用頻度の高さを示している。129は須恵器の鉢である。底部には高台を配している。

130と131はⅢ-5区出土の遺物で、共に高坏の脚部である。131は坏部を欠いているが、脚部には3個の透かし穴を配し、完全な姿を留めている。

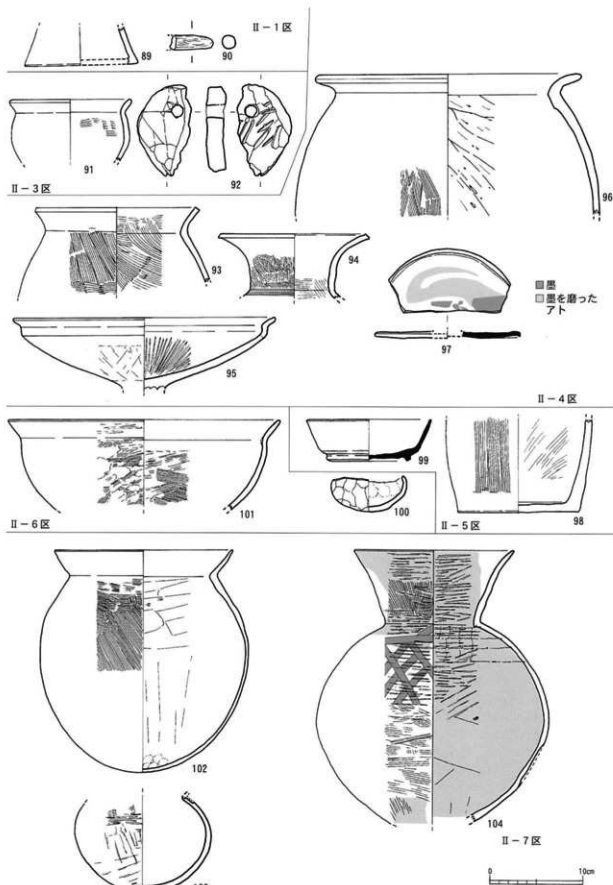
132から140はⅢ-6区出土の遺物である。

132と133は小型丸底甕である。134は脚付鉢で脚裾部を欠いている。135から137は鉢である。135は歪んでいるが、完形品である。137はヘラ研磨で仕上げている。138は手捏ね土器である。139はジョッキ形土器の破片である。140は青白磁碗の破片である。表面には弓形縦線を周回している。

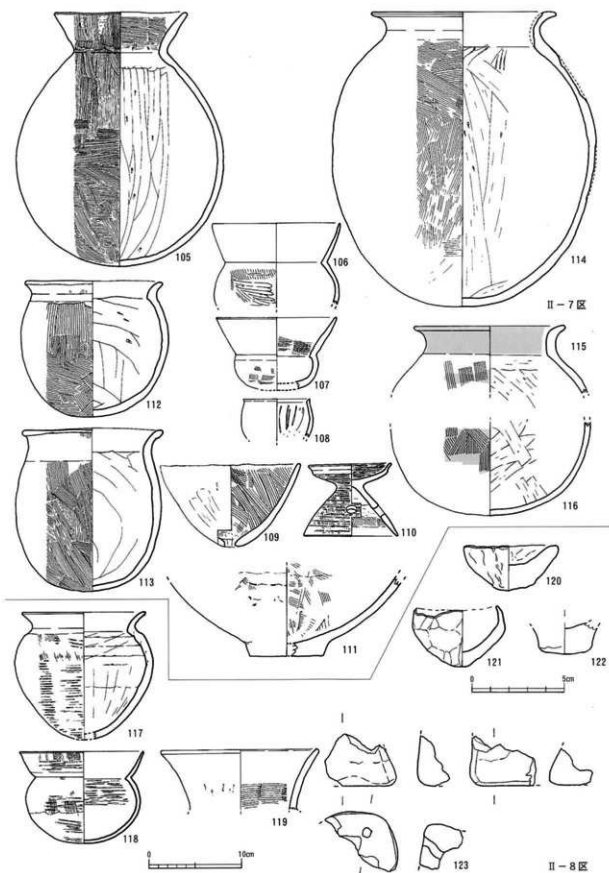
141から145はⅢ-7区出土の遺物である。141と142は小型丸底甕である。143は手捏ね土器である。脚付甕の破片で、脚裾部には粘土の接合面が皺のように残っている。144と145は脚付鉢である。144は内面にヘラ描きの痕が見られる。145は脚部に3個の透かし穴を配している。

146から150はⅢ-8区出土の遺物である。

146と147は外来系の甕で庄内系の甕である。146は頸部には竹の端部を利用した刻み目状の線書きを36個配している。147は煤の付着が著しく、胴部には直径1mmの小さな穴が開いている。外側から針状のもので穿孔している。148と149は鉢である。150はミニチュアの土製勾玉である。先端を僅かに欠いている。



第21図 遺構に伴わない遺物実測図③ (II区出土の遺物)



第22図 遺構に伴わない遺物実測図④（II区出土の遺物）

④Ⅳ区出土の遺物 (第24図)

151はⅣ-1区出土の遺物である。特殊な遺物で、口縁部などに刻み目文や刺突文を配している。形状から器台と思われるが、くびれ部に凸帯を巡らし、類似資料を知らない。

152はⅣ-2・3区出土の遺物で、二重口縁部の壺の破片である。

153から156はⅣ-4区出土の遺物である。153は外来系で庄内系の変である。外面には叩き目他に猫の爪で引掻いたような3本の傷が数箇所見られる。154は壺の胴部の破片である。胴部は算盤玉状に膨らみ、6条の沈線を巡らしている。155はミニチュアの鉢の破片である。156は土製品で完形品の紡錘車である。

157から162はⅣ-6区出土の遺物である。157は外来系の変である。庄内系で口縁部から肩部のみである。158は鉢であるが小型丸底壺に近い形である。159はミニチュアの壺である。口縁部端部を欠いている。160は横に付く把手である。端部を掴まんで器面に押しあてた痕跡が見られる。161と162は土師器の坏である。

163から166はⅣ-8区出土の遺物である。163は在地系の変で、口縁部を欠いている。164は外来系の変で庄内系である。外側には煤が全面に付着している。内面には焦げ付きが見られる。165はミニチュア土器で、脚が付きそうである。166は土製品である。勾玉にしては直線である。

⑤Ⅴ区出土の遺物 (第25図)

167と168はⅤ-1区出土の遺物である。167は鉢の破片である。168は手捏ね土器で、脚台の破片である。

169はⅤ-2区出土の遺物で、二重口縁部の壺の破片である。

170と171はⅤ-3区出土の遺物である。170はミニチュア土器で、口縁部先端と脚部を欠いている。171は内面に赤色顔料が付着した土器片である。くすんだ色からベンガラである。

⑥Ⅵ区地区の遺物 (第25図)

172と173はⅥ-1区出土の遺物である。

172は須恵器坏蓋の破片である。積み欠いている。173は耳環である。表面は金張りが残っている。

174と175はⅥ-2区出土の遺物である。共にミニチュア土器で174は壺、175は鉢の破片である。

176から203はⅥ-3区出土の遺物である。

176は二重口縁部の口縁部片である。内面には黒漆が塗られている。177は筒型を呈する土器で、器台にしては上部が開き過ぎになっている。178は内面に赤色顔料が付着している壺の破片である。

179は手捏ね土器で、鉢の破片である。180は土師器で、補修用の円孔3個を有している。移動式甕ではなかろうか。

181は底部としているが、高台状の貼付け文の幅が均等ではなく先細りになっているところから鈎状の貼付け文の可能性も残している。

182は外来系変である。小型の変で布留系である。183は壺の頸部の破片である。頸部には凸帯を巡らし、下段に粗い櫛描き文を配していた。184は脚付鉢の破片である。ジョッキ形土器に似た作りである。類似資料として平成2年度に実施した、サンチェリー工業増築工事に伴って調査した際に3点出土しており¹⁾、玉名市南大門遺跡でも同様の資料が出土している。¹²⁾

185は土師器の鉢の破片である。186は土製品である。笠形を呈した土製品で、きのこのようでもある。かつて類似資料として中空になった笠形土製品が出土している。¹³⁾

187から197はミニチュア土器である。187は小型丸底壺の破片である。188と189は鉢である。共に口縁部を欠いている。底部は平底と丸底である。190と191は高杯の破片である。191には2個の透かし穴が3箇所に通っている。192は土製スプーンの把手である。193も高杯である。194と195は尖り底の鉢である。194は極めて小さな鉢である。196は土師器の変である。胴部には把手が付いている。197は甕の破片である。198と199は須恵器の坏の破片である。198には小さな高台があり、199は平底である。

200から203は玉類である。200は管玉である。茶色を呈し、研磨で光沢がある。孔は片側から穿っており、僅かに直径が異なっている。201から203はガラス小玉である。201と202は濃紺色で、203は薄い緑色である。

⑦装飾品 (第26図)

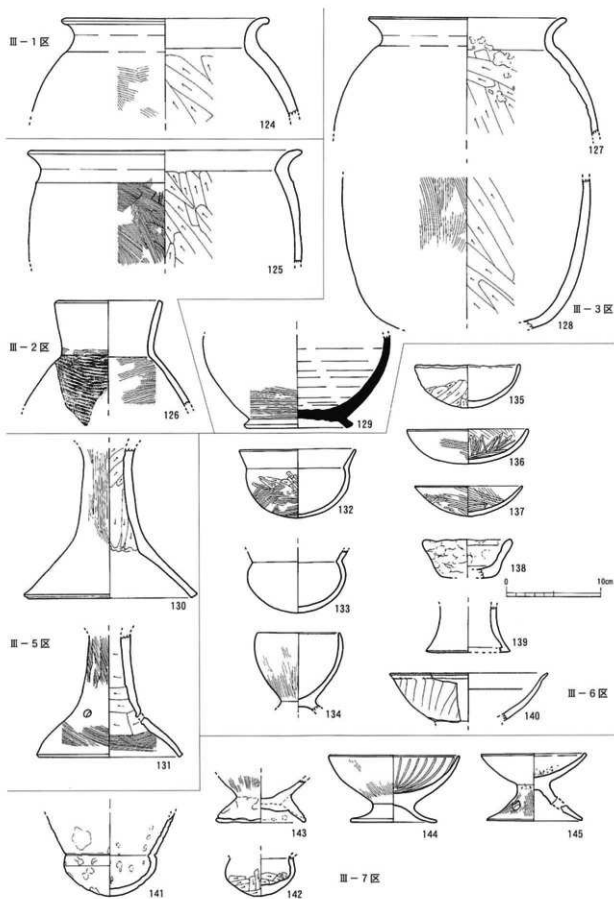
204から209は装飾品として一括して紹介する。

204はⅥ-1区出土であるが、攪乱層内からの出土である。大型の土製勾玉で端部を欠いている。205も土製勾玉である。頭部を欠いており、穿孔部分から割れている。206も土製勾玉である。小

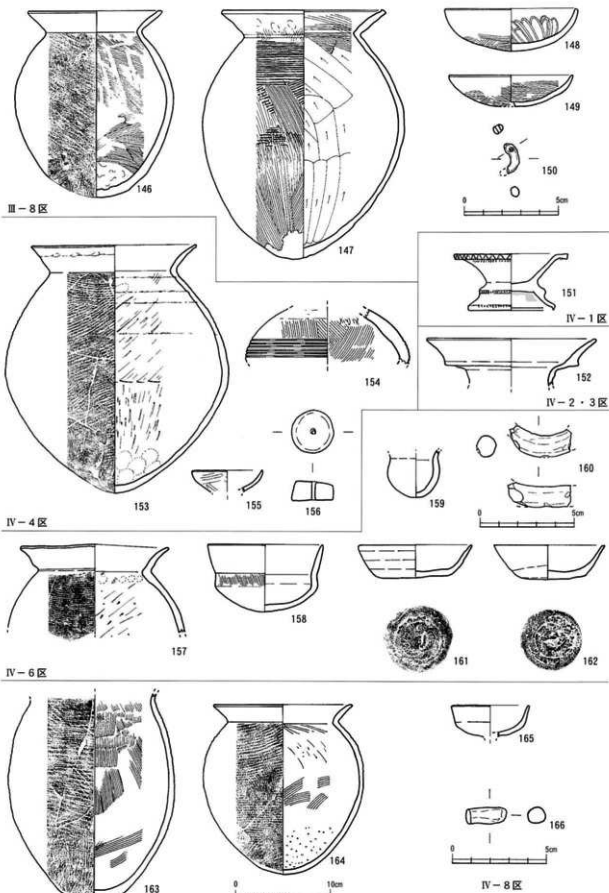
注1 2号溝と4号溝から3点出土している。「方保田東原遺跡」山鹿市文化財調査報告書第8集 2009

注2 溝から脚部を折損した資料が出土している。「南大門遺跡」玉名市文化財調査報告書第8集 平成12年3月

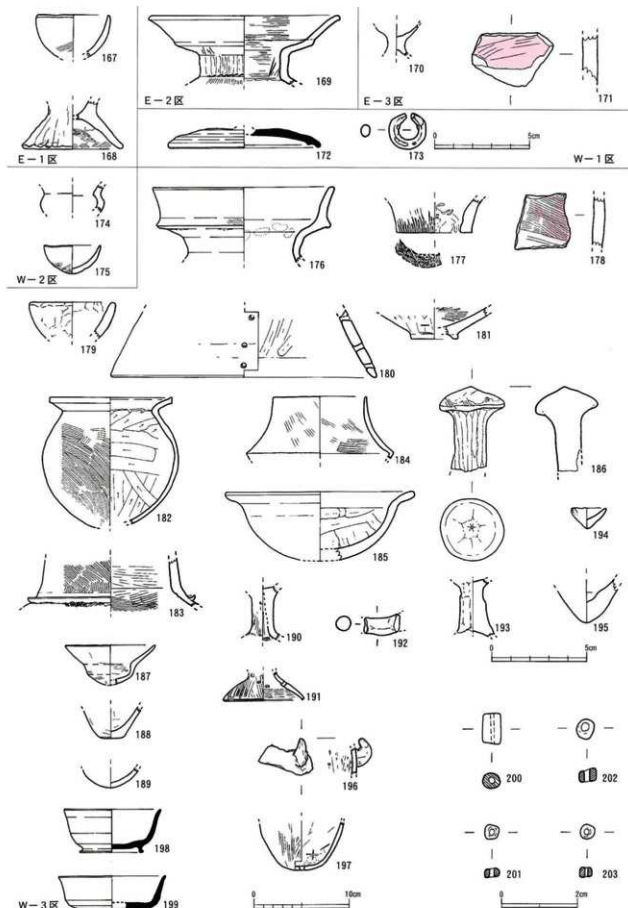
注3 昭和58年に第3次調査の際出土している。考察の中でも取り上げており、笠形銅製品との類似点や、上山神遺跡からジョッキ形土器の把手が存在していることも記載している。「方保田東原遺跡」山鹿市立博物館調査報告書第2集 1982



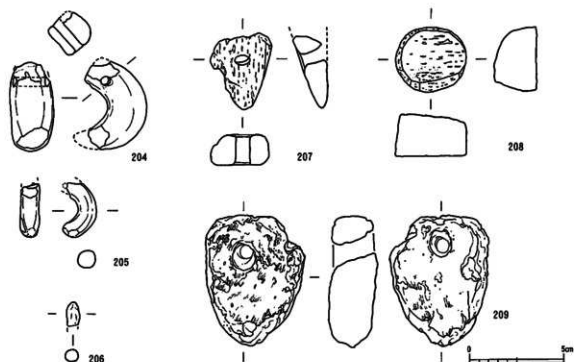
第23図 遺構に伴わない遺物実測図⑤ (Ⅲ区出土の遺物)



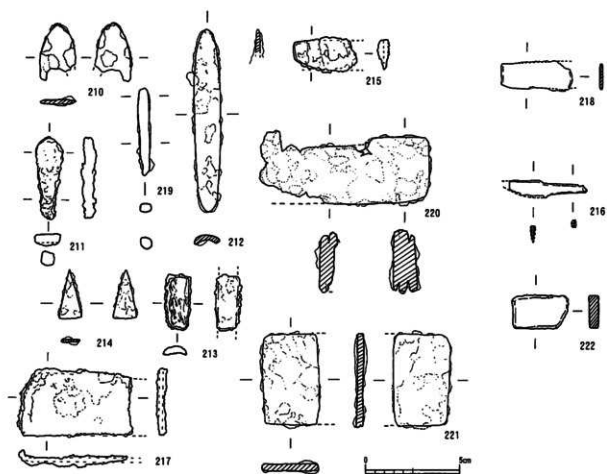
第24図 遺構に伴わない遺物実測図⑥ (Ⅲ・Ⅳ区出土の遺物)



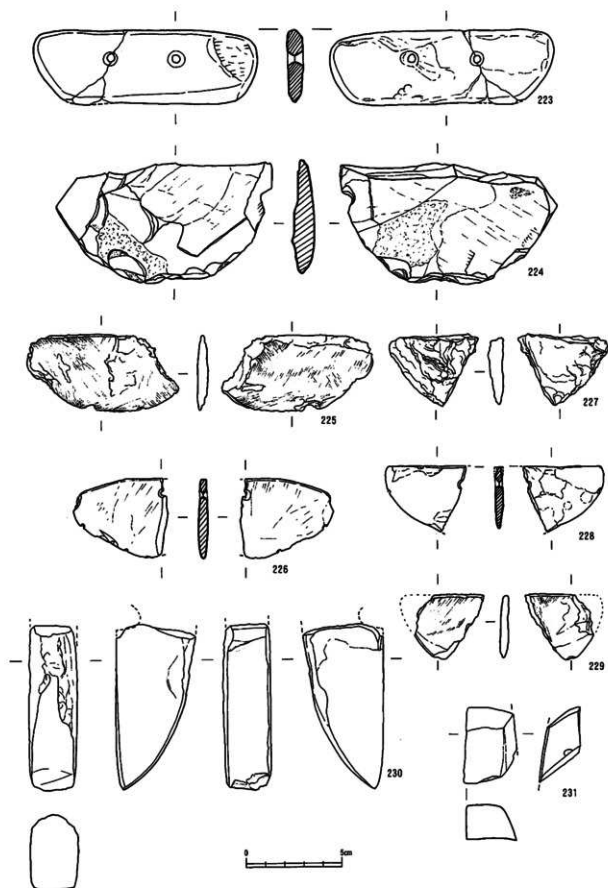
第25図 遺構に伴わない遺物実測図⑦ (E・W区出土の遺物)



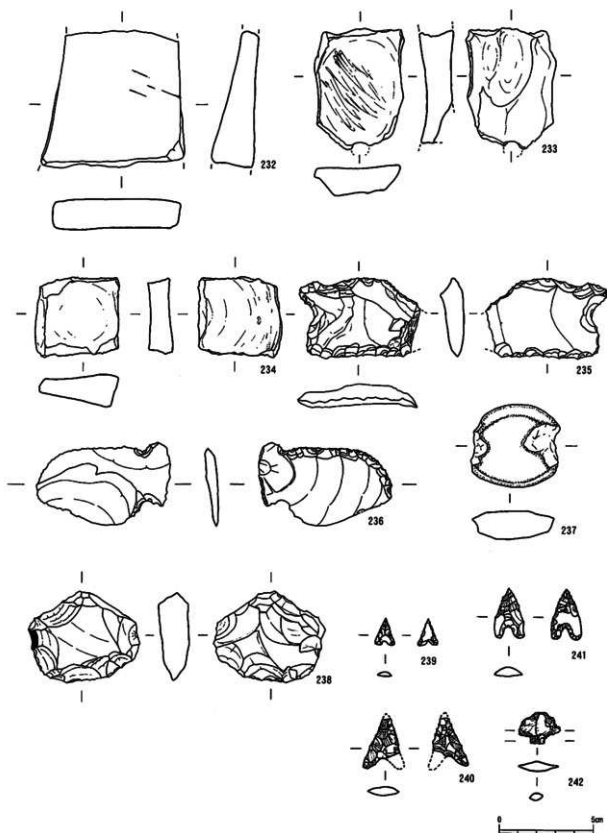
第26図 遺構に伴わない遺物実測図⑧（装飾品・軽石製品）



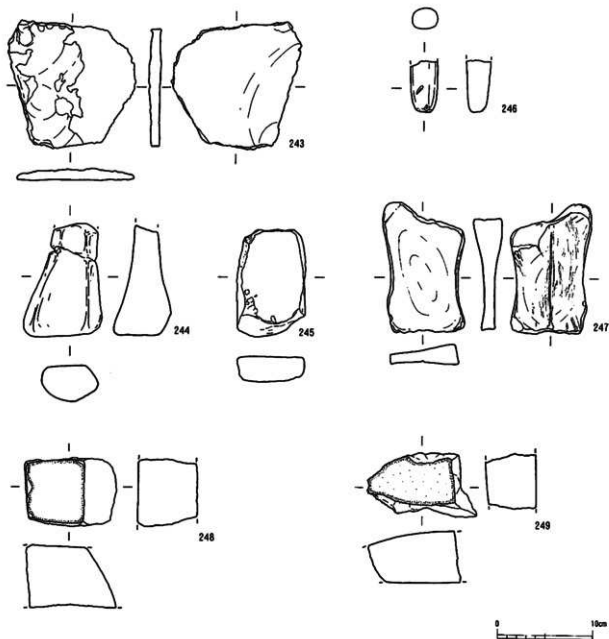
第27図 遺構に伴わない遺物実測図⑨（鉄器）



第28図 遺構に伴わない遺物実測図⑩(石器)



第29図 遺構に伴わない遺物実測図⑪（石器）



第30図 遺構に伴わない遺物実測図②(石器)

さくて先端部分のみなので他の土製品の可能性も残している。

⑧軽石製品 (第26図)

207から209は軽石製の加工品である。207と209は三角形の本体に1個の穿孔があり、紐を通して使用するようになっている。かつて菊鹿町竜口横穴から軽石製勾玉と三角形の飾り玉が出土しており^{注4}、同様の首飾りとして考えた。208は面取り

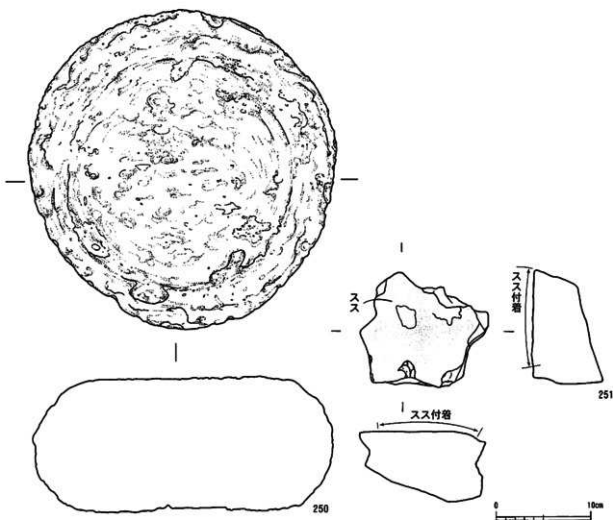
をしている軽石で、円柱状を呈している。用途は不明である。

⑨鉄器 (第27図)

210から222は鉄器である。210と211は鉄鏃で、ほぼ完全な姿をしている。212と213は鉋である。212はほぼ完全な姿である。214は鉄素材としての三角鉄片である。215は刀子の切先である。216も刀子である。217は鏃である。先端を欠いており、基部も折り返しの一部を残す程度である。218は手鏃である。折り返しを残している。219は不明鉄器である。断面が四角で鏃の茎かとも考えられる。220は当初鏃と思われたが、刃部が見られず、

注4 1号横穴から軽石製の人物頭部と共に勾玉2点と三角形の飾り玉1点が出土している。

「菊鹿町史資料編」菊鹿町 平成8年3月



第31図 遺構に伴わない遺物実測図⑬(石器)

厚みと重さから、鉄素材としての性格が強いようで鉄挺であろう。221は刃部を形成しており、身幅が均一であるところから手鎌である。222は厚みと刃部が見られないところから鉄素材としての鉄挺の一部であろう。

⑬石器 (第28～33図)

223から229は石包丁である。223は完成品であるが、変成岩でやわらかいため使用に際して折れている。224は粘板岩製未完成品である。粗打ちして形を整えている段階で、刃部の形成まで行っており、穿孔や研磨は見られない。225も粘板岩製の未完成品である。全体の形を整え、研磨を行なっているが穿孔は行なわれていない。砥石の痕が生々しい。226も粘板岩製で、穿孔部分から折れている。表面には研磨痕を残し、仕上げまでは至っていない状況であり、未完成品といえる。227は変成岩製の未製品片である。粗打ちし形を整えている段階で折れたものである。刃部は作ら

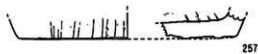
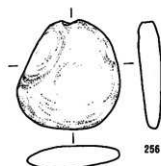
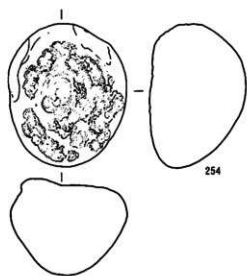
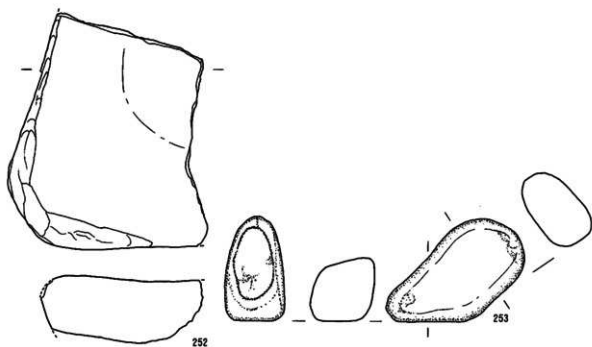
れているが研磨には至っていない。228は粘板岩製で穿孔部分から折れている。刃部の磨耗状況から使用段階での破損と考えられる。229は変成岩製の破片で、端部のみである。研磨も仕上げも完成している。230と231は挟り入り柱状片刃石斧である。230は砂岩製で挟り部分から折れて基部を欠いている。刃部は残りがよく研磨の状況が残っているが、側面や中央部では風化の痕が顕著である。231は研磨面を2面残しているが4面は切斷面である。

232から234は砥石である。

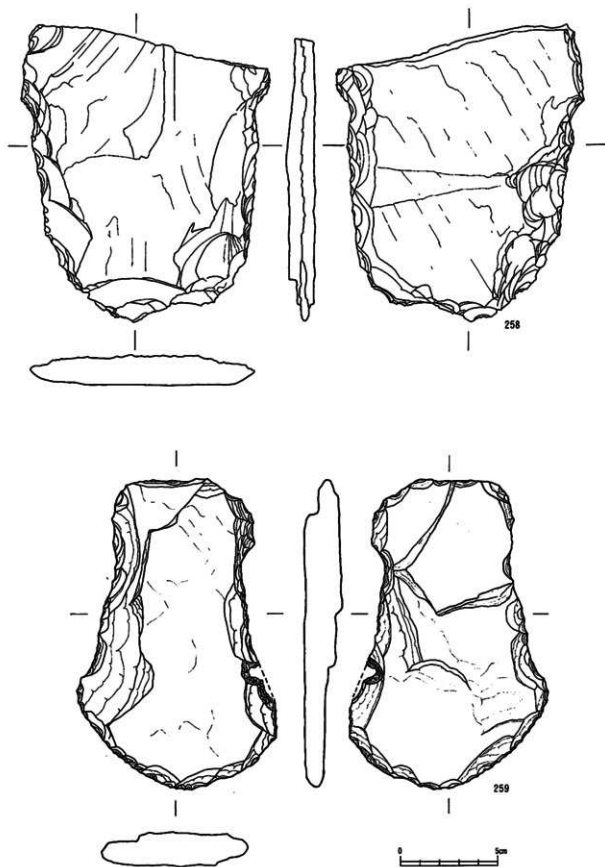
232は砂岩製で4面に研磨面を残している。先端は折れており、一部は小さなもので叩いた痕跡が均等に一列をなして並んでいる。荒砥から中砥である。

233は端部に穿孔がある移動式の砥石である。使用面は2面残し多くを欠いている。滑らかな肌をした石材で、仕上げ砥である。

234は上下と側面の3面を残し、他の3面は欠



第32図 遺構に伴わない遺物実測図⑭ (石器)



第33図 遺構に伴わない遺物実測図⑤（石器）

いている砥石である。仕上げ砥に近い。

235は安山岩製の石匙である。先端は折れたように見えるが自然面を巧みに利用したもので完形品である。表面は剥離で生じた稜線を残し、裏面には主要剥離面を残している。全体は刃部の形成で形を整えている。握みは小さく仕上げている。236も石匙である。出土したときは刺さったようにした状態であった。安山岩製で風化現象が著しい。握みは大きく、刃部は片面からの打ち出しを行なっている。237は自然石の石錘である。両端を打ち欠き網の錘として使用したものである。

238は僅かに1面に主要剥離面を残し周囲に刃部を形成した石器である。安山岩製で風化は少ない。刃部は交互剥離である。

239から241は黒曜石製の石鏃である。239は小さく僅か長さ14mm幅10mmである。小さくともきつちりと刃をつけている。

240は先端と基部の一部を欠いているが、作りは丁寧で両面きつちりと加工している。

241は剥片を利用した鏃で、主要剥離面を残し、先端部は加工している。

242は黒曜石製の石鏃である。先端部を欠いている。

243は砂岩で表面が剥離しているが研磨面を有し、裏面は主要剥離のままである。砥石としての利用がされている。荒砥である。244も砥石で、いわゆる天草砥石である。中砥である。245は砂岩製の荒砥で、小判型の形状で1面を研磨面としている。246は棒状をした石杵である。先端は折れているが残りには全面に研磨している。類似資料として第一次調査で出土した石杵がある。^{註5} 石質も同じで、アルコーズ質砂岩である。

247は仕上げ砥石で、4面が研磨面を残している。裏面には線状に1本細く刻まれている。使用段階での傷である。

248と249は石皿である。共に安山岩製で248は1面に、249は2面に研磨面を残している。

250は大きな円礫を利用した台石である。表裏2面を使用しており摩滅の痕が見られる。

251は煤の付着が著しい石材である。1面だけに硬くなった煤が付着し、他の面にはまったく見られない。用途不明の石で凝灰岩である。

252は石皿である。裏面は剥離しているが、表面は研磨が進み中央が窪んでいる。安山岩製である。253は石杵として使用されているもので、下面のみに研磨が見られる。254は円礫の1面に剥離痕を残すもので、敲打による剥離である。255

は礫の中央にくびれを入れたもので、刃部などには見られない。石錘であろう。256も1箇所にくびれを有する円礫で石錘である。257は中世時期の滑石製石鍋の底部片である。側面には煤が付着している。

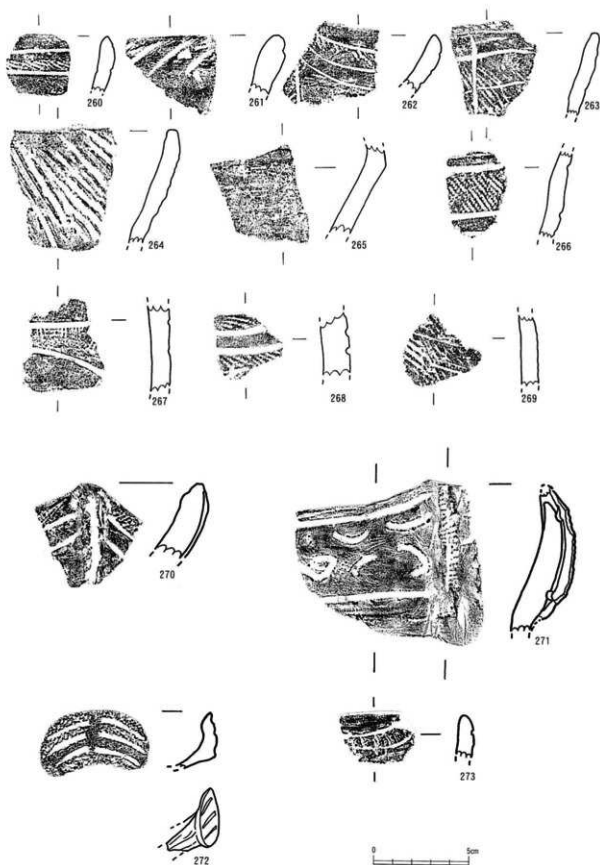
258と259は打製石斧である。258は大型で、基部は折れているが、刃部は摩滅している。259はほぼ完全な姿を留めている。共に変成岩製である。

①縄文土器（第34図）

260から273は縄文土器である。260は深鉢口縁部の破片で、端部は山形に尖っている。2本の沈線の間に二枚貝背面による擬似縄文の施文が見られる。261も深鉢口縁部の破片で、端部は山形に尖っている。北久根山式土器で斜めに刻み目を施している。262は波状口縁部の破片である。沈線に挟まれて擦り消し縄文を施している。263は深鉢口縁部の破片で、直交する沈線を施している。264も深鉢口縁部の破片で貝殻条痕文を施している。265は深鉢の胴部片である。266から268は沈線と擦り消し縄文を施している破片である。269は貝殻条痕文を施している破片である。270は波状口縁の深鉢片である。波状部分には縦に粘土を貼付け、沈線を施している。口縁部には擦り消し縄文を施している。271も波状口縁の深鉢片である。波状部分には縦に粘土を貼付け、沈線を施している。二枚貝背面による擬似縄文も施している。272は波状口縁の先端に作られた突起で、端部には沈線と擦り消し縄文を施している破片である。高坏になると考えられるが、類例を知らないので御教示願いたい。273は深鉢口縁部の破片である。沈線の間に二枚貝背面による擬似縄文を施している。

註5 遺構に伴わない遺物として取り上げており、その後赤色顔料加工用の石杵であることが判明した。

「方保田東原遺跡」山鹿市立博物館調査報告書第2集 1982



第34図 遺構に伴わない遺物実測図⑬ (縄文土器)

遺物觀察表 1

第1表 第1調査区出土遺物観察表①

調査区	遺物名	位置	部位	口径	器高	色調	粘土・混入物	焼成	外面調整	内面調整	黒斑	備考	
001	1	1号住	472	腰	口縁一部	20.2	7.5184/1 緑灰色	底石 赤褐色粒 雲母	良好	タテハク後ヨコナデ ・タタキ	縦ハヨコハク・ナデ	無	底1.2はほぼない程度のみ タタキはほとんどない程度のものではある 火をかけたまま一部は割れている。底部近くは外器面 は何割か割れている
001	2	1号住	472	腰	胴部	不明	10192/1 黒色	底石 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	タタキ	ナデ	無	
002	2	1号住		腰	胴下一底部	不明	7.5184/1 緑灰色	底石 角閃石 雲母	良好	ナデ	タテハク・ナデ	無	
003	3	1号住	473	腰	口縁一部	[21.6]	10198/4 淡黄褐色	底石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ・ナメハク後ヨコ ナメハク・ナデ後ヨコ ナメハク・ナデ	ナデ・ヨコハク・ナデ	無	
004	4	1号住	474 475	コップ形	ほぼ定形	8.7	10195/2 灰黄褐色	底石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナメハク後ナデ・ ナメハク・ナデ	ナデ	有	内器面全体に割れている
005	2	2号住		台付鉢	不明 底10.0	不明	10197/4 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ	ヨコナデ	無	無	
006	5	2号住		赤色顔料付 鉢	不明	不明	10198/4 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ・実等に割目	ヨコハク	有	全体に割れている	
007	5	1号住		縄文土器 深鉢	不明	不明	10195/2 底石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ・タテハク後ヨコ ナデ・ナメハク後ヨコ ナメハク・ナデ	ナデ	無		
008	5	4号住		ミニチュア土 器	不明	不明	7.5197/4 にぶい黄褐色	良好	指調整	指調整	無		
009	5	3号住		ミニチュア土 器	不明	不明	10198/4 にぶい黄褐色	良好	指調整	指ナデ	無		
010	7	1号住		ガラス小玉	外径 5mm 内径 1.1mm	高さ3mm	水色	—	—	—	—	—	
011	7	2号住		ガラス小玉	外径 3mm 内径 1mm	高さ2mm	緑褐色	—	—	—	—	—	
012	7	3号住		ガラス小玉	外径 5mm 内径 不明	高さ3mm	緑褐色	—	—	—	—	—	半次順している
013	2	3号住		サマカイト	不明	不明	—	—	—	—	—	—	重さ164g。古い割面のある石材。 石器ではない
014	6	3号住		須恵器 円蓋	不明	不明	5196/1 黄灰色	緻密な粘土	良好	ナデ	ナデ	無	
015	6	1号住		長頸蓋?	不明	不明	5195/6 明赤褐色	底石 石英 赤褐色粒	良好	タテハク後淡文	ヨコハク・ナデ	無	小片につき器種不明
016	6	2号住		縄文土器 深鉢	不明	不明	10195/2 底石 石英 角閃石 赤 褐色粒 雲母 白い石粒	良好	淡緑文	ヘラ調整	無	無	
017	6	5号住		黒磁石	不明	1.4×2.0	—	—	—	—	—	—	台形石器? 重さ1.4g
018	6	4号住		加工痕ある 破片	不明	4.8×2.1	—	—	—	—	—	—	サマカイト 重さ10.6g
019	8	2号住	641	腰	口縁一部	[21.8]	10194/1 緑灰色	底石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ・強いタテハク・タ タキ後タテハク・タタキ	ナデ・ナメハク・ タテハク	有	多量に残存者
020	8	2号住	640	腰	口縁一部	[20.4]	7.5198/3 淡黄褐色	底石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ・タタキ後ヨコ ナデ・タタキ	ナデ・ヨコハク・ナデ	有	
021	9	2号住	633	腰	口縁一部	[17.6]	10197/4 にぶい黄褐色	底石 石英 雲母	良好	ナデ・ナメハク・ ナデ 割文	ナデ・ナメハク・ ヨコナデ	有	縁分が染み出た様な褐色 (7.5194/4) 部分あり
022	11	2号住	647	小型丸底蓋	不明	不明	7.5197/4 にぶい黄褐色	良好	ナデ・指調整	ナデ 指ナデ	無	有	
023	10	2号住	642	鉢	ほぼ定形	13.4	5.4 にぶい黄褐色	底石 石英 角閃石	良好	ナメハク後ナデ	ヨコハク後ナデ	有	口縁部が少し歪

第2表 第1調査区出土遺物観察表②

遺物 調査 図録 番号	調査 図録 番号	通称名	P番号	材質	部位	口徑	高さ	色調	粘土・混入物	焼成	外面装飾	内面装飾	底斑	備考
024	10	2号住	642	土師	鉢	不明	13.6	2.5195/6 明赤褐色	灰石 石灰 角閃石	良好	ナデ ナデ後ヘラミ ガキ	ヘラミガキ	無	全体に赤っぽい
025	11	2号住	645	土師	底	不明	不明	10196/6 にぶい黄褐色	灰石	良好	ナデ	ヘラミガキ	有	縁の中は空洞になっている
026	14	3号住	617	土師	口縁一断面	17.3	不明	10197/1 にぶい黄褐色	灰石 石灰 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ ナデ後タテ ヘラ ナデ	ナデ ナデ後タテ ヘラ ナデ	有	図面上還元あり
027	17	3号住	621	土師	口縁一断面	17.5	不明	2.5198/2 灰白色	角閃石 雲母	良好	ナデ ナデ後タテ ヘラ ナデ	ナデ ナデ後タテ ヘラ ナデ	有	図面上還元あり
028	15	3号住	616	土師	口縁一断面	不明	不明	10198/4 流黄褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	内器面部に粘土層の混入。全体に還元層。底部が欠けている。図面上還元あり
029	16	3号住	619	土師	口縁一断面	18.8	26.7	10198/3 流黄褐色	灰石 角閃石	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	底面の欠損は意図的に削られた可能性あり。内器面底部に還元層
030	12	3号住	609	土師	口縁一断面	16	不明	7.5198/4 流黄褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
031	19	3号住	624	土師	口縁一断面	15.8	不明	10198/4 流黄褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
032	13	3号住	613 621	土師	口縁一断面	14.3	19.1	10197/4 にぶい黄褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
033	13	3号住	625	土師	口縁一断面	11.4	13.6	10197/2 流黄褐色	灰石 角閃石	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
034	20	3号住	622	土師	口縁一断面	[12.7]	12.6	10195/2 灰黄褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
035	18	3号住	629	土師	口縁一断面	15	28.2	10196/1 褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
036	21	3号住	613	土師	口縁一断面	不明	不明	10196/4 にぶい黄褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
037	20	3号住	615	土師	口縁一断面	不明	不明	黒色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
038	26	3号住	610	土師	口縁一断面	[11.5]	8.5	10197/3 にぶい黄褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
039	26	3号住	626	土師	口縁一断面	[11.2]	7.9	7.5197/6 褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
040	24	3号住	628	土師	口縁一断面	15.4	9.5	2.5197/8 褐色	角閃石	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
041	26	3号住	618	土師	口縁一断面	10.2	4.6	10197/4 にぶい黄褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
042	26	3号住	620	土師	口縁一断面	11.6	4.5	10197/4 にぶい黄褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
043	27	3号住	626	土師	口縁一断面	12.3	3.5	2.5195/1 黄褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
044	27	3号住	618	土師	口縁一断面	11.1	3.6	10198/4 にぶい黄褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
045	25	3号住	623	土師	口縁一断面	15.2	8.2~ 8.35	10198/3 流黄褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
046	23	3号住	608	土師	口縁一断面	21.8	不明	10196/4 にぶい黄褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり
047	22	3号住	608	土師	口縁一断面	不明	不明	7.5192/1 黒色	灰石 雲母	良好	ナデ ナデ	ナデ ナデ	有	図面上還元あり

第3表 第1調査区出土遺物観察表③

調査 番号	調査 区名	時期	種類	部位	口徑	器高	色調	粘土・混入物	状態	外面装飾	内面装飾	底装飾	備考
048	22	1	3号住	高坪	不明	不明	10YR6/3 にぶい黄褐色	長石 雲母	良好	ヘラミガキ	ヘラミガキ	有	無
049	22	2	3号住	高坪	不明	不明	10YR7/4 にぶい黄褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	タテハゲナデ・ヘラミ ガキ・タテハゲナデ	ヘラミガキ・ハケメ	有	無
050	25	2	3号住	台付鉢?	不明	不明	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	有	無
051	26	5	3号住	手づくね	不明	3.4	10YR6/3 赤褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	指調整	指調整	有	無
052	22	4	3号住	ミニチュア土器	不明	不明	10YR7/3 にぶい黄褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	指調整	指調整	有	無
053	22	3	3号住	ミニチュア土器	不明	2.6	7.5YR6/2 赤褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	ヘラ調整	ヘラ調整	有	無
054	27	3	3号住	土製均互	不明	3.2	7.5YR6/6 赤褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	有	無
055	34	3	3号住	小型土器	不明	12.4	7.5YR6/6 赤褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	ヘラミガキナデ	ヘラミガキナデ	有	無
056	32	2	3号住	小型土器	不明	13.5	7.5YR6/6 赤褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ・タテハゲ	ナデ・タテハゲ	有	無
057	75	3	3号住	不明土器	不明	不明	5YR6/6 赤褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	有	無
058	76	4	3号住	注口土器	不明	不明	2.5YR6/1 灰白色	長石 雲母 赤褐色	良好	ハゲナデ	ハゲナデ	有	無
059	74	1	3号住	口縁一層部	不明	25.6	7.5YR6/3 にぶい黄褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ・タテハゲ	ナデ・タテハゲ	有	無
060	74	2	3号住	口縁一層部	不明	25.4	10YR7/1 灰白色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ・タテハゲ	ナデ・タテハゲ	有	無
061	76	2	3号住	底面	不明	不明	5YR6/6 赤褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	有	無
062	76	1	3号住	ほぼ全形	不明	12.6	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ・タテハゲ	ナデ・タテハゲ	有	無
063	75	1	3号住	破片	不明	不明	10YR6/1 灰白色	長石 雲母 赤褐色	良好	指調整	指調整	有	無
064	30	2	3号住	脚部	不明	不明	2.5YR6/2 灰白色	長石 雲母 赤褐色	良好	指調整	指調整	有	無
065	76	3	3号住	ほぼ全形	不明	14.6	7.5YR7/6 赤褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ・タテハゲ	ナデ・タテハゲ	有	無
066	75	2	3号住	口縁一層部	不明	14.4	5YR6/6 赤褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	有	無
068	85	5	3号住	縄文土器	不明	不明	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	有	無
067	74	3	3号住	破片	不明	不明	黒色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	有	無
068	29	1	3号住	脚部	不明	不明	7.5YR6/1 にぶい黄褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	有	無
069	87	1	3号住	ミニチュア土器	不明	不明	2.5YR7/2 赤褐色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	有	無
070	35	3	3号住	縄文土器	不明	不明	2.5YR2/1 黒色	長石 雲母 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	有	無

第4表 第1調査区出土遺物観察表④

調査区	遺物	土層	通称名	P番号	種類	部位	口径	高さ	色調	粘土・混入物	焼成	外面調整	内面調整	黒斑	備考
071	30	1	通模外Ⅰ区	109	鏝	口縁一部	22.1	不明	1012/7/4 にぶい黄褐色	灰石 石英 赤褐色	良好	ナデ	ナデ・ヘラケズリ	無	外面調整部が減少している
072	28	1	通模外Ⅰ区	507	鏝	口縁一部	[17.8]	不明	10168/2 灰白色	灰石 石英 赤褐色	良好	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	有	全体に1個の 口縁部内面に黒斑あり
073	31	1	通模外Ⅰ区	505	二重口鏝	口縁一部	[23.6]	不明	7.5187/4 にぶい褐色	灰石 石英 赤褐色	良好	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	有	全体に1個の 口縁部内面に黒斑あり
074	35	2	通模外Ⅰ区	506	鉢	口縁一部	13.5	4.5	10195/4 にぶい黄褐色	灰石 石英 赤褐色	良好	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
075	34	1	通模外Ⅰ区	112	台付鉢	体部	[10]	不明	7.5187/4 にぶい褐色	灰石 石英 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	無	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
076	82	2	通模外Ⅰ区		甕	体部一部	不明	不明	10197/2 にぶい黄褐色	灰石 雲母	良好	指調整	指調整	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
077	32	4	通模外Ⅰ区	33	小型丸底釜	口縁一部	不明	不明	7.5186/6 褐色	灰石 石英 赤褐色	良好	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
078	32	3	通模外Ⅰ区	30	小型丸底釜	口縁一部	12.3	不明	2.5185/6 明赤褐色	灰石 角閃石	良	ナデ・ヘラミカキ ナデ	ナデ・ヘラミカキ ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
079	32	1	通模外Ⅰ区	33	小型丸底釜	口縁一部	13	不明	2.5185/8 明赤褐色	灰石 角閃石	良好	ナデ・ヘラミカキ ナデ	ナデ・ヘラミカキ ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
080	34	2	通模外Ⅰ区	35	鉢	口縁一部	[10.4]	7.1	5186/6 褐色	灰石 石英 赤褐色	良好	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
081	33	1	通模外Ⅰ区	31	釜	胴部一部	不明	不明	5186/3 褐色	灰石 石英 赤褐色	良好	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
082	35	1	通模外Ⅰ区	36	鉢	口縁一部	10.6	3.5	10198/3 淡黄褐色	灰石 赤褐色	良好	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
083	87	2	通模外Ⅰ区		鉢	体部	[7.6]	不明	7.5187/6 褐色	灰石 角閃石 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
084	37	1	通模外Ⅰ区	541	手づくね 器台	脚部	不明 底 9.4	不明	7.5185/1 褐色	灰石 石英 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
085	37	2	通模外Ⅰ区	24	器台	器台一部	[10.5]	不明	10197/3 にぶい黄褐色	灰石 角閃石 赤褐色	良好	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
086	87	3	通模外Ⅰ区		鉢	脚部	不明 底 8.6	不明	10198/3 淡黄褐色	灰石 角閃石 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
087	36	1	通模外Ⅰ区	21	高坏	口縁一部	[22.4]	14.1	10197/4 にぶい黄褐色	灰石 角閃石 赤褐色	良好	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
088	38	1	通模外Ⅰ区	19	甕	口縁一部	[28.6]	不明	7.5187/6 褐色	灰石 角閃石 赤褐色	良好	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	ナデ・ヘラケズリ後 ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
089	54	2	通模外Ⅰ区	424	ジョッキ形 杯	胴部一部	不明 底 12	不明	10198/3 淡黄褐色	灰石 角閃石	良	ナデ	ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
090	52	3	通模外Ⅰ区	77	スプーン形 杯	柄	不明	不明	10198/2 灰黄褐色	灰石 角閃石	良好	指調整・ハケメ調整	指調整・ハケメ調整	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
091	46	3	通模外Ⅰ区	460	鉢	口縁一部	[13]	不明	10198/3 淡黄褐色	灰石 石英	良	ナデ	ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
092			通模外Ⅰ区		石加工品		9.1×5.6	厚さ1.7		滑石		ノミで調整	ノミで調整		底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
093	43	1	通模外Ⅰ区	47	鏝	口縁一部	[17.2]	不明	2.5182/2 灰白色	灰石 角閃石	良好	ナデ・タテハケ	ナデ・タテハケ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり
094	47	1	通模外Ⅰ区	52	鏝	口縁一部	15.5	不明	10196/3 にぶい黄褐色	灰石 石英 赤褐色	良好	ナデ・タテハケ ナデ	ナデ・タテハケ ナデ	有	底面外側にナデで仕上げられた様 な模様が現れ、内面に黒斑あり

第5表 第1調査区出土遺物観察表⑤

調査 番号	調査 区	遺物名	時期	器種	部位	口径	器高	色調	粘土・混入物	焼成	外面調整	内面調整	周壁	備 考
095	50	1	透模外口区	51	高坏	坏部	[27.8]	5187/6 褐色	長石 石英 赤褐色色 雲母	良好	ナデ・ヘラ調整後ナデ	ナデ・ヘラミナギ	無	
096	42	1	透模外口区	48	腰	口縁・胴部	[24]	10187/3 にぶい黄褐色	長石 石英	良好	ナデ・タチハク	ナデ・ヘラタスリ	無	
097	55	1	透模外口区	499	坏蓋 須恵器	坏部	[15.6]	5956/1 黄褐色	長石	良好	ナデ	ナデ	無	裾に転用 蓋の裏側を利用したと 思われる
098	54	1	透模外口区	515	ジョウキ形 須恵器	胴部・底部	不明 底 13	10187/3 黄褐色	長石 角閃石	良好	タチハク・ナデ・ハ ナデ	タチハク後ナデ・指 ナデ	有	
099	51	1	透模外口区	115	坏 須恵器	ほぼ完形	13.3	516/2 灰オリーブ色	長石 長石 角閃石	良好	ナデ	ナデ	無	
100	52	2	透模外口区	524	ミナチヤ土器 鉢	胴部・底部	7.2~7.4 3.8	10188/2 灰白色	長石 赤褐色色	良好	指押さえ	指押さえ	有	
101	50	3	透模外口区	122	鉢	口縁・胴部	[28.8]	10188/3 淡黄褐色	長石 角閃石 赤褐色色 雲母	良好	ナデ後ヘラミナギ・ナ ナメハク後ヘラミナギ ナデ・ヨコハク	ナメハク後ヘラミナギ ナデ・ヘラタスリ・ヘ ラタスリ・指押さえ	無	
102	40	1	透模外口区	68	腰	口縁・底部	[18.9]	5185/6 明赤褐色	長石 角閃石 赤褐色色 雲母	良	ナメハク・ナデ	ナメハク・ナデ	有	胴部に引掻き傷のような痕あり
103	45	2	透模外口区	66	小型丸底蓋	胴部・底部	不明	2.5185/8 明赤褐色	長石 角閃石 赤褐色色	良	ナメハク後ヘラミ ナギ・ヘラ調整	ナデ	有	内器面底部に煤付着 胴部辺りに剥離あり
104	44	1	透模外口区	63	蓋	口縁・胴部	16.8	5185/8 明赤褐色	石英 赤褐色色	良好	ナデ	ナデ	有	漆が明けて剥れた様に見える 毛ミ盛らしき跡が内器面あり
105	45	3	透模外口区	62	蓋	口縁・底部	[14.2]	7.5185/4 明褐色	石英 角閃石	良好	ナデ	ナデ	有	
106	46	1	透模外口区	72	小型丸底蓋	口縁・胴部	[13.8]	2.5187/6 にぶい赤褐色	長石 角閃石	良好	ナデ	ナデ	有	
107	46	2	透模外口区	732	小型丸底蓋	口縁・胴部	[13]	7.5187/6 褐色	長石 角閃石	良好	ナデ	ナデ	有	
108	53	1	透模外口区	723	台付鉢	口縁・胴部	[8]	5186/8 褐色	長石	良	ナデ	ナデ・ヘラミナギ	無	ベンガラ?付着
109	53	2	透模外口区	64	瓶	完形	15	2.5187/4 淡赤褐色	長石 角閃石	良好	ナデ・ヘラタスリ	ハク調整	無	
110	50	2	透模外口区	69	器台	口縁・裾部	[8.8]	2.5185/8 明赤褐色	長石 石英	良好	ナデ・タチハク後ヘ ラミナギ・ナデ	ナメハク後ナデ・ナ デ	有	穿孔1ヶ残存
111	49	1	透模外口区	554	蓋	胴部・底部	不明	5186/8 褐色	長石 角閃石	良	ナデ	ハク調整後指ナデ? タタキ	無	
112	41	3	透模外口区	730	腰	完形	14.5	5186/6 褐色	長石 角閃石 赤褐色色 雲母	良好	ナデ・ハク後ナデ・ナ デ	ナデ・ヘラタスリ	有	
113	41	1	透模外口区	727	腰	ほぼ完形	14.6	7.5183/1 黒褐色	長石 赤褐色色	良	ヨコハク後ナデ・ナ デ・ナメハク	ナデ・ヘラタスリ	無	近な形をしている 口縁部から胴部にかけて剥離が激しい 見られる
114	39	1	透模外口区	729	腰	口縁・底部	19	5186/6 褐色	長石 赤褐色色	良好	ナデ	ナデ・ヘラタスリ	有	
115	48	1	透模外口区	726	蓋 土師器	口縁・胴部	16.4	7.5188/3 淡黄褐色	長石	良好	ナデ	ナデ	無	ベンガラを外・内器面に付着 PT28と同一個体では?
116	48	2	透模外口区	728	蓋? 土師器	胴部・底部	不明	10187/3 にぶい黄褐色	長石	良好	タチハク	ヘラタスリ	有	ベンガラ外器面に付着
117	41	2	透模外口区	551	腰	口縁・胴部	[13.2]	5185/6 明赤褐色	石英 赤褐色色	良好	ナデ・タチハク後ナ メハク・タタキ	ナデ・ヘラタスリ	無	粘土土の顔目痕あり
118	45	1	透模外口区	544	小型丸底蓋	完形	13.3	2.5186/6 褐色	長石	良好	ナデ	ナデ	有	きれいな形をしている

第6表 第1調査区出土遺物観察表⑥

調査区	調査区番号	遺物名	番号	数量	部位	口径	高さ	色調	粘土・混入物	焼成	外面調整	内面調整	黒斑	備考
119	43	2	遺物外II区	555	蓋	口縁・底部	17	7.5187/6 褐色	長石 角閃石	良好	ナデ	ナデ・ヨコハケ	無	
120	55	2	遺物外II区	557	ミニチュア土器	口縁・底部	5	10188/3 淡黄褐色	長石 角閃石	良	指調整	指調整	無	
121	52	1	遺物外II区	725	ミニチュア土器	口縁・底部	4.4 3.3	10187/3 にふい黄褐色	長石 石英 赤褐色 雲母	良好	指調整	指調整	有	底部はつまみ出した様な変底
122	87	5	遺物外III区		ミニチュア土器	底部	不明 底2.8	10188/3 淡黄褐色	長石 石英 赤褐色	良好	ナデ	ハケム	有	
123	51	2	遺物外II区	751	器台?	底部	不明	10187/4 にふい黄褐色	長石 角閃石	良好	ナデ	ナデ	無	
124	60	1	遺物外III区	74	蓋	口縁・底部	[10]	7.5187/6 褐色	長石 石英 赤褐色	良好	ナデ	ナデ・ヨコハケ後ナデ	無	
125	59	1	遺物外III区	583	蓋	口縁・底部	[27]	5187/4 にふい褐色	長石 石英 赤褐色	良好	ナデ	ナデ・ランダムなハケム	有	
126	61	1	遺物外III区	580	蓋	口縁・底部	[10.4]	10187/4 にふい黄褐色	長石 石英 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナデ・クタキ後ナデ	無	
127	60	2	遺物外III区	87	蓋	口縁・底部	19.7	10185/2 灰黄褐色	長石 石英 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	有	長石の粒が大きい
128	59	2	遺物外III区	91	蓋	胴部	不明	7.5186/4 にふい褐色	長石 石英 赤褐色	良好	タテハケ後ナデ	ヘラケズリ	無	
129	62	1	遺物外III区	81	蓋	胴部	不明	N4/ 灰色		良好	ナデ・ハケム	ヘラナデ	無	密な粘土 内面調整部に自然検出している
130	63	3	遺物外III区	639	蓋	底部	不明 底18.2	10188/3 淡黄褐色	長石 石英 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ヘラケズリ・ナデ	無	
131	63	1	遺物外III区	637	蓋	底部	不明 底15.4	10186/2 灰黄褐色	長石 石英 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナメハケ後ヘラミガキナデ・ヨコハケナデ	有	焼成前穿孔3ヶあり
132	65	4	遺物外III区	675	鉢	口縁・底部	[12]	5185/6 褐色	長石 石英 赤褐色	良好	ナデ	ナデ・ヘラケズリ	有	
133	65	5	遺物外III区	674	鉢	胴部・底部	不明	7.5187/6 褐色	長石 石英 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	無	
134	66	1	遺物外III区	655	台付鉢	口縁・底部	[8.4]	N3/ 暗灰色	長石 石英 赤褐色	良好	ナデ・タテハケ後ナデ	ナデ	有	
135	64	3	遺物外III区	659	鉢	完形	10.9	N2/ 黒色	長石 石英 赤褐色	良好	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	有	口縁部が少し歪
136	65	3	遺物外III区	658	鉢	口縁・底部	12.4	10188/3 淡黄褐色	長石 石英 赤褐色 雲母	良好	ハケ後ナデ	ナデ・ハケ後ナデ	無	
137	64	4	遺物外III区	660	鉢	完形	11.3	5185/6 明赤褐色	長石 石英 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナデ・ハケ後ヘラミガキ	無	
138	66	4	遺物外III区	662	鉢	口縁・底部	[9]	10186/4 にふい黄褐色	長石 角閃石 赤褐色	良好	指調整・ナデ	指ナデ	有	
139	87	6	遺物外II区		ジョッキ形	胴部・底部	不明 底9	10186/4 にふい黄褐色	長石 石英 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナデ	有	図面上部元あり
140	67	2	遺物外III区	105	碗	胴部	[16.6]	5187/2 灰白色	角閃石	良好	ナデ	ナデ	無	密な粘土
141	64	2	遺物外III区	749	小瓶丸底蓋	胴部・底部	不明	5185/6 明赤褐色	長石 石英 赤褐色	良好	ナデ	ナデ	無	内、外面調整が美しい
142	66	2	遺物外III区	682	ミニチュア土器	底部	不明	10187/3 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石	良好	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ヘラケズリ	無	

第7表 第1調査区出土遺物観察表⑦

調査区	調査区番号	遺物名	P番号	材質	部位	口径	器高	色調	粘土・混入物	焼成	外面調整	内面調整	黒脱	備 考
143	67	1 透櫛外Ⅲ区	135	手づね 梗	底部一脚部	不明 底 9	不明	10186/3 にふい黄褐色	石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	タタハク後ナデ	ナメハク ナデ	有	粘土粒の粗目面あり 意な形をしている 図面上還元あり
144	64	1 透櫛外Ⅲ区	679	台付鉢	口縁一脚部	13.6	7.2	5187/8 褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	タタハク後ナデ	ナデ	無	ナデ後ヘラミガキ ナデ
145	63	2 透櫛外Ⅲ区	680	高坏	口縁一脚部	10.8	7	5185/6 明赤褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	タタハク	無	焼成前穿孔 3ヶあり
146	58	1 透櫛外Ⅲ区	699	壺	ほぼ完形	[13.8]	19.9	10187/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	タタハク後ナデ	有	ナデ ナメハク後 ナデ ナメハク後 ナデ ナメハク後
147	57	1 透櫛外Ⅲ区	700	壺	ほぼ完形	16.7	26.5	7.5186/4 浅黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	タタハク	無	ナデ後ヨコハケ・ヨ コハケ・ヘラケスリ
148	65	1 透櫛外Ⅲ区	743	鉢	口縁一脚部	13.6	4.5	5186/6 褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ヘラミガキ	無	外面底部に黒く煤付着
149	65	2 透櫛外Ⅲ区	743	鉢	口縁一脚部	[13]	3.4	5186/6 褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ハケメ	無	
150	67	3 透櫛外Ⅲ区	219	土製勾玉	破片	不明	不明	10187/3 にふい黄褐色	石英 角閃石	良好	ナデ	ハケメ	有	図面上還元あり
151	77	1 透櫛外Ⅲ区	17	鼓形器台	口縁一脚部	12	6	10186/2 灰白色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナデ	有	内面底部に赤色焼成が薄く残る 図面上還元あり
152	79	2 透櫛外Ⅲ区		壺	口縁一脚部	[17.8]	不明	7.5186/3 浅黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナデ	無	
153	68	1 透櫛外Ⅲ区	612	壺	口縁一脚部	17.3	26.5	10186/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	タタハク・タタキ 後ナメハク・ナデ	有	内面底部に黒く煤付着 図面上還元あり
154	80	1 透櫛外Ⅲ区		壺	胴部	不明	不明	7.5187/6 褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナメハク	有	意な形 図面上還元あり
155	83	3 透櫛外Ⅲ区		ミニチュア土器	底部	[7.4]	不明	7.5187/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナデ	無	意な形 図面上還元あり
156	56	1 透櫛外Ⅲ区		紡錘器	完形	3.8×4.4	1.7~2	7.5187/3 にふい黄褐色	長石	良好	ナデ	ナデ	有	重さ49g 図面上還元あり
157	70	2 透櫛外Ⅲ区	664	壺	口縁一脚部	15.5	不明	10186/2 灰白色	長石 赤褐色粒	良好	ナデ	タタキ	有	ナデ・指圧痕・ヘラ ケスリ
158	71	1 透櫛外Ⅲ区	677	鉢	口縁一脚部	[12.1]	7.2	7.5187/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	タタハク	無	
159	72	3 透櫛外Ⅲ区	698	鉢	口縁一脚部	不明	5	7.5186/4 浅黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナデ	無	
160	67	4 透櫛外Ⅲ区	140	ミニチュア土器	肥厚	不明	不明	10187/3 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナデ	無	
161	72	2 透櫛外Ⅲ区	667	土器器	口縁一脚部	12	3.5	7.5187/3 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナデ	無	
162	72	1 透櫛外Ⅲ区	666	土器器	口縁一脚部	11.8	4.6	10186/2 浅黄褐色	長石 角閃石	良好	ナデ	ナデ	無	
163	70	1 透櫛外Ⅲ区	665	壺	胴部一脚部	不明	不明	10186/2 灰白色	長石	良好	ナデ	ナデ	無	有 やや意な形
164	69	1 透櫛外Ⅲ区	702	壺	口縁一脚部	14.6	18.1	7.5186/1 灰白色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	タタキ	有	全体に煤付着 内面底部に黒く煤 ケスリ・ヘラ調整
165	83	2 透櫛外Ⅲ区		壺	口縁一脚部	[8]	不明	10186/2 灰白色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナデ	無	
166	73	1 透櫛外Ⅲ区	703	土製品	破片	—	—	10187/8 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石	良好	ナデ	ナデ	無	重さ2g

第8表 第1調査区出土遺物観察表⑧

遺物 番号	品名・材質	通称名	登録 P番号	部位	口径	器高	色調	粘土・埋入物	焼成	外面調整	内面調整	黒曜	備考
167	78 6	遺構外 E-1	ミニチュア7土器 目	口縁・胴部	7.4	不明	10182/2 灰白色	長石 石英 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ・ナナメハク後 ナデ	ナデ	有	焼成不純土 図面上還元あり
168	86 1	遺構外 E-1	手づくね 壺	胴部	不明 底 10	不明	10187/4 にふい黄褐色	長石 石英 赤褐色粒 雲母	良好	手づくね 未調整 ナデ	ナデ	有	底の形 有
169	79 3	遺構外 E-3	壺	口縁・胴部	[19.4]	不明	7.5192/3 浅黄褐色	長石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ 後へうミ ナデ	ナデ	有	外面図上縁部に焼成らしき痕あり
170	78 5	遺構外 E-3	ミニチュア7土器 台付鉢	胴部・胴部	不明	不明	10185/2 灰黄褐色	長石 石英 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ	ナデ	有	図面上還元あり
171	88 6	遺構外 E-3	赤色顔料土器 外脰	破片	不明	不明	10188/4 浅黄褐色	長石 角閃石	良好	ナナメハク後ナデ	ナナメハク	無	ベンガラ付着 内面図が磨かれてい
172	81 2	遺構外 W-1	外脰 環形器	外脰	[15.6]	不明	N5/ 灰色	長石 角閃石	良好	ナデ	ナデ 工具によるナデ	無	焼成不純土
173	84 5	遺構外 W-1	耳環	ほぼ完形	1.9×2 0.6×0.5	厚	銅地金銀張	-	-	-	-	-	重さ4.5g 傷の場所から縁部が覗いている
174	78 2	遺構外 W-2	ミニチュア7土器	胴部・胴部	不明	不明	7.5196/3 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石	良好	ナデ	ナデ	有	図面上還元あり
175	78 1	遺構外 W-2	ミニチュア7土器	口縁・底部	[5.6]	3	10188/2 灰白色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ ハク調整後ナデ	ナデ	有	口縁部少し歪 図面上還元あり
176	79 1	遺構外 W-3	壺	口縁・胴部	[18.6]	不明	10187/3 にふい黄褐色	長石 赤褐色粒	良好	ナデ 実等上にナナ メハク	ナデ	有	無
177	84 1	遺構外 E-8、W-3	器台	底部	不明 底 8	不明	10185/2 灰黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	タテハク後ナデ	ハク調整後ナデ	無	底に線状の模様が入っている
178	88 5	遺構外 W-3	赤 色顔料土器	破片	不明	不明	7.5187/4 にふい黄褐色	長石 角閃石	良好	ナナメハク	ナナメハク	有	ベンガラ付着
179	78 4	遺構外 W-3	ミニチュア7土器 目	口縁・胴部	8.6	不明	10185/1 褐色	長石 石英 角閃石	良好	ナデ	ナデ	有	図面上還元あり
180	80 2	遺構外 W-3	何かの器台	胴部	不明 底 27.8	不明	10187/4 にふい黄褐色	長石 石英 赤褐色粒	良好	ナデ	へう調整・ナデ	無	器高3.3クが斜方向に並ぶ 古代工銀器 図面上還元あり
181	84 2	遺構外 W-3	鉢	底部	不明	不明	N2/ 黒色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒	良好	へう調整・ナデ	ナナメハク	有	かき取りは欠けている はっきりし た形は不明
182	90 1	遺構外	小形壺	口縁・胴部	12	不明	10188/3 浅黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒	良好	ナデ・ハクメ	ナデ・ヘラクズリ	有	土質は硬い 図面上還元あり
183	79 4	遺構外 中央西側	壺	胴部	不明	不明	5196/4 にふい黄褐色	長石 雲母	良好	ナナメハク・ナデ 磨盤文	ナナメハク後ナデ 逆方向からナナメハク	有	図面上還元あり
184	83 1	遺構外南西部	脚付鉢	口縁・底部	[9.8]	不明	10185/3 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒	良好	ナナメハク後ナデ	ナナメハク後ナデ	有	焼成不純土
185	82 1	遺構外南西部	古代の鉢	口縁・底部	[19.4]	不明	7.5187/4 にふい黄褐色	長石 角閃石 赤褐色粒	良好	ナデ	ナデ・ヘラクズリ	有	無
186	90 2	遺構外	ジョウキ形	把手	不明	不明	10187/6 にふい黄褐色	長石 雲母	良好	ハク後へうミナカキ	へうミナカキ	有	袋跡品と思われる
187	78 3	遺構外 E-8、W-3	ミニチュア7土器 小形壺	口縁・底部	9.4	4.2	2.5196/1 黄灰色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ハク調整後ナデ	ナデ・ハク調整後ナデ	有	全体に磨滅している 図面上還元あり
188	88 1	遺構外	ミニチュア7土器	底部	不明	不明	10187/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ハク調整後ナデ	ハク調整後ナデ	有	無
189	88 2	遺構外南西部	ミニチュア7土器	底部	不明	不明	10186/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ハク調整後ナデ	ナデ	有	無
190	88 4	遺構外	ミニチュア7土器 器台	柱部	不明	不明	10185/2 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒	良好	タテハク後ナデ	ナデ・ナナメハク ナデ	有	無

第9表 第1調査区出土遺物観察表⑨

通称番号	図表番号	遺構名	位置	種類	部位	口径	高さ	色調	粘土・混入物	焼成	外面調整	内面調整	黒炭	備考
191	87	遺構外II区		ミニチュア土器 土器	腹部	不明 底さ8.2	不明	10187/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 雲母	良好	ナナメハク後ヘラミ カキ	ナデ ヨコハク	無	焼成前の穿孔2ヶ所が4ヶ所あったと思われる 図面上見えあり
192	56	遺構外		スプーン形 土器	柄	1.6×1.6	不明	2.5187/2 灰黄色	長石 石英	良	指ナデ	指ナデ	有	重さ13.2g
193	56	遺構外		ミニチュア土器 土器	腹部	不明	不明	10186/2 灰黄褐色	長石	良好	指調整	指調整	無	
194	56	遺構外		ミニチュア土器 土器	底部	1.8	1.1	7.5188/4 透黄褐色	長石	良好	指調整	指調整	無	外縁面に粘土の埋目見える
195	88	遺構外 中央西側		ミニチュア土器 土器	腹部	不明	不明	10187/3 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石	良好	ナデ	ナデ	有	底部に尖部
196	84	遺構外		瓶	把手	不明	不明	7.5188/4 透黄褐色	長石 石英 角閃石	良好	ナデ	ヘラズリ	無	小形の瓶の把手
197	83	遺構外		ミニチュア土器 土器	胴部一底部	不明	不明	10188/3 透黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナナメハク後ナデ	ヘラズリ後ナデ	無	底部に焼成前穿孔1ヶあり 図面上見えあり
198	81	遺構外南端部		須恵器 須恵器	口縁一高台	[10]	4.5	M/ 灰色		良好	ナデ	ナデ 指ナデ ナデ	無	緻密な粘土
199	81	遺構外		須恵器 須恵器	坏部	[11.2]	3.5	M/ 灰色		良好	ナデ	ナデ	無	緻密な粘土
200	94	遺構外		ガラス管玉	管形	外径 4mm 内径 1.8mm	高さ7mm	小豆色	-	-	-	-	-	-
201	94	遺構外		ガラス玉	管形	外径 4.5mm 内径 1.5-2mm	高さ3mm	紺色	-	-	-	-	-	-
202	94	遺構外		ガラス玉	管形	外径 5mm 内径 1.5mm	高さ4mm	紺色	-	-	-	-	-	-
203	94	遺構外IV区		ガラス玉	管形	外径 4mm 内径 1mm	高さ3mm	紺褐色	-	-	-	-	-	-
204	85	遺構外W-1		土製勾玉	破片	長さ4.7	厚2	断面108/4 にふい褐色						重さ15.6g
205	85	遺構外北半分		土製勾玉	破片	長さ2.9	厚1	10187/3 にふい黄褐色						重さ4g
206	95	遺構外		不明土製品		0.13×0.7	-	7.5188/1 地灰色	-	-	-	-	-	重さ0.5g
207	85	遺構外		糖石製品		3.8×3.1	厚1.6	-	-	-	-	-	-	穿孔1ヶあり
208	85	遺構外		糖石製品		3.4×3.8	厚2.1	-	-	-	クスリ	-	-	
209	112	遺構外		滑子		7×5.2	厚2.3	-	-	-	-	-	-	軽石 重さ28.5g
210	93	遺構外		鉄銀		3.1×1.9	-	-	-	-	-	-	-	重さ3.5g
211	91	遺構外		鉄銀		4.4×1.4	-	-	-	-	-	-	-	重さ6g
212	93	遺構外		鉄		9.7×1.35	-	-	-	-	-	-	-	重さ11.8g
213	91	遺構外		陶		3×1.3	-	-	-	-	-	-	-	重さ2.7g 木の皮が強く付着している
214	93	遺構外IV区		鉄銀		2.6×1.2	-	-	-	-	-	-	-	重さ1.1g 木片が付着している？

第10表 第1調査区出土遺物観察表⑩

通器番号	通器名	J号	器種	部位	口径	器高	色調	粘土・混入物	焼成	外面図	内面図	黒沢	備考
215 91	2 通器外		刀子先頭?		3.4×1.6	—	—	—	—	—	—	—	重さ4.7g
216 92	1 通器外		刀子		1.5×8.3	—	—	—	—	—	—	—	重さ10.7g
217 91	3 通器外		鉄鏃		5.8×3.5	—	—	—	—	—	—	—	重さ18.5g
218 92	2 通器外		鉄鏃		7.6×2.9	—	—	—	—	—	—	—	重さ13.7g
219 95	3 通器外		棒状鉄製品		5.7×0.6 0.65×0.6	厚	—	—	—	—	—	—	重さ4g
220 93	2 通器外		鉄製品		3.7×9.1	—	—	—	—	—	—	—	重さ71.7g
221 93	3 通器外		板状鉄		4.9×3.1	—	—	—	—	—	—	—	重さ18.2g
222 92	3 通器外N区		板状鉄		6×1	—	—	—	—	—	—	—	重さ130g
223 102	3 通器外N区		石包丁		11.7×3.8	厚0.8	—	—	—	—	—	—	重さ56g 非常に柔らかく脆い
224 109	2 通器外N区		未成品 石包丁		21.6×5.9	厚5.8	—	—	—	—	—	—	重さ83g
225 112	2 通器外南端部		石包丁		7.1×3.9	厚0.5	—	—	—	—	—	—	重さ2.2g
226 109	1 通器外		石包丁		4.1×4.8	厚4.2	—	—	—	—	—	—	重さ12.7g
227 113	2 通器外E-2		未成品 石包丁		4.4×3.5	厚0.8	—	—	—	—	—	—	重さ14.7g
228 102	4 通器外		石包丁		3.8×3.4	厚0.4	—	—	—	—	—	—	重さ7g
229 114	2 通器外I区		石包丁		2.7×3.2	厚0.4	—	—	—	—	—	—	重さ7.7g
230 101	2 通器外		棒入柱状片刃 石片		8.7×2.3	厚4	—	—	—	—	—	—	重さ140g 刃の先端と柄の一部残る
231 110	3 通器外E-1		磨製石器		3×2	厚1.8	—	—	—	—	—	—	重さ26.5g
232 110	2 通器外		砥石		7.6×7.1	厚2.2	—	—	—	—	—	—	砂岩 重さ168.9g 両面使用
233 114	3 通器外 I、II区		砥石		4.4×6.1	厚1.3	—	—	—	—	—	—	重さ60g 孔1ヶ所分あり
234 114	1 通器外I区		砥石		4.4×4.1	厚1.2	—	—	—	—	—	—	重さ39.2g
235 110	4 通器外南端部		石匙		6.4×4.2	厚1	—	—	—	—	—	—	安山岩 重さ23.6g
236 102	2 通器外N区		石匙		6.8×4.1	厚0.6	—	—	—	—	—	—	重さ23.7g
237 110	1 通器外		石鏃		4.3×4.4	厚1.5	—	—	—	—	—	—	重さ33.5g
238 110	5 通器外南端部		棒文石器		5.8×4.6	厚1.4	—	—	—	—	—	—	安山岩 重さ46.2g

第11表 第1調査区出土遺物観察表⑪

遺物 番号	図1 位置	調査 区	遺物 名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	粘土・混入物	焼成	外周調整	内面調整	裏面	備考
239 96 3	遺構外		石皿			1.4×1	—	—	—	—	—	—	—	—	重さ0.2g
240 96 2	遺構外		石皿			2.6×1.6	—	—	—	—	—	—	—	—	重さ1g
241 96 1	遺構外		石皿			2.6×1.4	—	—	—	—	—	—	—	—	黒燐石 重さ1.2g
242 95 1	遺構外		皿			1.7×2.1 厚0.5×0.45	—	—	—	—	—	—	—	—	黒燐石 重さ1.4g
243 105 1	遺構外		磁石			13.3×13 厚1.3	—	—	—	—	—	—	—	—	砂岩 重さ283g
244 106 1	遺構外	78	磁石			11.7×6 厚3.8	—	—	—	—	—	—	—	—	天草陶石 重さ440g 5面使用面あり
245 101 1	遺構外		磁石			11.2×7 厚3.6	—	—	—	—	—	—	—	—	砂岩 雲母、灰石が多く見える 重さ340g
246 102 1	遺構外N区	32	磁石			5.4×2.9 厚2.2	—	—	—	—	—	—	—	—	アルコーズ質砂岩 重さ63g 小さい磁石の為、手に持って使用したのでは
247 113 1	遺構外E-1		磁石			8.3×13.7 厚3	—	—	—	—	—	—	—	—	重さ383g
248 88 2	遺構外	13	台石?			7.2×9.5 厚6.7	—	—	—	—	—	—	—	—	安山岩 火を受けている様である
249 86 1	遺構外	18	台石・磁石?			5.9×9.7 厚5.4	—	—	—	—	—	—	—	—	安山岩 重さ581.5g
250 115 1	遺構外		台石			31.6×33.8 厚13.3	—	—	—	—	—	—	—	—	重さ計測不能
251 108 1	遺構外	73	台石?			13.5×12 厚8	—	—	—	—	—	—	—	—	重さ1.08kg 片面に磨付着
252 99 1	遺構外	25	台石			24.1×19.5 厚7.1	—	—	—	—	—	—	—	—	重さ6.04g
253 87 1	遺構外		磨り石?			15.6×8.4 厚5.1	—	—	—	—	—	—	—	—	重さ1.08kg
254 104 1	遺構外	90	叩き石			14.9×12.3 厚10.1	—	—	—	—	—	—	—	—	安山岩 重さ2.592kg
255 107 1	遺構外	9	磨?			28×6.8 厚4.4	—	—	—	—	—	—	—	—	重さ680g 石の前面に窪みあり
256 105 2	遺構外		石種			11.5×10.6 厚2.1	—	—	—	—	—	—	—	—	安山岩 重さ400g
257 111 1	遺構外南端部		石皿			不明	不明	不明	—	—	—	—	—	—	重さ263g
258 103 1	遺構外		打製石斧			14.4×11.2 厚1.9	—	—	—	—	—	—	—	—	緑色片岩 重さ420g
259 111 2	遺構外中間部		打製石斧			15.7×9.8 厚1.6	—	—	—	—	—	—	—	—	緑色片岩 重さ314.9g
260 55 4	遺構外N区	122	縄文土器 鉢			口縁部	不明	不明	10/87/2 にふい真褐色	長石 角閃石 良好	ナテ・沈降	ナテ	ナテ	—	—
261 89 7	遺構外E-1		縄文土器 深鉢			口縁部	不明	不明	10/82/1 黒褐色	長石 石英 赤褐色 雲母 良好	刻目	へうミガキ	へうミガキ	—	—
262 89 8	遺構外E-2		縄文土器 深鉢			口縁部	不明	不明	10/95/1 褐色	赤褐色 雲母 良好	ナテ・沈降文	へうミガキ	へうミガキ	—	—

第12表 第1調査区出土遺物観察表②

通 番 号	区 画 番 号	位置	通称名	ナ号	材質	部位	口径	器高	色調	粘土・混入物	焼成	外面調整	内面調整	黒炭	煤	備 考
263	89	2	道橋外Ⅱ区		縄文土器 深鉢	口縁部	不明	不明	5162/4 にふい褐色	長石 角閃石	良好	ヘラ掻	ヘラ調整	有	無	
264	89	4	道橋外		縄文土器 深鉢	口縁部	不明	不明	7.5185/3 にふい褐色	長石 石英 角閃石 雲母	良好	指調整・ハケメ	ヘラ調整	無	有	
265	89	3	道橋外		縄文土器 深鉢	破片	不明	不明	10187/3 にふい黄褐色	長石 石英 雲母	良好	ナデ・ヘラ調整	ナデ	有	無	
266	89	5	道橋外Ⅱ-2		縄文土器 深鉢	破片	不明	不明	7.5186/4 にふい褐色	長石 角閃石 雲母	良好	辻線文	ヘラミガキ	無	無	西平式?
267	89	6	道橋外Ⅱ-3		縄文土器 深鉢	破片	不明	不明	7.5185/3 にふい褐色	長石 石英 角閃石 雲母	良好	ヘラ調整・辻線文	ヘラ調整	無	無	西平式?
268	89	1	道橋外Ⅰ区		縄文土器 深鉢	破片	不明	不明	10187/2 にふい黄褐色	長石 角閃石 赤褐色片 雲母	良好	辻線文	ヘラミガキ	無	無	
269	89	9	道橋外Ⅱ-2		縄文土器 深鉢	破片	不明	不明	7.5185/3 にふい褐色	石英 角閃石	良好		ヘラミガキ?	無	無	
270	86	2	道橋外		縄文土器 深鉢	口縁部	不明	不明	7.5184/2 灰褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色片 雲母	良好	磨消線文と平行線文	ヘラミガキ	無	無	波状口縁
271	55	3	道橋外Ⅱ区	529	縄文土器 深鉢	口縁部	不明	不明	10187/3 にふい黄褐色	長石 石英	良好	辻線・貝殻汪祖文・ 貼付茶帯部・押圧文	ナデ	無	無	小池原上層式土器
272	86	3	道橋外		縄文土器 深鉢	口縁部	不明	不明	10184/2 灰黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色片 雲母	良好	磨消線文・ヘラミガキ	ナデ	無	無	波状口縁
273	66	3	道橋外Ⅲ区	661	縄文土器 磨消線文	口縁部	不明	不明	10186/4 にふい黄褐色	長石 石英 赤褐色片 雲母	良好	辻線・押圧文	ナデ	無	無	



第35図 第2調査区遺構配置図



第36図 1・2・3号住居跡実測図

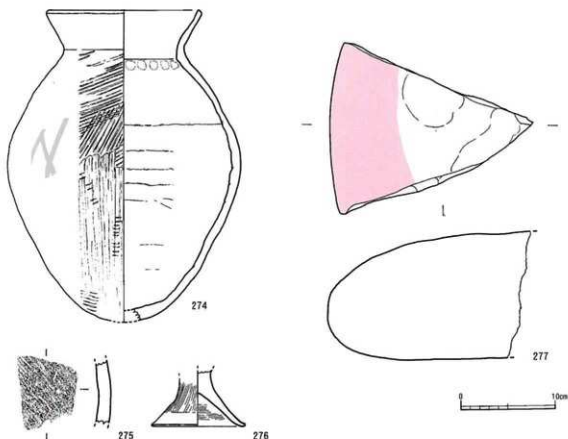
3 第2調査区の遺構と遺物 (第35図)

この調査区では、環濠の検出を目的としたため、地形に沿って調査区を設定した。しかし、東西方向に1mずれていたため、変形した長方形となってしまった。加えて遺構面まで深く、1m近く掘り下げることとなった。

調査区では竪穴住居跡が重複して検出され、遺

構自体を掘り下げなかったこともあり、明確に輪郭を捉えることができなかった。従って、住居跡の境界が曖昧であったが11軒の存在が確認できた。

遺構としては確認できなかったが、遺物が集中して出土した中で、赤色顔料がべっとりと塗られている石片が出土したことは特筆すべきことで、方保田東原遺跡が赤色顔料精製の拠点遺跡としての価値を高める結果となった。



第37図 1号住居跡出土遺物実測図

(1) 1・2・3号住居跡 (第36図)

調査区東側で、A-7、8区にまたがる広い範囲で遺構を確認できたが、床面まで掘り下げなかったため輪郭がつかめず、前後関係も不明であった。そのため、中央部を1号住居跡、東端を2号住居跡、西端を3号住居跡とし遺物を取り上げた。なお北側を4号住居跡で切られていることが判明した。

遺物 (第37・38図)

274から277は1号住居跡から出土した遺物である。274は胴部に龍目痕を残す甕である。内面には焦げ付きも見られる。275は線刻による絵画土器である。部分的で全体像は不明である。276は脚付鉢の脚部である。

277は台石で、表面に剥離面が見られるが、自然面には赤色顔料が付着している。装飾古墳館の協力で、デジタル顕微鏡により赤色顔料を確認することができた。おそらく精製用に使用した可能性が高い。

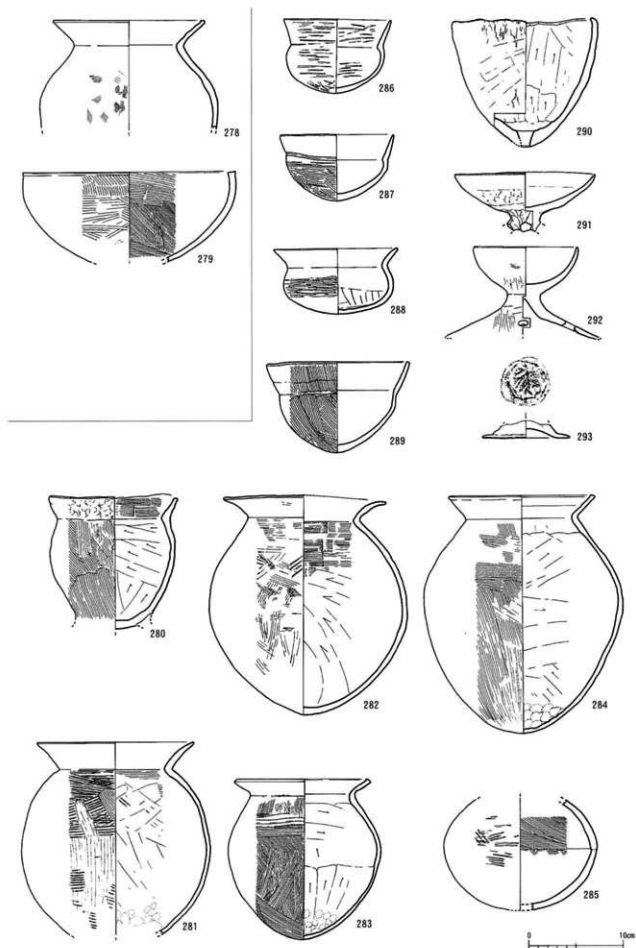
278と279は2号住居跡から出土した遺物である。

278は外来系で布留系甕の破片である。279は鉢の破片である。

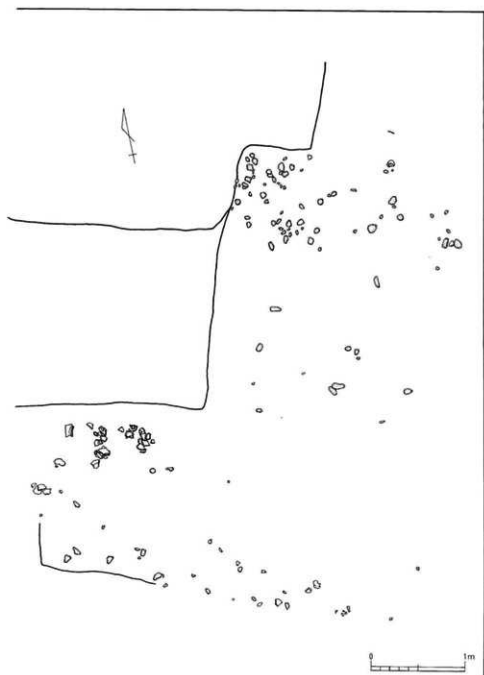
280から293は3号住居跡から出土した遺物である。280から284は甕である。280は在地系の甕である。脚台を欠いている甕である。手捏ね土器で、器面には轆が多く残っている。

281と282は外来系甕である。庄内系で281は底部を欠いている。283と284は外来系甕である。布留系で283は小型の甕である。

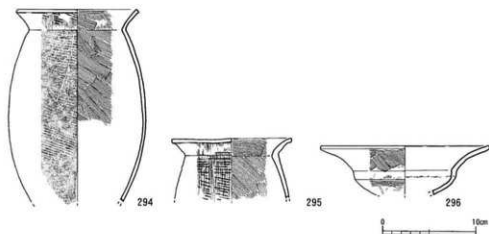
285は壺の胴部片である。口縁部を欠いている。286と287は小型丸底甕である。286は器面をヘラ研磨で仕上げている。288は鉢である。289も鉢である。小型丸底甕を意識したかのような形状であるが、底部が尖っているところから鉢とした。290は手捏ねの甕である。280と良く似た姿をしており、器面に轆が多く残っている。同一工人の手によるものであろう。291から293までは脚付鉢である。291は脚部が3本に分かれ、棒状に伸びる特殊な脚部になる。292は脚部が大きく広がり、透かし孔が3個見られる。293は脚部のみの資料である。



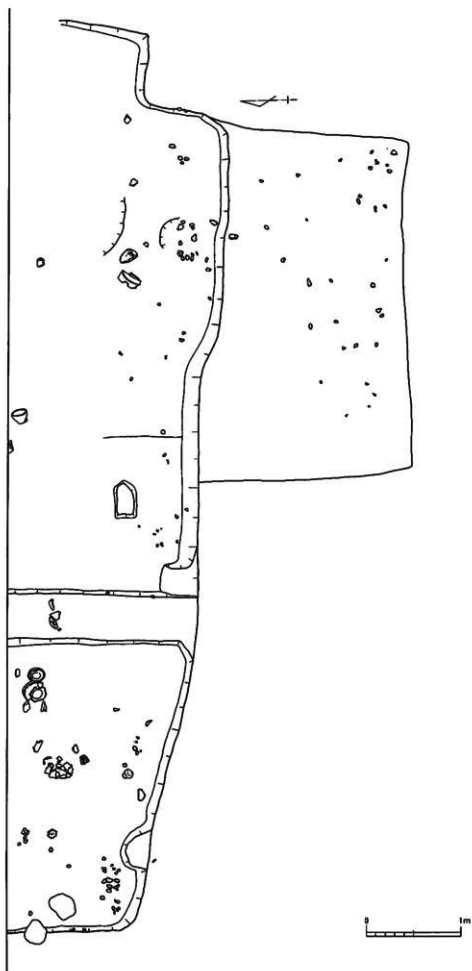
第38图 2・3号住居跡出土遺物実測図



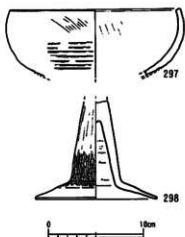
第39図 4号住居跡実測図



第40図 4号住居跡出土遺物実測図



第41图 5・6号住居跡実測图



第42図 5号住居跡出土遺物実測図

(2) 4号住居跡 (第39図)

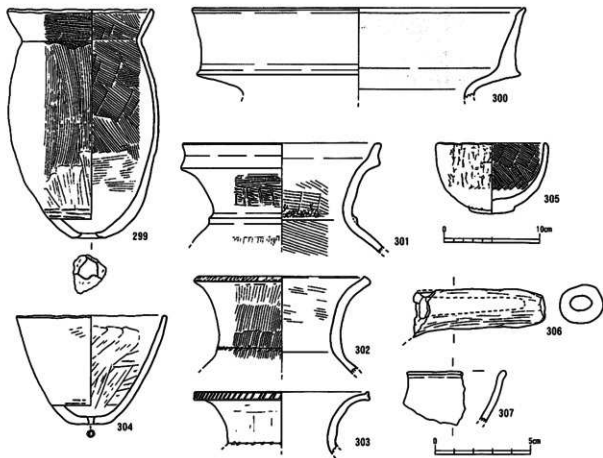
調査区東端に位置しA、B-7、8区にまたがり、住居跡の南側は1号住居跡から3号住居跡を切っている。また、西側は5号住居跡と6号住居跡によって切られている。したがって、全貌は明らかにならなかった。遺物の散布状況と床面の硬化状況で住居跡と判断した。

遺物 (第40図)

294から296は4号住居跡から出土した遺物である。294と295は在地系の甕である。共に底部を欠いているが、丸底になる可能性が高い。296は高坏の坏部片である。

(3) 5号住居跡 (第41図)

調査区東端に近いB-7区に位置し、南側は4号住居跡を切り、北側を6号住居跡で切られている。南側の壁は幅3m50cmで、東西の壁は2m程度を残している。



第43図 6号住居跡出土遺物実測図

遺物 (第42図)

297と298は5号住居跡出土の遺物である。297は鉢の破片で、298は高坏の脚部のみである。脚部に円孔は見られない。

(4) 6号住居跡 (第43図)

調査区の北東部に位置しB-6～8区にまたがり、主体部は調査区の北側に伸びている。4号住居跡と5号住居跡を南壁で切っている大形の住居跡である。土層観察用に土橋状に残して掘ったが、南壁は8m60cmをはかり、これまで調査した中で最大級の住居跡である。

遺物 (第43図)

299から306は6号住居跡から出土した遺物である。

299は在地系の甕であるが、底部には二次的に穿孔し甕として転用が行われている。

300から303は壺の口縁部である。300は大形の二重口縁壺の口縁部片である。内面のみ黒く漆を塗っている。このような例はこれまでも数点確認している。301も二重口縁部で、頸部に凸帯を巡らしている。302は口唇部に刻み目を配している。303も口唇部に刻み目を配している破片である。頸部にも刻み目を配している。

304は甕である。小さな平底に1個の穿孔を施している。305は手握ねの鉢である。底部は一段盛り上がった平底である。器面には轍が残っている。306は土製スプーンの柄である。内部をヘラで削り落として中空になっており、作り方の特殊な遺物である。

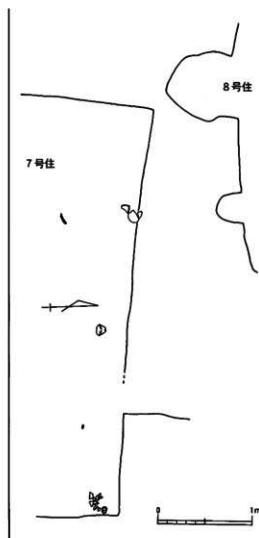
307は6号住居跡南壁の外から出土した遺物である。正確には遺構に伴わない遺物であるが、ここでまとめて紹介する。青磁の碗の破片で、明らかに後世の混入資料である。

(5) 7号住居跡 (第44図)

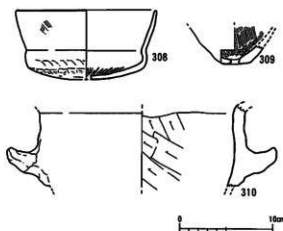
調査区の南東部のA-6、7区に位置し、主体部は調査区の南壁の外に伸びている。住居跡の北壁が3m程度確認され、西壁は1.5mを確認できた。

遺物 (第45図)

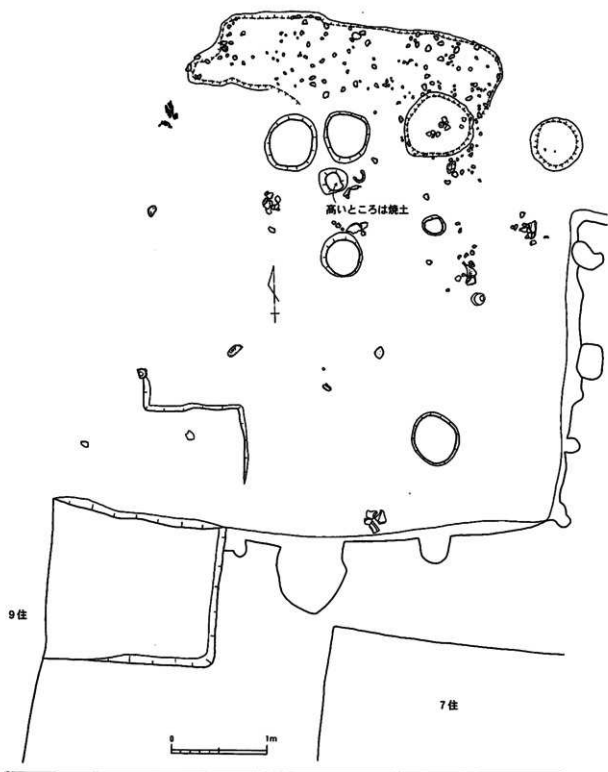
308から310は7号住居跡出土の遺物である。308は鉢の破片である。309は甕で、底部が平底であるところは304と類似している。310は土師器の甕である。口縁部は外反し、胴部外面には牛角把手が付き、煤の付着が見られる。底部が残っていないが甕の可能性も高い。



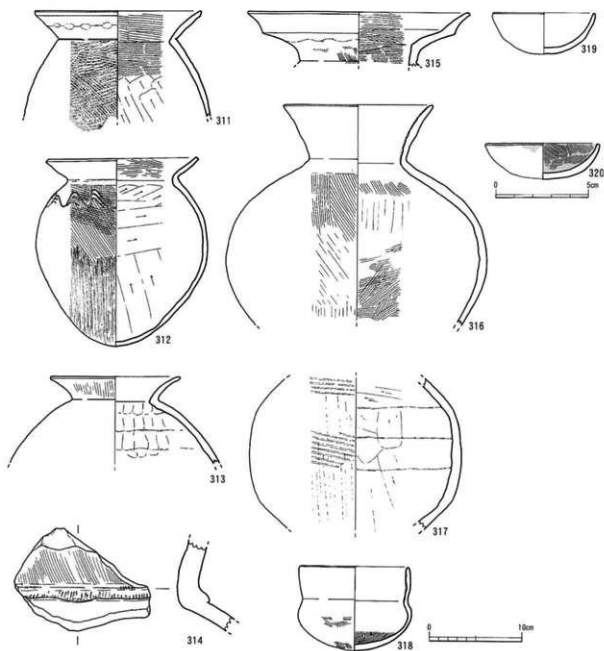
第44図 7号住居跡実測図



第45図 7号住居跡出土遺物実測図



第46図 8号住居跡実測図



第47図 8号住居跡出土遺物実測図

(6) 8号住居跡 (第46図)

調査区中央部に近いA、B-5、6区にまたがり西側を9号住居跡によって切られている。明確な壁は南側と東側がそれぞれ5.2mと3.2mが確認できた。住居内から硬化面が見られたので残していた部分を、あたかも柱穴のような形状で図化している。

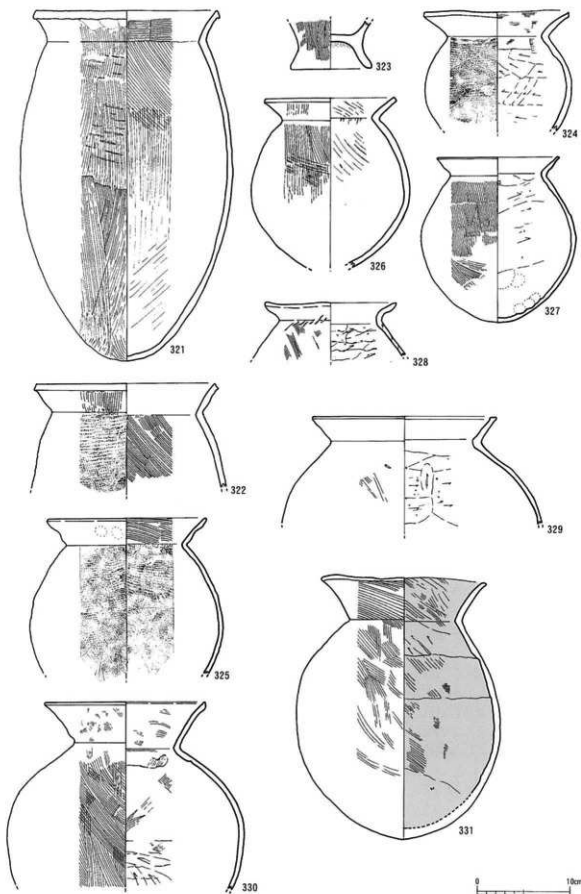
遺物 (第47図)

311から320は8号住居跡出土の遺物である。311と312は外来系甕である。311は庄内系で、312

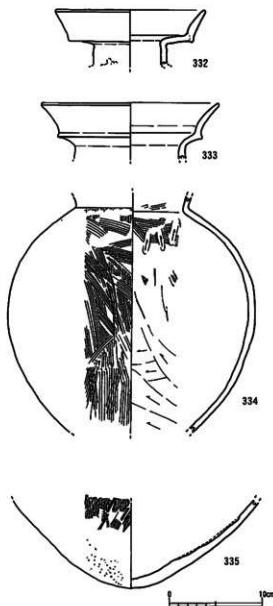
は布留系である。313から317は壺である。313は内面に粘土接合面を残している。314は大形壺の破片で、頸部に不整形の凸帯を巡らしている。頸部内面の一部を黒く塗っている。315は二重口縁部が大きく開く壺の破片である。口唇部を黒く塗っている。316は底部を欠いている。器面には焼成が悪いためか剥離面が多く見られる。317は壺の破片で胴部のみである。外面には粗いタタキ目を施している。内面には粘土接合面が残っており、胎土はチョコレート色をし、弥生土器では免田式土器、縄文土器では阿高式土器の様な色合い



第48図 9号住居跡実測図



第49図 9号住居跡出土遺物実測図



第50図 9号住居跡出土遺物実測図

である。318は鉢である。316と同じく器面には剥離面が多く見られる。胎土も類似している。

319と320は鉢である。319は半欠状態で、320はミニチュアの鉢である。内面には赤色顔料が付着しており、紅皿みたいな使用であったと考えられる。

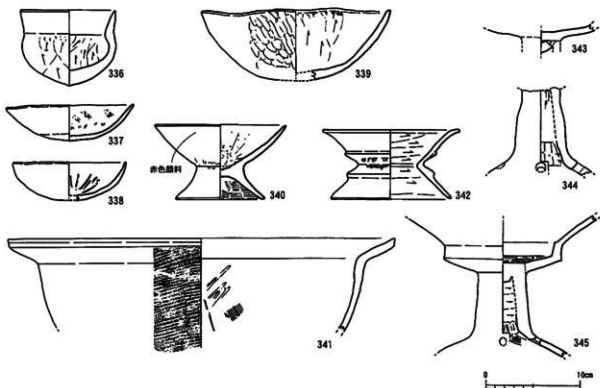
(7)9号住居跡 (第48図)

調査区中央部南側のA-4から5区にまたがって位置している。東側壁は8号住居跡を切っており、3m程度を確認できた。西側は11号住居跡から切られていた。南壁は調査区の南に延びており、また北側壁も確認できなかった。

遺物の出土が多く床面まで掘り下げなかったため、炉跡や柱穴は確認できなかった。

遺物 (第49～51図)

321から345は9号住居跡出土の遺物である。このうち321から329は甕である。321と322は在地系の甕である。長胴丸底になる。323は在地系の甕の脚台である。324から329は外来系甕である。



第51図 9号住居跡出土遺物実測図

324は小型の庄内系甕である。口縁部が胴部より大きく、全面に煤の付着が著しい。325も庄内系の甕である。外面には煤の付着が著しい。326は布留系の甕である。底部は外面に煤、内面には焦げ付きが見られる。327も布留系の甕である。外面に煤、内面には焦げ付きが著しい。328も布留系の甕であるが、口縁部周辺のみである。内面には粘土接合面が多く見られる。329も布留系甕である。口縁部周辺の破片である。

330から335は甕である。330は口縁部外面と胴部内面に粘土接合面を残す甕である。

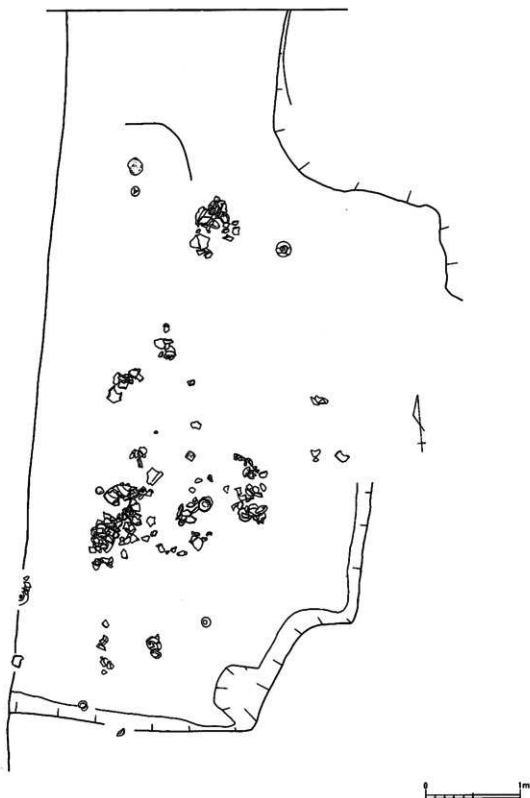
331は内面があたかも赤色顔料を塗ったかのように赤いが、焼成によるものである。なお粘土接合面が見られる。332と333は口縁部片である。共に二重口縁である。334は胴部の破片である。335は底部のみである。

336から341は鉢である。336は小型丸底甕にも似ている完形品である。337から339は皿状の鉢である。340は脚台付の鉢である。口縁部を一部欠いているが、ほぼ完全な姿を留めている。341は大形の鉢の破片である。

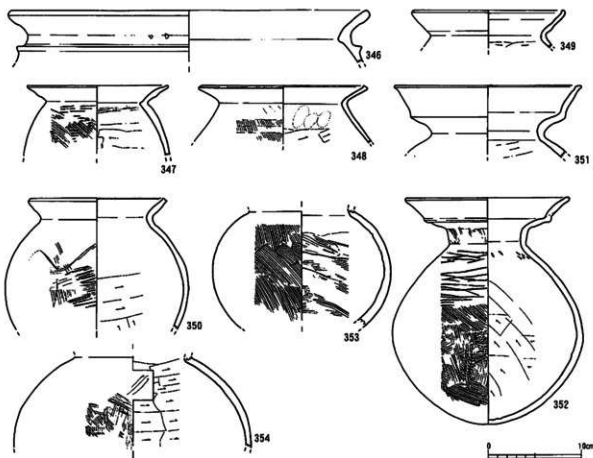
342は鼓型器台の破片である。343から345は高杯の破片である。

巻頭図版2（写真7・8）は赤色顔料付着石材である。3個以上に割られており、その内2個

（S-46、S-58）が1.3mほど離れた距離で、多量な土器の中から出土している。安山岩の礫で表面にはベンガラが付着しているほか、研磨面など現状では確認できない。礫はベンガラ付着状態で割られており、剥離面には付着が見られない。おそらく、祭祀行為に伴って、顔料を付着させた後割られて破棄したものであろう。



第52図 10号住居跡実測図



第53図 10号住居跡出土遺物実測図

(8)10号住居跡 (第52図)

調査区の西端のA-1区とB-1区にまたがり位置している。東側と南側の壁の一部は確認できたが、西側は調査区の西に延びており、北側も確認できなかった。遺物の出土が多く見られた。

遺物 (第53・54図)

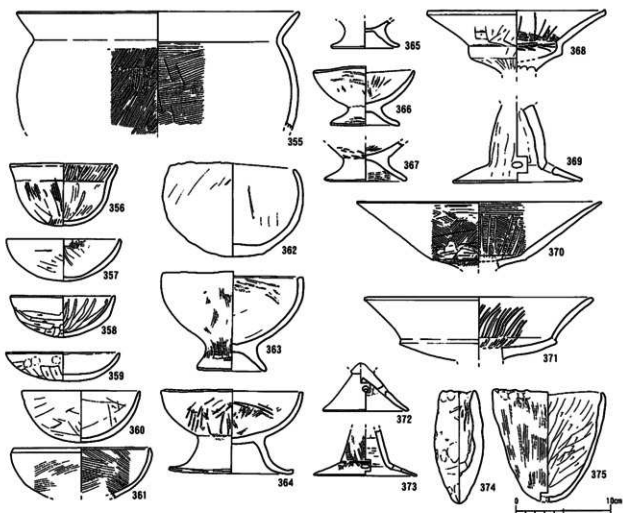
346から375は10号住居跡出土の遺物である。346から350は甕である。346は黒髪式土器の甕の口縁部片である。347から350は外来系甕である。347は小型の甕で口縁部のみである。348と349は口縁部片である。350は布留系の甕の破片である。外面には煤の付着が著しい。

351から354は壺である。351は二重口縁壺の口縁部片である。352は二重口縁壺である。353は壺胴部の破片である。354も壺胴部の破片である。肩部に猫の爪状に3本の引掻き傷が見られる。

355から367は鉢である。355は大形の鉢の破片である。356は小型丸底壺にも似ている。357は破片である。358は完形品である。359から361は破片である。362は手捏ね風の土器である。363から

367は脚台付の鉢である。363は底部と口縁部の一部を欠いている。364は完形品である。365は小型の鉢の脚部である。366も脚部の一部を欠いているが、ほぼ完形品である。367は脚部のみである。

368から373は高坏である。368は坏部のみである。369は脚部のみである。370は坏部のみである。371も坏部のみである。372と373は脚部のみである。374と375は手捏ね土器である。特に374は尖底で指の痕が見られる。375は底部に小さな穴を穿っており甕として作っている。



第54図 10号住居跡出土遺物実測図

(9)11号住居跡 (第55図)

調査区の西側でB-2、3区を主体にA-2、3区まで広がっている。規模的には大きく、いくつかの遺構が重複している可能性もあるが、明確な壁は確認できなかったのでひとつの住居跡として報告する。

西側には10号住居跡があり、不整形な形状であるが、東側壁は8 m、南側壁が2 m、西側壁は折れながら延長で9 mを確認できた。

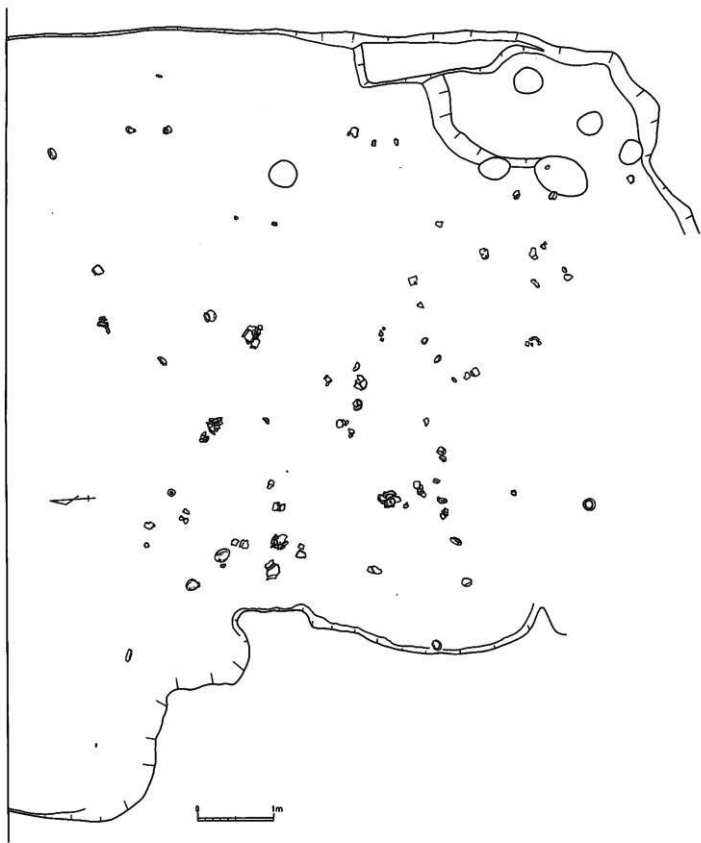
遺物 (第56～58図)

376から404は11号住居跡出土の遺物である。376から387は甕である。376から378は在地系の甕である。

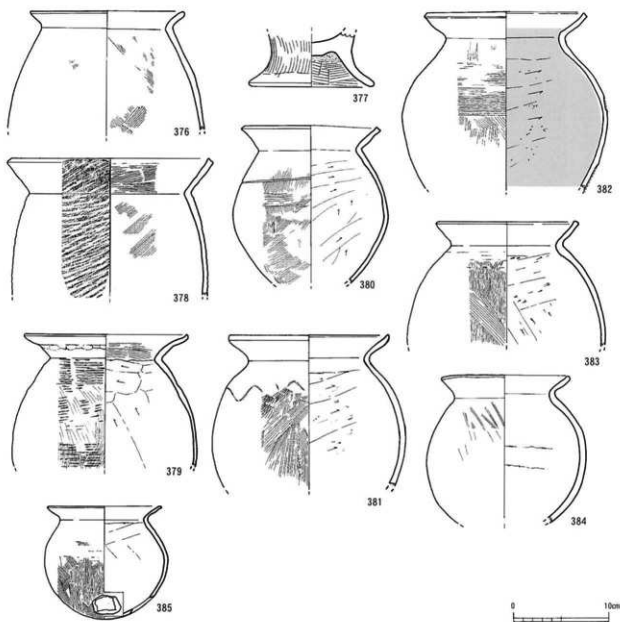
376は口縁部から胴部にかけての破片であり、底部は脚台になる。377は脚部のみである。378も口縁部から胴部にかけての破片であり、外面には煤の付着が見られる。

379から387は外来系甕である。379は庄内系の甕で口縁部と胴部の破片である。380は布留系の甕である。外面には煤の付着が著しい。381も布留系の甕である。口縁部から胴部にかけての破片である。肩部には沈線により波状文が描かれている。382も布留系の甕の破片である。胎土により内面が赤くなっているが、赤色顔料は塗っていない。383も布留系の甕の破片である。外面には煤の付着が著しい。384も布留系甕である。外面には煤の付着が著しい。385は布留系で、小型の甕である。底部近くに穿孔が見られる。煤の付着が著しい。386は甕である。底部近くに圧痕が残っている。387も甕である。

388から399は壺である。388は大型の壺の破片である。口縁部と頸部には凸帯を巡らし、刻みを施している。内面は黒く塗られている。389と390は小型丸底壺である。391から399は鉢である。391は煤の付着が著しい。392は破片である。393



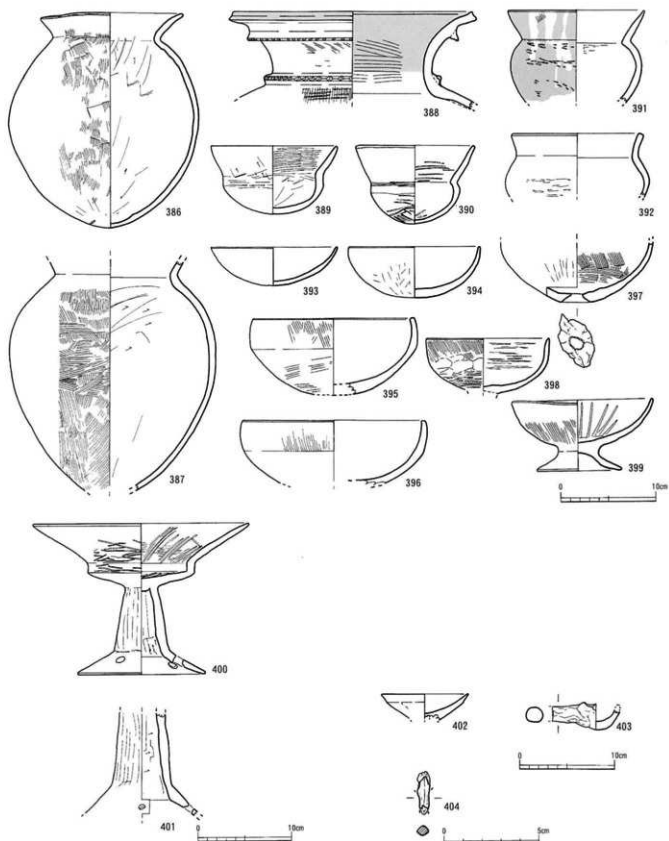
第55图 11号住居跡実測図



第56図 11号住居跡出土遺物実測図

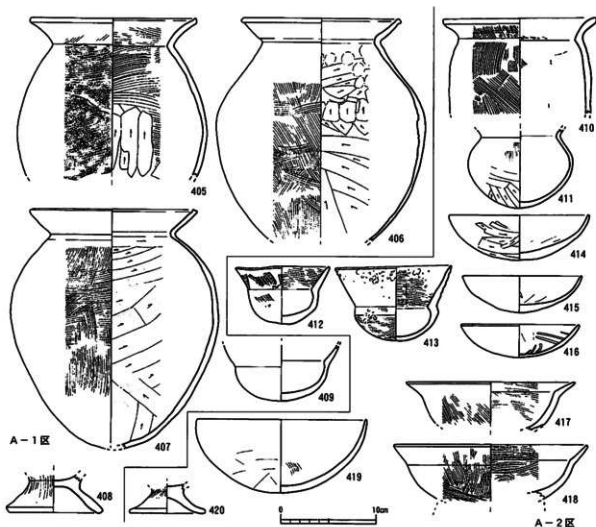
と394は皿状を呈している。395と396は破片である。397は底部に二次的な穿孔を施し甗として転用している。398と399は脚台付の鉢である。400と401は高坏である。400は古式土師器で、401は弥生時代のものである。402は古式土師器の小型器台である。

403は土製のスプーンである。柄の端部を欠いている。404は銅鏝である。周囲を欠いているが茎の部分である。



第57图 11号住居跡出土遺物実測図

第58图 11号住居跡出土遺物実測図



第59図 遺構に伴わない遺物実測図①（A-1、2区出土の遺物）

(1) 遺構に伴わない遺物（第59～72図）

調査の段階で遺構の確認ができないまま取り上げた遺物を、ここでまとめて紹介するものである。基本的には地区別に取り上げたが、石器などは一括した。

① A-1区出土の遺物（第59図）

405から409はA-1区出土の遺物である。

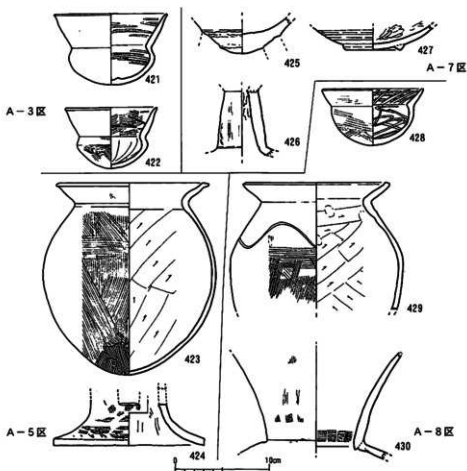
405から407は全て外来系甕で、405は庄内系の甕、406と407は布留系の甕である。共に煤の付着が著しい。408は在地系甕の脚台である。409は小型丸底甕である。

② A-2区出土の遺物（第59図）

410から420はA-2区出土の遺物である。

410は在地系の甕の破片である。411は口縁部を欠いた小形甕である。412と413は小型丸底甕である。414から418は碗状の鉢である。417と418は口縁部が開く鉢の破片である。

419は表面に皺が残る仕上げである。420は脚付鉢の脚部である。



第60図 遺構に伴わない遺物実測図②（A-3、5、7、8区出土の遺物）

③ A-3区出土の遺物（第60図）

421と422は共にA-3区出土の小型丸底壺である。

④ A-5区出土の遺物（第60図）

423と424はA-5区出土の遺物である。423は外来系甕で布留系である。外面は煤、内面は焦げ付きが見られるため、全面黒い。

424は脚付鉢の脚部である。3箇所程度透かし孔が見られる。

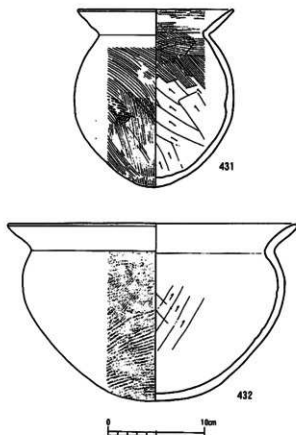
⑤ A-7区出土の遺物（第60図）

425から427はA-7区出土の遺物である。425は脚台を欠いた甕の底部である。外面は脚欠損後に全面に黒く漆を塗っており、土器断面には塗られていないところから、塗った後に使用段階で割れたものと理解される。このことは、表面を黒く塗ることの目的を考えるうえで貴重な資料である。426は古式土師器の高坪である。脚部のみの資料である。427は土師器の高台付き碗の破片である。

⑥ A-8区出土の遺物（第60図）

428から430はA-8区出土の遺物である。

428は小型丸底壺で完形品である。429は外来系甕である、布留系甕の破片である。430は壺の口縁部である。



第61図 遺構に伴わない遺物実測図③（B-4区出土の遺物）

⑦B-4区出土の遺物（第61図）

431と432はB-4区出土の遺物である。431は外来系甕である。庄内系の小形の甕である。432は大形の鉢である。内面は使用段階で生じた焦げ付きや傷が見られる。

⑧B-5区出土の遺物（第62～67図）

遺構の形状は不明であるが、工房跡のような出土状況である。残念ながら床面まで掘り下げなかったため、かえって中途半端な情報となってしまったことは残念である。

459の台石と454の石杵を中心に、遺物が集中して出土したことから、工房跡の可能性を示すものと考え、まとめて遺物を紹介するものである。

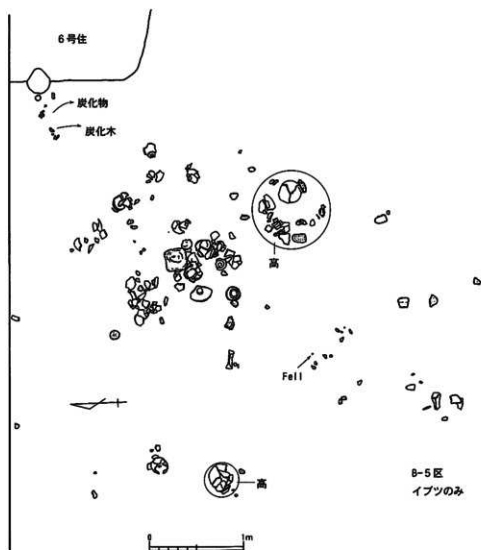
433から459はB-5区出土の遺物である。

433から439は甕である。全て外来系甕で435までは庄内系で、439までが布留系の甕である。433は内部に米粒がひとかたまりで焦げ付いた痕跡を残している。434は外面には煤の付着が著しく、

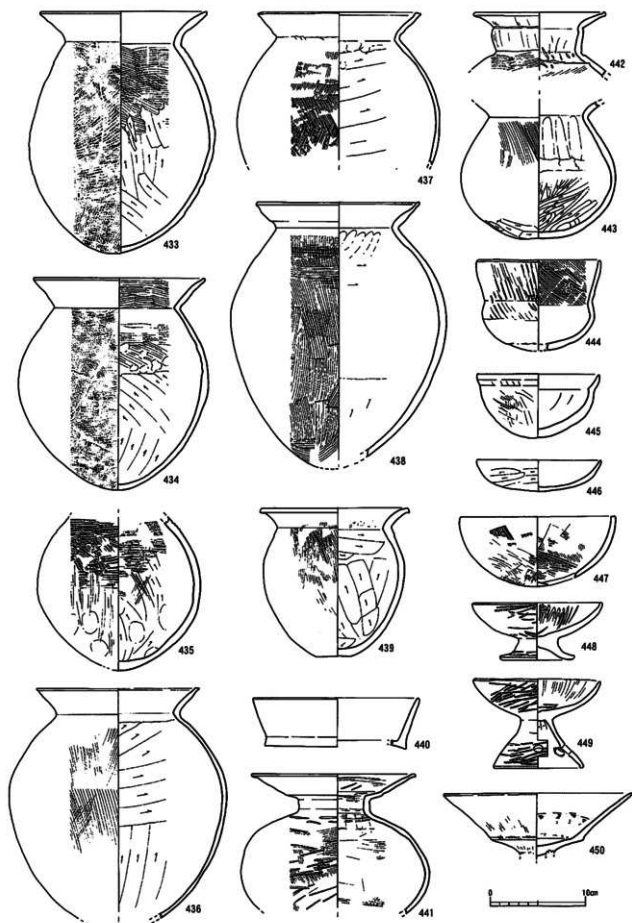
内面には焦げ付きも見られる。435は口縁部を欠いている。436は半欠状態である。437は底部を欠いている。438は底部の一部を欠いている。内部に焦げ付きが見られる。439は珍しく小さな平底の甕である。北部九州の特色を有している。

440から443は壺である。440は二重口縁壺の口縁部のみであると考えたが、底部にあたる部分が丁寧にナデ仕上げを行い、内側の欠損部分の器壁が僅かに3mm程度しかなく、頸部を構成するには薄いので、平らな底部になる可能性も残している。

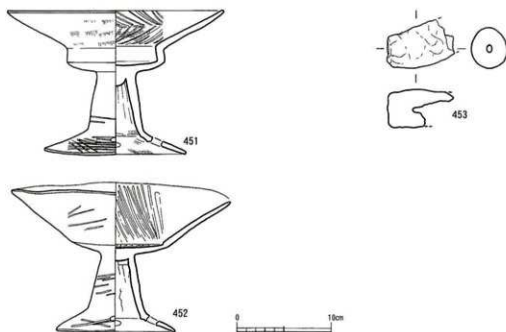
441は二重口縁壺である。底部を欠いているが丁寧な作りである。442は頸部が立上がり口縁部は小さく開いている。胴部以下を欠いているが、内部には粘土接合面と粘土密着のための工具痕を残している。443は口縁部から底部までの破片である。



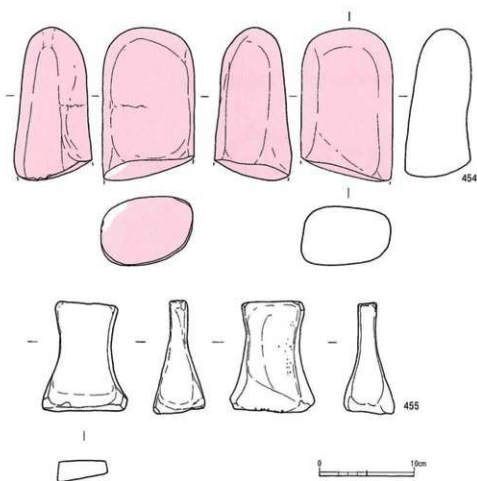
第62図 B-5区実測図



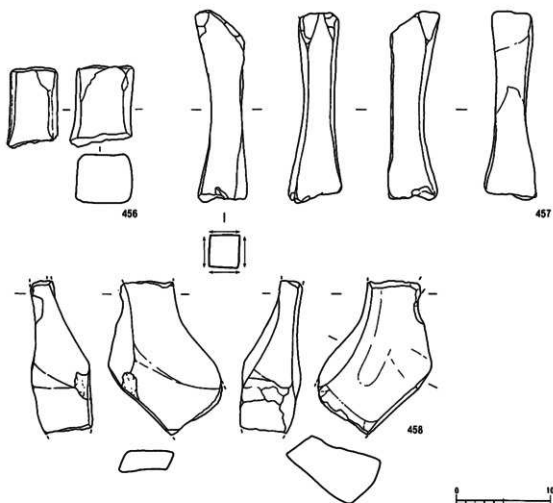
第63図 遺構に伴わない遺物実測図④ (B-5区出土の遺物)



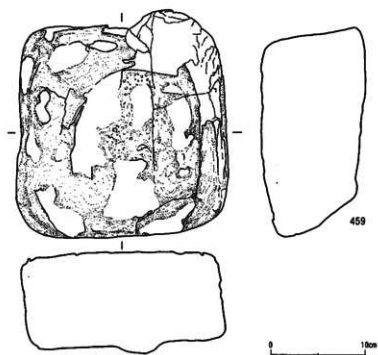
第64図 遺構に伴わない遺物実測図⑤（B-5区出土の遺物）



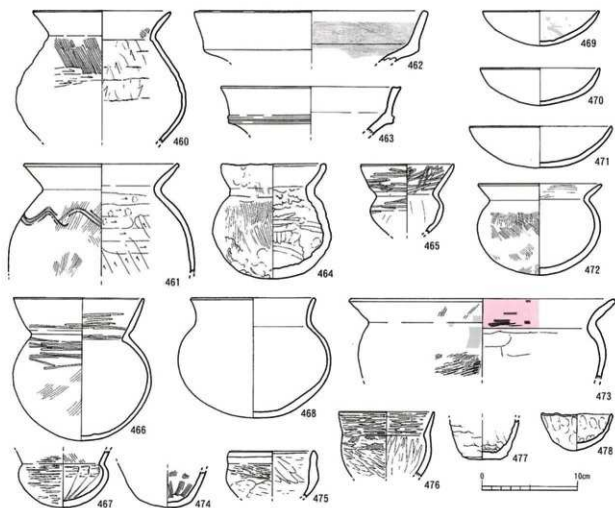
第65図 遺構に伴わない遺物実測図⑥（B-5区出土の遺物）



第66図 遺構に伴わない遺物実測図⑦ (B-5区出土の遺物)



第67図 遺構に伴わない遺物実測図⑧ (B-5区出土の遺物)



第68図 遺構に伴わない遺物実測図⑨（一括遺物）

444から449は鉢である。444は破片である。445は口縁部の一部を欠いているが、ほぼ完形品である。口縁部には黒く塗られている。446は古式土師器である。447は底部に穿孔を施している。448と449は脚台付の鉢である。

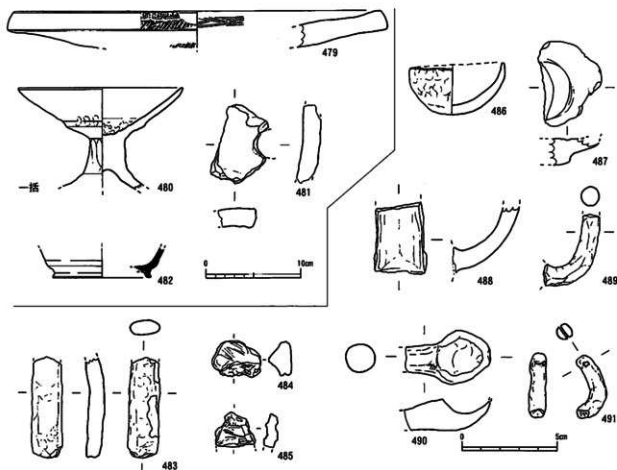
450から452は高杯である。450は坏部のみであるが、使用段階で内外面に同規模の円形で黒くなっている。蓋として使用した可能性も高い。451と452は丁寧なつくりの高杯である。453は土製品である。端部は平坦になっており支脚としても考えられるが、内部には二次的に、円形に穿った痕が見られ使用方法に決め手がない。

454から459は石器である。454は全面に赤色顔料がべつとりと塗られている石杵である。自然石を利用した石杵で研磨面は1面であるが、手にする部分も使い込んでいるためか滑らかになっている。また、石自体も僅かながら「L」字状を呈しており、意識した材料選びを行っているものと理解される。方保田東原遺跡における赤色顔料精製

について考える貴重な資料であり、平成20年6月23日付けで、熊本県指定重要文化財に指定された。

455から458は砥石である。455はアルコーズ質砂岩である。4面に研磨面を残しているが、一部に鋭利なもので叩いた痕が残っている。456もアルコーズ質砂岩である。4面に研磨面を残している。457はいわゆる天草砥石である。458は砂岩である。かなり使い込んでいるためか稜線が鋭くなっている。

459は台石である。表面は滑らかであるが、被熱のためか剥離が多く見られる。



第69図 遺構に伴わない遺物実測図⑩（一括遺物・特殊遺物）

⑨一括遺物（第68・69図）

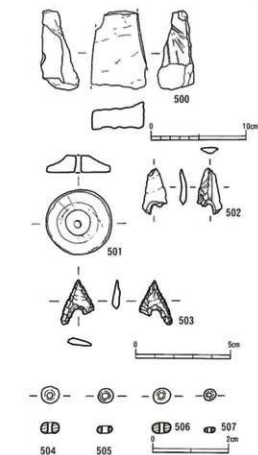
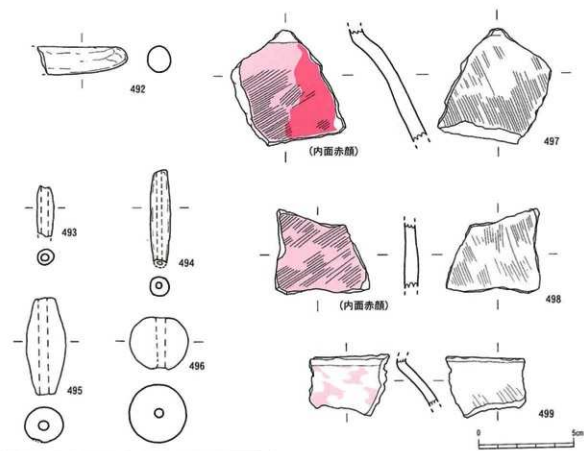
460から534は単独で出土したものである。

460は甕であるが、内面には粘土接合面を4段に残している。461も甕である。外来系で布留系の甕である。462から468は壺である。462と463は二重口縁の破片である。462は口縁部内部に黒く漆を塗っている。463は口縁部下端部に凸帯を巡らしている。464は手捏ねの壺である。外面には轂が残り、内面には成形の際の指痕が残っている。465は小型丸底壺で、底部を欠く破片である。466は器壁が薄い壺の破片である。467は小型丸底壺の破片である。外面には煤の付着が見られる。468は短頸の壺である。

469から473は鉢である。469から471は皿状の鉢で、特に469は紅血的に赤色顔料を利用した痕跡が残っている。鮮やかな赤色であるところから朱であろう。外側には煤の付着が見られる。470と471は古式土師器である。472も古式土師器である。473は大形の鉢の破片である。口縁部内部に赤色

顔料が付着している。また、原稿を書いている段階で、B-4区出土の432と接合することが判明、同一個体であった。

474から478は小形の土器である。474は鉢の底部のみである。475は土師器の破片である。476はへう研磨で仕上っている。477は手捏ね土器である。粘土接合面を残しており、内面には指痕が残っている。478も手捏ね土器である。口縁部の一部を欠いているのみで、ほぼ完形品である。479は大形壺の口縁部破片である。口唇部に粗いハケ目を施している。480は高坏である。脚部を欠いており、杯部底には器面の剥離が見られる。481は透かし穴を有する土器である。器種は不明であるが、器台の可能性も高い。482は須恵器で、高台付き碗の破片である。



⑩特殊遺物 (第69・70図)

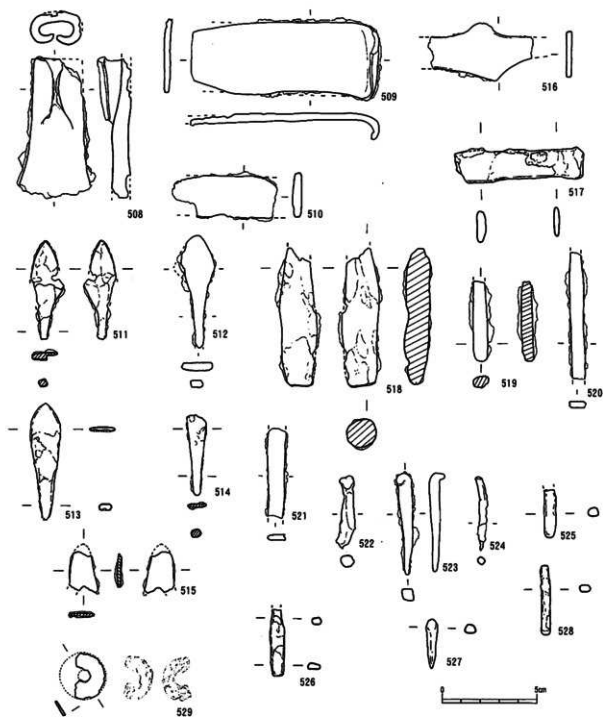
483は土製品である。扁平で長く、僅かに湾曲しており、把手の可能性が高い。484と485は焼成粘土塊である。486は手捏ね土器の碗である。487も手捏ね土器で底部の破片である。488と489は把手である。488はジョッキ形土器から剥離したものであり、489も剥離痕を残している。490は土製スプーンである。491は土製勾玉である。先端部を僅かに欠いている。492は土製スプーンの柄である。493から495は土錘である。496は土製の玉である。497から499は赤色顔料が付着している破片である。肉眼での観察では497と498は濁った赤色であることからベンガラである。499は鮮やかな紅色であるところから朱である。

⑪石器 (第70図)

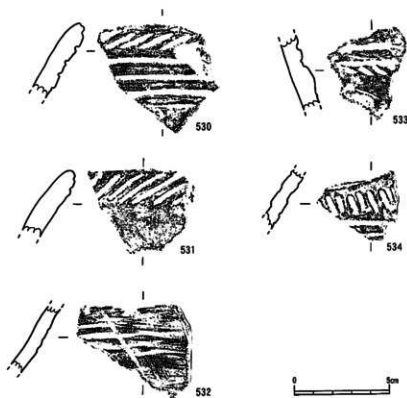
500から503は石器である。500は砂岩製砥石の破片である。研磨面は2面で、筋状の研磨痕を残している。501は滑らかな肌合いから滑石製の紡錘車である。

502と503は黒曜石製の剥片鎌である。

第70図 遺構に伴わない遺物実測図⑪(特殊遺物・石器・ガラス小玉)



第71図 遺構に伴わない遺物実測図㉔（鉄器）



第72図 遺構に伴わない遺物実測図⑨(縄文土器)

⑩ガラス小玉 (第70図)

504から507はガラス製小玉である。504と505はコバルトブルーで、506と507は紺色である。

⑪鉄器・青銅器 (第71図)

508から528は鉄器で、529は銅銭である。

508は鉄斧で、袋部を僅かに欠いているが、ほぼ完全な姿を留めている。509は鎌である。両端を欠いているが基部の折り返しは僅かに残っている。510も両端を欠いた鎌の破片である。511から515は鉄鏃である。515は茎を有していない。516は手鎌の破片であろう。両端を欠いているため、断定しかねている。517は薄手の鉄器であるが、器種は不明である。手鎌の可能性も残している。518と519は素材としての鉄器である。518は棒状の鉄素材と考えられる。519は断面が四角に近い。520は断面が扁平であるが器種は不明である。

521も同じ状況である。522と523は頭が曲がっているところから釘の可能性が高い。

524は細くて僅かに曲がっているところから針であろう。525は不明鉄器である。526は筥状の形状であるが、器種不明の鉄器である。527は鉄鏃の茎先端の破片である。528は棒状の鉄器で器種は不明。

529は古銭であるが、銘が確認できず貨幣の種

類の特定には至っていない。

⑫縄文土器 (第72図)

530から534は縄文土器である。全て北久根山式土器の系統で、深鉢の破片である。530と531は山形の口縁部の外側に斜の刻み目を配している。533と534は胴部の破片である。

IV 考察

山鹿市方保田東原遺跡出土石杵の測色
(測色値を用いた一次報告の試み)

熊本県立装飾古墳館 池田 朋生

目的

本論は、方保田東原遺跡で出土した赤色土の測色、観察を行い、他の地域・時期に赤色顔料等として用いられたベンガラ等と比較を行う。測色値でもって、色に関する一次報告を試みることを目的とする。

筆者は、成分分析を行い水銀朱、ベンガラといった組成を結論付ける立場には立たない¹⁾。顔料としての使用が明らかな装飾古墳、彩色を施した石塔を研究対象に²⁾、保存を目的とした彩色変化の研究³⁾、彩色に関連した製作技術の検証⁴⁾、それから導き出される歴史事象の解明が目下の目標としてある⁵⁾。顔料として使用されたかどうか、その問い自体が重要な検討課題のひとつとなる。筆者は、既に顔料等と使用目的が明確な資料のみを対象としており、赤色そのものの使用意図を探るべく直接考察した研究実績は少ない⁶⁾。

弥生時代集落から出土する水銀朱、ベンガラは、そもそも顔料として使用されたのか、この検証は必須である。稀少な水銀朱出土の有無の背景とともに抑えておくべき課題であろう。本論はあくまで考古学側の立場で、基礎的な情報提示のひとつとして測色値等を示す。このような観察が、弥生時代の研究においてどのような発展性に繋がるのか、筆者にはその意味するところを見出せない。編集者の強い意思から、情報提示の一つの可能性としてL字状石杵などに付着した赤色土の一次報告を試みている。

その有効性を議論するには、歴史的解釈を行う予察を常に持つべきであるが、本論に限り、歴史学の立場から逸脱していることを述べておく。数々の新発見から、熊本県内の弥生集落の調査をリードしてきた方保田東原遺跡の新たな報告視点である。

赤色付着の土器の出土例、遺物、遺構の付着・塗布例は多い。ベンガラ、或いは水銀朱という材質の差による墓孔内での利用の検証⁷⁾、遺構での利用想定⁸⁾、同時期の墳墓において地域差が見出されるか否か⁹⁾、このような視点で論じられる研究はあまたある。

従来考古を主体とする報告では、遺構・遺物によって単にベンガラの付着・塗布として括られるが、細かな観察と集成を行えば、製作上の差、赤色土を用いる意図等、歴史的な解釈に繋がる基礎情報が含まれる可能性がある。後の議論を待つ

こととしたい。

また、測色値のみでは議論の進展が見込めないことから、地下式横穴から出土する「朱玉」¹⁰⁾、装飾古墳塗布のベンガラ等、既に成分分析まで行い、ベンガラと認定された赤色土、或いは赤色顔料の測色、拡大画像で得られた形状の比較観察を行い、方保田東原遺跡におけるL字状石杵付着の赤色土の特徴提示を試みる。

方法

赤色土の付着したL字状石杵に限り、そのなかで最も赤色を帯びる箇所を選択、コニカミノルタ社製土色計 SPAD-503で測色する。測色値は $L^* a^* b^*$ 値で求める。発掘現場で往々にして用いられる標準土色表のマンセル値も併記する。比較資料に、他のベンガラ（何れも成分分析済み）の測色値も提示する。 L^* （明度）は明るさを示し、100～0の範囲を持つ。値が高いほど明るく（白い）、低いほど暗く（黒い）。 a^* 値・ b^* 値は±60の幅を持ち、 $+a^*$ の値は赤、 $+b^*$ の値は黄、 $-a^*$ の値は緑、そして $-b^*$ の値は青を指す。

また、考古学側の観察では、水銀朱を肉眼で説明する際、朱色の鮮やかさを指摘する。そこで、彩度（ C^* ）を求め今後の指標とする。 C^* 値は、公式 $C^* = \sqrt{(a^*)^2 + (b^*)^2}$ で求める。

更に、サンコー Dino-Light（×500倍）で撮影、赤色土の粒度、付着状態等を観察する。

第13表 L字状石杵測色値

L字状石杵	L*	a*	b*	C*	マンセル数値
側面 (赤色土付着)	41.6	14.0	13.3	19.3	8.3R4/3.69
使用面 (赤色土付着)	42.0	16.7	14.8	22.3	7.9R4.04/4.29
石表面 (未着色部)	50.4	6.2	13.5	14.9	3.7YR4.88/2.52
石表面 最も赤いところ	41.2	19.1	14.2	23.8	6.9R3.96/4.7

結果

測色値の一覧を第13表に示す。L字状石柁の拡大画像を写真1、同遺跡出土水銀朱付着土器の拡大画像を写真2に示す。

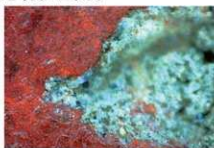


写真1 L字状石柁側面(×500倍)



写真2 水銀朱付着土器(×500倍)

考察

ここでは、得られた測色値、拡大画像と既存データの比較を試み、特徴を示す。比較には、既に成分分析を行い、水銀朱、ベンガラ等の裏付けデータがある資料のみを用いる。

全面にベンガラが付着したL字状石柁は、本報告における最も特筆すべき遺物であろう。一見、鮮やかな赤色が全面に付着しており、塗布されたと思ふばかりの残りの良さである。現在まで、本来は伴うと予測される石臼との共存関係を筆者は知らない。

しかし、状況から見て、赤色土を何らかの意図で磨り潰した結果付着したものである。ここでの測色値をもとに作成した色見本を第73図に示す。



第73図 L字状石柁色見本

ベースとなる色は、L字状石柁の石の色である。肉眼で感じる鮮やかさはなく、拡大画像で見られる赤茶色の色味と同色であることが理解できる。恐らく、ベンガラという成分分析結果が得られるだろう。本資料に関しては、ベンガラを精製する過程で用いられたもので、水銀朱が付着している可能性は低いと思われる。

更に、L字状石柁に付着している赤色土がどのような特徴か、拡大画像と測色値を根拠に、「ベンガラ?」と思われることから、他の赤色を呈するベンガラと比較を行う。ベンガラは酸化第二鉄を主成分とするが、黄色、橙、肌色、茶色等、様々な色彩を呈する^{※11}。今回対象とした資料の測色値では、所謂ベンガラとしての赤、或いは赤茶色の範疇で捉えられるものである。

色彩感覚は相対的なもので、光源・光量の関係、隣り合う他の色の影響で灰色が見えたり、茶色が赤色に見えたりする。L字状石柁もベースとなる石の色に対して鮮やかな発色と感じ取ることができる。色自体が季節変化、日変化を起こしているかどうか、装飾古墳の管理では、退色・劣化などを把握するため、各種データと比較する場合がある^{※12}。

また、温湿度の変化(直接的には表面水分量の変化)によって、所謂濡れ色と乾き色に変化することでも色味は変わる。しかしこの場合変化するのはL*値のみであって、a*値b*値に大きな変化は認められない^{※13}。

従って、L*値の数値差は考察に加えないこととする。これらの前提を踏まえ、既存データを第14表に示す。

第14表 ベンガラと確認された赤色の測色値

L字状石柁	L*	a*	b*	C*	a*/b*
装飾古墳(横山古墳)	38.9	14.4	16.5	21.9	0.87
装飾古墳(釜尾古墳)	36.1	9.3	12.2	15.3	0.76
地下式横穴墓 (宗仙寺地下式横穴)	32.5	19.6	17.4	26.2	1.13
朱玉(尾中原地下式横穴)	33.5	35.7	23.8	42.9	1.50
市販ベンガラ	35.2	28.9	11.6	31.1	2.49
阿蘇黄土を焼いたもの	29.3	22.9	15.1	27.4	1.52
市販水銀朱(丹)	44.5	53.6	25.4	59.3	2.11
市販水銀朱(辰砂)	30.7	44.1	8.6	44.9	5.13
L字状石柁 (最も赤く見えるところ)	41.2	19.1	14.2	23.8	1.35
同側面 (赤茶色に見えるところ)	41.6	14.0	13.3	19.3	1.05

まず、装飾古墳の赤色に用いた顔料をしてみる。装飾古墳の赤色顔料は、これまでのところベンガラのみである。このベンガラには、パイプ状ベンガラ等純粋な酸化第二鉄を主成分とする福岡県内の装飾古墳の場合と¹¹⁾、釜尾古墳のように、発色が悪く砂粒が混じる不純なベンガラ¹²⁾がある。装飾古墳の場合は、後天的な土被りも考えられ水分量の変化次第で見え方は変わる¹³⁾。

また、測色値＝当時の色とするには、これまで検出例のない溶剤利用の問題、退色の過程を検討すべきである。

但し、ベンガラに限れば、その発色の違いはあっても(値に変化はあっても)、 a^* 値、 $+b^*$ 値の比にはあまり変化が無いことが指摘されている¹⁴⁾。このことから、純粋に当時の色そのものとして捉えた比較検討は出来なくとも、同時代の他資料と相対的な比較は、数々の条件付きではあるが可能となる。この相対的な比較には a^*/b^* で求めている。

改めて測色値を見ると、不純なベンガラが用いられる釜尾古墳や横山古墳の赤色は、共に a^* 値が低い。これは、後天的な土の汚れが考えられ同じベンガラでも現在の色味は違う。ベンガラは、安定した物質であるヘマタイトを主成分とするとされるため、被った土の下ではベンガラ本来の色彩が現れていると理解できるが、往時の色再現には現調査方法だけでは迫ることは出来ないため、比較検証としては不十分である。

従って、装飾古墳に用いられるベンガラと同種、同色の可能性が高いが、同系統と言うには、土被り等の後天的な影響から言及出来ない。屋外に露出した装飾古墳彩色の色差を論じるには、後天的な汚れの認められない箇所を追検が必要となる。

次に、地下式横穴墓関連の資料として、宗仙寺地下式横穴墓の壁面剥落片と、尾中原地下式横穴墓出土の朱玉について論じる。両資料は宮崎総合博物館に長く収蔵されていたもので¹⁵⁾、埃等の後天的な汚れがほとんど付いていないため、ある程度の比較が可能である。一見して朱玉の鮮やかさ(C^* 値42.9)が際立つ。朱玉は、パイプ状ベンガラを主成分としたもので、砂粒等が殆ど混じらない。これほど鮮やかな値を示す顔料は無いことから、やはり朱玉そのものは、顔料ではなく供物とする理解が自然であろう。出土品であるL字状石柁も収蔵資料ではあるが、ここまでの鮮やかさには無い。酷似するのは壁面彩色に用いた宗仙寺地下式横穴のベンガラである。恐らく、装飾古墳で用いられるベンガラも、本来このような値を示すだろう。

次に、阿蘇黄土、市販ベンガラを見てみる。熊

本では、下山西遺跡の弥生集落から大量に出土したベンガラ¹⁶⁾の状況から、ベンガラ原料＝阿蘇黄土という仮説が伝統的に存在する。測色値からは、確かに阿蘇黄土を焼いた赤茶色の土は、L字状石柁の測色値と酷似し、市販の工場で作られたベンガラとは異なる。

しかし、酸化鉄を含む黄土は普遍的なもので、余程特徴的な鉱物が見られるか、特徴的な粒子が特定されなければ、阿蘇黄土そのものか証明は難しく、本調査方法では言及できない。

最後に、市販の水銀朱由来の顔料(辰砂・丹)の傾向を見ると、 a^* 値、 C^* 値が極めて高く、考古側が水銀朱発見の切欠を、鮮やかな赤色を手がかりにしていることが改めて確認できる。当然、L字状石柁のそれとは大きく異なっている。

結語

以上、各種ベンガラ等との比較を試みた。恐らく、水銀朱ではなくベンガラ系統の付着物であろう。その色味は、朱玉のような供物として用いられたものではなく、顔料として塗られたベンガラに近い。

既存データのみでの比較であったため、地下式横穴墓塗布のベンガラと値が類似した。本来は、方保田東原遺跡周辺から検出される、箱式石棺、甕棺などの墳墓で内面をベンガラで全面塗布したものや、ベンガラ付土器等、比較検討を重ねることが必要である。墳墓で利用されるものと、土器に塗られるものとの違いがあるかどうかとも踏まえれば、L字状石柁を用い磨り潰した赤色土の利用実態が明確になると期待される。

冒頭で述べたとおり、本論の目的は、測色値を一次報告に盛り込むことを検討課題としている。このような分析は、多数の比較材料、それも遺跡に関連する膨大な赤色土付着土器等との関係を論じなければ、歴史的な解釈には課題が多いことを指摘して結語としたい。

註 出土土器の一部で測色を実施したが、資料数が少ないため解析は留保する。

※1 池田明生 2009 「顔料に関わる考古学的検証の一視点—彩色が施された装飾古墳を中心に—」『肥後考古16号』肥後考古学会

※2 ○柁津信明・池田明生 2009 「石塔の彩色塗装について」『日本文化財科学会第26大会発表資料集』柁津信明・○池田明生 2009 「古墳時代における灰色、黒色顔料の利用」『日本文化財科学会第26大会発表資料集』

※3 池田明生 2009 「装飾古墳モニタリングの方法—土色計を用いた装飾古墳彩色の変化から—」『熊本県立装飾古墳研究紀要』第8集

※4 ○池田明生・柁津信明・増田智仁・森本哲郎・池内克史・林田和人・前田真由子 2008 「三次元計測を用いた装飾古墳製作工程の研究—熊本県千金甲1号墳の事例—」『日本文化財科学会第25大会発表資料集』

- ※5 池田明生編 2009 「茨城県装飾古墳～建信同命が遺したものの～」『装飾古墳の世界シリーズ(8) 平成21年度後期企画展 熊本県立装飾古墳館』
- ※6 池田明生・橋本英俊 2009 「宮崎県・熊本県における赤色顔料の見え(研究ノート)～地下式横穴墓・装飾古墳の顔料について～」『宮崎県立西郷従道考古博物館研究紀要』第5号
- ※7 本田光子 2002 「考古資料としての赤色顔料―弥生時代から古墳時代の色―」『保存科学研究会2002 古代の色』
- ※8 戸高真知子 1989 「赤い供物、朱玉」『えとす』31
- ※9 志賀智史 2008 「前期前方後円(方)墳から出土するベンガラの地域性に関する研究」『日本文化財科学会第25大会発表資料集』
- ※10 近藤協 2002 「宮崎県内出土の館蔵赤色顔料の科学分析結果から」『宮崎県総合博物館研究紀要』第24輯
- ※11 杉津信明・山田拓洋 2000 「大分県下の石仏の彩色について」『保存科学』第39号
- ※12 池田明生 2010 「装飾古墳石室内での温湿度、彩色の見えを対象としたモニタリングシステムの構築」研究報告書 平成21年度笹川科学研究助成金実践研究部門
- ※13 杉津信明・○池田明生 2008 「土色計を用いた装飾古墳彩色の見えの研究」『文化財保存修復学会第30回記念大会研究発表要集』
- ※14 杉津信明 2002 「古墳などに使われた彩色顔料」『保存科学研究会2002古代の色』
- ※15 山崎一雄 1951 「装飾古墳の化学的研究」『古文化財科学』2号(山崎一雄 1987 『古文化財科学』思文閣出版 注釈入り再録より)
- ※16 杉津信明 2006 「弁慶ガ穴古墳における表面水分量の変化と壁画の見え」『日本文化財科学会第23大会資料集』
- ※17 杉津信明 2007 「解説 歴史的建造物における色の記載について」『歴史的建造物における塗装の変遷に関する研究』平成14～17年度科学研究費補助金基礎研究(B) 研究成果報告書 東京文化財研究所 p.77～81
- ※18 ※10と同様

V まとめ

今回の調査は、将来の遺跡整備に際し遺構露出展示資料の収集を目的として実施したものである。

第1調査区では堅穴住居跡と共に道路状遺構が検出されたため、全体的に掘り下げを行わなかった。特に土器溜めが2箇所検出されたが、大型の二重口縁壺を主体に長方形の範囲で遺物が堆積しており、祭祀土坑の可能性も高い。これらは将来の露出展示に利用すればとの配慮から、出土状況の実測と写真撮影のみ行い、遺物の取り上げは行わなかった。

第2調査区では遺跡を取り囲む環濠の存在について確認を行ったが、調査区内では検出に至らなかった。おそらく、北側の方保田川の流れが、台地全体に対する外堀の機能性を持っており、あえて環濠が必要ではなかったと思われる。欄干等は傾斜面及び裾部に存在する可能性も残っている。いずれにしても今後の課題である。

このほか、堅穴住居跡も重なり合っていたが、掘り下げをしなかったため切り合い関係を確認できないまま終わってしまった。中途半端な感じを否めないが、将来の整備に資するために取った措置である。

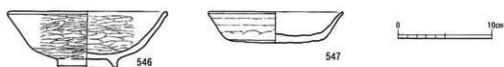
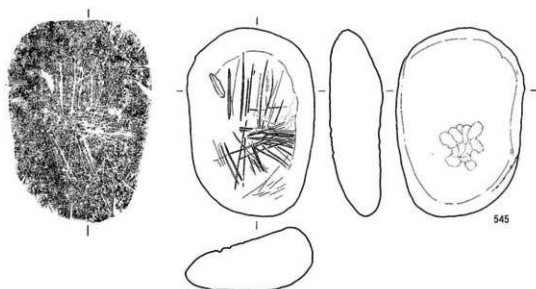
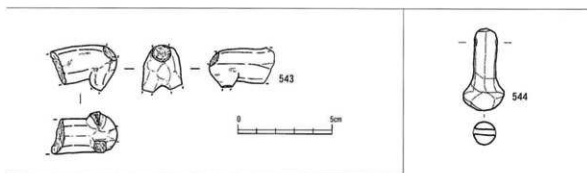
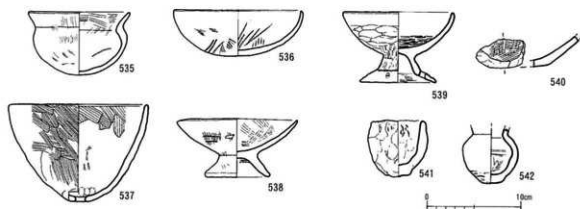
遺物は特徴的なものとして、赤色顔料精製に関する資料がまとまって出土していることである。ベンガラで赤く染まった石杆は、全国的にも類例が無く、貴重な資料である。共存する遺物から、遺跡内に於ける赤色顔料精製の生産エリアとして庄内期から布留期にかけて利用されていたことが推察される。

方保田東原遺跡における遺構の残存状況は、範囲はもとより時間的な幅も広いことがこれまでの調査で明らかになっている。そのため、生活の場としての居住区域、生産の場としての小鍛冶遺構と土器焼成遺構、祭祀遺構、墓域としての甕棺墓、木棺墓、土坑墓等が確認されているが、遺構そのものが重複し、複雑に広がっている。このほか首長の居住地や墓、水田面の確認等今後の課題も山積している。

VI 補遺 (第74図)

ここでは、かつて方保田東原遺跡における報告書を刊行したことから、もれていた資料を紹介する。

535から542は平成3年に個人住宅建設に伴う発掘調査を実施したが、方保田32-2番地から出土した遺物である。報告書は山鹿市立博物館調査報告書第12集「方保田東原遺跡」1992で、報告する際に漏れていたものである。



第74図 補遺分遺物実測図

535から538は3号溝出土で、539から542は遺構に伴わない遺物である。

535はほぼ完形品で、小型丸底壺のようであるが、口縁部が短いため小型の鉢とした。土師質の特徴を示す赤褐色の色彩である。

536は碗状の鉢である。口縁部の一部を欠いている程度でほぼ完形品である。537も完形品の碗である。尖底に1個の孔を穿っている。538は脚付の鉢である。口縁部の一部を欠いている。539も脚付鉢である。脚の大半を欠いているが、脚は小さく3個の孔を穿って透かしとしている。540は壺の底部片であるが、内面に朱を残している。ハケ目の窪みに鮮やかな朱を残したものである。541は手捏ねのミニチュアの鉢である。器壁も厚く表面には皺が多く見られる。542もミニチュアの壺である。底部は小さな平底となっている。

543は平成2年度のサンチェリー工業増築工事に伴う調査で出土した資料で、昨年刊行した山鹿市文化財調査報告書第8集「方保田東原遺跡II」

(2009年2月)に収録しなければならなかったが、山鹿市城所在の梅迫遺跡報告書作成の際梅迫出土の土製品との比較を行った時に比較検討する際混入していたため、報告できなかった。

E-2区内の4号溝上層部からの出土である。四肢動物の土製品で、胸部から臀部までの破片で、後ろ足も欠いている。頭部を欠いているため動物の種類については判断が難しいが、現状では犬の様でもある。胎土は縄文土器に似ているので、縄文時代の犬の土製品であろう。

544は平成3年山鹿市在住の陶芸家五島山氏の子供と共に発掘調査現場見学に来た際に畑から採集した資料である。ご本人に採集した場所の確認を行った結果、第1調査区東側の畑で11番地辺りの畑であることが判明した。資料はきのこ状の土製品で端部に1個の孔が穿ってある。したがって紐を通して吊り下げることを意識しており、鐎形土製品の舌であらう。長さ4.27cm、幅2.15cm、重さ11.2gを測る。

545は方保田東原遺跡調査の際に出土し、石材に線刻が存在するところから、調査期間中に市立博物館で展示したが、展示期間が長期に亘ったため、調査年度や、場所を特定することができなかった。

安山岩の礫で、1面には鋭利な刃物で4～5cmから7cm程度の長さで直線が刻まれている。線刻は太い線で幅2mm、深さ2mm。細い線は幅、深さも0.35mm程度であり、線によっては直角になるものも見られるが、絵画的な要素は観察できなかった。このため、鉄器の刃部を調整するためのものか、祭祀行為による呪術的な行為によるものか断定できなかった。裏面には中央部に敲打による窪

みが残っている。(中村)

546と547は平成12年度の下水道工事(8工区)7～8区において出土した。本報告は山鹿市文化財調査報告書第10集「方保田東原遺跡」12(2009年刊行)第3章第5節に掲載している(49～54頁)。どちらも出土遺構などの詳細は不明である。546はほぼ完形の黒色土器で、内外面に黒色処理とヘラ磨きを施す。547はほぼ完形の土師器で、

(宮崎)

Ⅶ あとがき

山鹿市には方保田東原遺跡をはじめ、裝飾古墳群や大和朝廷の築いた古代山城の陶智城跡、国衆一揆の舞台となった中世山城や近代の街道周辺の歴史的町並み等、貴重な文化遺産が豊富に散在する。教育委員会では、弥生時代から古墳時代にかけての方保田東原遺跡の発展がこれら文化遺産の原点と位置づけ、その意義の普及啓発に努めている。その一環として、これまで方保田東原遺跡を題材とした歴史講座や講演会、発掘調査体験教室等を開催しているところである。

また、保育園や小学校、公民館などの地元関係者や文化財愛護団体と連携して、遺跡公園を舞台としたイベント等を開催することで、遺跡の意義について理解を深めていただくよう努めている。イベントの例としては、周辺の水田で古代米とも呼ばれる黒米・赤米を参加者の手で田植して刈り取り、餅つきやおにぎりや味噌や古代米栽培体験教室、畑地で景観美化も兼ねたヒマワリ畑作りのための種まき体験、芝生広場では子供たちが手作りした紙バック製ランタンのキャンドルを灯して遺跡を照らし出すランタンフェスティバルなどがある。これらのイベント開催にあたっては、多くの市民の協力をいただいております。深く感謝する次第である。

現在、方保田東原遺跡は史跡指定範囲の一部を公園として整備しており、地域住民のウォーキングやグラウンドゴルフ等に利用されている。今後も市民と協働で当遺跡の保護と活用をいっそう推進することで誰もが訪れやすい史跡公園を目指し、郷土の歴史に誇りを持てる人づくりに取り組みたいと考えている。(教育委員会)

遺物觀察表 2

第15表 第2調査区出土遺物調査表①

調査 番号	調査 区別	遺物名	P番号	器種	部位	口径	高さ	色調	粘土・混入物	形成	外面調整	内面調整	底面	備考
274	1	1号住	155	埴	口縁一底部	(18.0)	33.2	7.5187/6 褐色	灰石 角閃石 赤褐色色 雲母	良好	ナデ・タタキ・タタ キ後ナデナデ	ナデ・指押さへ・ナデ	有	外面調整が保護の層に属する
275	2	1号住	155	埴	埴片	不明	不明	10187/3 淡黄褐色 雲母	灰石 石英 角閃石 赤褐色色 雲母	良好	ハケ後線刻	ハケ	有	線刻あり
276	2	1号住	12	台付鉢	胴部	不明 底 9.6	不明	10187/4 淡黄褐色	灰石 赤褐色色 雲母	良好	ハケ・ナデ	ナデ・ハケ	有	
277	3	1号住		台石	埴片	21.2×13.7	-	-	-	-	-	-	-	笠山遺 蓋さ5.324g
278	4	1号住	141	埴	口縁一底部	(15.8)	不明	10187/2 灰白色	灰石 石英 角閃石 赤褐色色 雲母	良好	ナデ・ハケ?	ナデ・ヘラケズリ?	有	
279	4	2号住	158	鉢	口縁一底部	(21.0)	不明	10187/2 にぶい黄褐色	灰石 石英 角閃石 赤褐色色 雲母	良好	ナデ・ハケ	ハケ	有	
280	6	1号住	179	脚台付壺	口縁一底部	13.2	不明	10187/2 灰白色	灰石 赤褐色色 雲母	良好	指押さへ・ハケ	ハケ・ヘラケズリ	有	調整が佳
281	5	2号住	175	壺	口縁一底部	(16.5)	不明	7.5187/4 淡黄褐色	灰石 赤褐色色	良好	ナデ・タタキ・タタ キ後ハケ	ナデ・ハケ・タタキ後ハ ケ・ヘラケズリ	有	
282	7	1号住	178	壺	ほぼ底部	17.0	23.2	2.5187/2 灰白色	灰石 角閃石 赤褐色色	良好	ナデ・タタキ後ハ ケ・ナデ	ハケ・ヘラケズリ	有	
283	6	2号住	174	壺	口縁一底部	(13.2)	17.1	10187/3 淡黄褐色	灰石 石英 赤褐色色 雲母	良好	ナデ・ハケ	ナデ・ヘラケズリ	有	底部に指押さへ多数あり
284	5	1号住	173	壺	ほぼ底部	14.8	21.2	10187/1 灰白色	灰石 赤褐色色 雲母	良好	ナデ・ハケ	ナデ・ヘラケズリ	有	全体に磨減している
285	8	1号住	170	壺	胴部一底部	不明	不明	5187/8 褐色	灰石 石英 赤褐色色	良好	ヘラミガキ	ナデ・ハケ・ナデ	有	全体に磨減している
286	9	2号住	186	小型外蓋章	ほぼ底部	11.2	7.9	5187/4 にぶい赤褐色	灰石 石英 角閃石 赤褐色色 雲母	良好	ヘラミガキ	ヘラミガキ・ナデ	有	
287	3	2号住	183	小型外蓋章	ほぼ底部	11.8	7.0	7.5187/6 褐色	灰石 石英 角閃石 赤褐色色	良好	ナデ・ハケ	ナデ	有	内面調整部に赤色顔料付着
288	9	2号住	182	小型外蓋章	ほぼ底部	13.1	6.9	7.5187/8 褐色	灰石 石英	良好	ナデ・ヘラミガキ	ナデ・ヘラケズリ	有	
289	9	1号住	172	鉢	口縁一底部	14.7	9.6	7.5187/6 褐色	灰石 石英 赤褐色色	良好	ナデ・ハケ	ナデ	有	
290	8	2号住	178	壺	口縁一底部	14.6	13.7	7.5187/2 灰白色	灰石 赤褐色色	良好	指押さへ・ナデ	指押さへ・ナデ	有	
291	10	3号住	188	台付鉢	口縁一底部	14.0-14.6	不明	10187/1 灰白色	灰石 石英 赤褐色色	良好	ナデ・指押さへ後ナ デ・指押さへ	ナデ	有	やや重である
292	10	1号住	180	台付鉢	口縁一底部	10.8	9.9	7.5187/6 褐色	灰石 赤褐色色	良好	ハケ	不明	有	白粘土が少量混入する
293	10	2号住	184	台付鉢	胴部	不明 底 3.3	不明	2.5187/8 初黄褐色	灰石 赤褐色色	良好	ナデ	ナデ	有	
294	11	4号住	162	壺	口縁一底部	(16.7)	不明	7.5187/1 黄褐色	灰石 角閃石 赤褐色色 雲母	良好	ナデ・タタキ後ハケ	ハケ・ナデ	有	
295	11	2号住	163	壺	口縁一底部	(16.8)	不明	10187/3 淡黄褐色	灰石 角閃石 赤褐色色 雲母	良好	ナデ・ハケ・タタ キ後ハケ	ナデ・ハケ	有	
296	11	3号住	164	高杯	口縁一底部	(23.8)	不明	10187/3 淡黄褐色	灰石 角閃石 赤褐色色 雲母	良好	ナデ・ハケ・タタ キ後ハケ	ナデ	有	
297	12	1号住	165	鉢	口縁一底部	(17.8)	不明	10187/2 にぶい黄褐色	灰石 赤褐色色	良好	ハケ・タタキ	ハケ	有	全体に磨減している

第16表 第2調査区出土遺物観察表②

遺物 番号	調査 区別	時期	通称名	P番号	器種	部位	口徑	耐高	色調	粘土・混入物	焼成	外面磨盤	内面磨盤	黒曜	備 考
298	12	2	5号住	166	高坏	脚部	不明 底(12.8)	不明	10/82/4 浅黄褐色	灰石 赤褐色粒 雲母	良好	ハケ・ナデ	ナデ・ナデ	有	無
299	13	1	6号住	210	壺	口縁・底部	(14.8)	25.1	7.5/87/3 にふい黄褐色	灰石 赤褐色粒 雲母	良好	指押さえ・ハケ・ナ デ後ハケ・タタキ	ハケ・ナデ	有	有
300	14	1	6号住	409	壺	口縁・頸部	(34.8)	不明	10/82/3 浅黄褐色	灰石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ	ナデ	有	有
301	15	1	6号住	208	壺	口縁・頸部	20.5	不明	7.5/87/3 にふい黄褐色	灰石 角閃石 雲母	良好	ナデ・ハケ後ナデ ナデ・ハケ	ナデ	無	無
302	14	2	6号住	207	壺	口縁・頸部	17.4	不明	7.5/82/2 灰白色	灰石 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	刻目・ナデ・ハケ ハケ後刻目・ハケ	ナデ・ハケ・ナデ	有	有
303	15	2	6号住	211	壺	口縁・頸部	(18.0)	不明	10/82/3 浅黄褐色	灰石 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ後刻目・ナデ・ ハケ・刻目	ナデ	無	無
304	16	1	6号住	407	瓶	底部	14.6	11.5	7.5/82/3 浅黄褐色	灰石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ・タタキ	指押さえ・ヘラクス リ・ナデ	有	有
305	16	2	6号住	209	鉢	口縁・底部	(11.2)	7.4	7.5/87/4 にふい黄褐色	灰石 角閃石 雲母	良好	指押さえ	ハケ・ナデ	有	有
306	16	3	6号住	206	スプーン型 土器	柄	不明 2.0×2.3	不明	10/87/2 にふい黄褐色	灰石 赤褐色粒 雲母	良好	ハケ	—	無	有
307	16	4	6号住	214	青磁碗	口縁部	不明	不明	5/77/1 灰白色	—	—	—	—	—	—
308	17	3	7号住	194	鉢	口縁・底部	(15.0)	7.5	10/87/4 にふい黄褐色	灰石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ・ハケ後ナデ ナデ・ハケ・ナデ	ナデ・ヘラミガキ	有	有
309	17	2	7号住	193	瓶	底部	不明	不明	10/86/3 にふい黄褐色	灰石 雲母	良好	ナデ	ハケ	有	有
310	17	1	7号住	196	瓶	胴部	(不明)	不明	7.5/86/6 褐色	灰石 石灰 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ・指押さえ	ナデ・ヘラクスリ	有	有
311	18	2	8号住	203	壺	口縁・胴部	(17.8)	不明	7.5/82/6 明褐色	灰石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ・タタキ後ハケ ナデ・タタキ	ナデ・ハケ・ヘラク ズリ	有	有
312	18	1	8号住	220	壺	ほぼ完形	15.8	22.5	10/82/1 褐色	灰石 雲母	良好	ナデ・ハケ後ナデ・ハ ケ後指押さえ・ハケ ナデ	ナデ・ヘラクスリ ナデ・ナデ	有	有
313	19	2	8号住	199	壺	口縁・胴部	(13.8)	不明	—	灰石 赤褐色粒	良	ナデ・ハケ	ナデ・指押さえ・ナデ	有	有
314	20	1	8号住	197	壺	頸部	不明	不明	7.5/87/6 褐色	灰石 石灰 角閃石 雲母	良好	ハケ・ナデ・ハケ・ナデ	ハケ	有	有
315	021	1	8号住	198	壺	口縁・頸部	(23.8)	不明	7.5/87/6 褐色	灰石 石灰 雲母	良好	ナデ・ハケ	ハケ	有	有
316	19	1	8号住	217	壺	口縁・胴部	(15.9)	不明	10/86/6 明黄褐色	灰石 角閃石 赤褐色粒 雲母	良	ナデ・ハケ・ナデ ハケ	ナデ・ハケ・ナデ	有	有
317	20	2	8号住	202	壺	胴部・胴部	(不明)	不明	5/82/6 明黄褐色	灰石 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	タタキ・ナデ・ナデ	ヘラクスリ	有	有
318	022	1	8号住	201	小型丸底壺	口縁・底部	11.6	9.1	10/87/4 にふい黄褐色	灰石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	有	有
319	022	2	8号住	221	鉢	口縁・底部	10.9	4.4	10/87/2 にふい黄褐色	灰石 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ	ナデ	有	有
320	022	3	8号住	204	鉢	口縁・底部	6.0	1.9	10/87/2 にふい黄褐色	灰石 雲母	良好	ナデ	ハケ	有	有
321	023	1	9号住	360	壺	口縁・底部	(19.4)	38.0	10/82/1 黒色	角閃石 赤褐色粒	良好	ナデ・指押さえ・ハケ ハケ・タタキ後ハケ	ナデ・ハケ・ハケ	有	有

第17表 第2調査区出土遺物観察表③

調査区 番号	調査区 区分	通称名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	粘土・混入物	焼成	外面調整	内面調整	裏面	備考
322	025	1	9号住	384	壺	口縁-胴部	(19.5)	7.5187/2 灰褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良	ナデ-ハケ後ナデ ハケ後タタキ	ナデ-ハケ	無	有
323	032	2	9号住	388	壺	胴部	不明	10196/2 灰黄褐色	長石 雲母	良好	ハケ-ナデ	砂型-ナデ	無	有
324	024	1	9号住	389	壺	口縁-胴部	16.0	10196/4 にふい赤褐色	長石 角閃石 雲母	良	ナデ-タタキ後ナデ ナデ	ハケ後ナデ-ハケ後 ヘラケズリ	無	有
325	026	2	9号住	395	壺	口縁-胴部	(17.2)	5196/2 灰白色	長石 角閃石 雲母	良	ナデ-周壁をえ-タタキ後 ナデ-タタキ後ハケ	ナデ-ハケ-ハケ後 ヘラケズリ	無	有
326	024	2	9号住	387	壺	口縁-底部	(14.0)	5197/6 褐色	長石 石英 角閃石	良	ナデ-ハケ-ナデ	ハケ後ナデ-ハケ後 ナデ	無	有
327	026	1	9号住	390	壺	口縁-底部	(13.0)	10196/2 灰黄褐色	長石 石英 角閃石 雲母	良	ナデ-ハケ	ナデ-ヘラケズリ- 指押さえ	無	有 全体に煤付着
328	025	2	9号住	386	壺	口縁-胴部	(14.0)	2.5196/2 灰白色	長石 角閃石 雲母	良	ナデ-タタキ-ハケ- タタキ	ナデ-ヘラケズリ	無	有 粘土の継目がよく分かる
329	027	1	9号住	339	壺	口縁-胴部	(16.5)	10197/3 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石	良好	ナデ-ハケ-ナデ	ナデ-ヘラケズリ	無	有
330	029	1	9号住	389	壺	口縁-胴部	(16.2)	10196/2 灰黄褐色	長石 角閃石	良好	ナデ-ハケ後ナデ- ハケ	ナデ-ハケ後ナデ- ヘラケ ズリ	有	無
331	028	1	9号住	383	壺	口縁-胴部	16.2	7.5198/4 浅黄褐色	長石 石英 角閃石	良好	ナデ-ハケ	ハケ-ヘラケズリ- ハケ-ヘラケズリ	有	無 内面全体に赤色顔料付着
332	031	1	9号住	267	壺	口縁-胴部	(16.0)	10197/3 浅黄褐色	長石 石英 角閃石 雲母	良好	ナデ-ヘラケズリ- ナデ	ナデ	有	有
333	031	2	9号住	348	壺	口縁-胴部	(16.0)	10198/2 灰白色	長石 石英	良好	ナデ	ナデ	無	有
334	030	1	9号住	349	壺	胴部-胴部	(不明)	2.5198/3 赤褐色	長石 角閃石	良好	ナデ-ハケ後ナデ- ハケ	ナデ-ハケ後ナデ- ナデ-ヘラケズリ	有	無
335	032	1	9号住	403	壺	底部	不明	10197/3 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 雲母	良	ハケ-ナデ	ヘラケズリ	有	無 器底のある鉢 失底
336	034	5	9号住	268	鉢	変形	10.0	10198/1 浅黄褐色	長石 石英 角閃石 雲母	良好	ナデ	ナデ-ヘラケズリ	有	無
337	034	1	9号住	346	鉢	口縁-底部	13.1	10198/2 灰白色	長石 角閃石	良好	ナデ	ナデ-ヘラケズリ	無	無
338	034	2	9号住	339	鉢	口縁-底部	(12.0)	10198/3 浅黄褐色	長石 角閃石	良好	ナデ	ハケ後ナデ	有	無
339	034	3	9号住	389	鉢	口縁-底部	(20.0)	10198/2 灰白色	長石 角閃石 雲母	良	ヘラミガキ	ヘラミガキ	有	無
340	034	4	9号住	390	台付鉢	変形	14.0	10198/3 浅黄褐色	長石 石英 雲母	良	ナデ	ハケ-ナデ	有	無
341	035	1	9号住	389	大型鉢	口縁-胴部	(44.0)	10198/4 浅黄褐色	長石 角閃石	良	ナデ-タタキ	ヘラケズリ-ナデ- ハケ	無	無 外壁面に赤色顔料付着
342	036	1	9号住	386	鉢	口縁-底部	(14.5)	2.5196/3 灰白色	長石 石英 角閃石 雲母	良	ハケ-ナデ	ナデ-ヘラケズリ- ナデ	有	無 器底上での還元
343	033	2	9号住	388	高坏	底部	(不明)	2.5197/6 褐色	角閃石	良	ハケ-ナデ	ナデ	無	無 シボリ-ヘラケズ リ-ナデ
344	033	3	9号住	388	高坏	胴部	(不明)	10198/6 黄褐色	長石 角閃石	良	ナデ	ナデ-ハケ-ヘラケ ズリ-ナデ	無	無 器底前穿孔4ヶあり
345	033	1	9号住	386	高坏	胴部-胴部	(不明)	10198/3 浅黄褐色	角閃石	良	ナデ	ナデ	無	無

第18表 第2調査区出土遺物観察表④

遺物番号	品名・材質	通称名	P番号	状態	部位	口径	高さ	色調	粘土・埋入物	模刻	外面図	内面図	黒曜	備考
346	338	10住	304	壺	口縁-頸部	(3.8.0)	不明	1078/3 にふい暗色	長石 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナデ	黒	頂部に断面三角形の貼付実写
347	337	2 10住	314	壺	口縁-胴部	15.0	不明	7.518/2 にふい暗色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ-タタキ後ハケ	ナデ-ハケ-ヘラケ	黒	内面図口縁部写像が激しい
348	339	2 10住	308	壺	口縁-胴部	(17.2)	不明	7.518/2 灰褐色	長石 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ-ハケ	ナデ-ヘラケズリ	黒	全体に磨滅
349	339	1 10住	317	壺	口縁-頸部	(15.8)	不明	5186/4 にふい暗色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナデ-ヘラケズリ	黒	全体に磨滅
350	337	1 10住	320	壺	口縁-胴部	(14.2)	不明	1018/2 灰白色	長石 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ-ハケ後ナデミ	ナデ-ヘラケズリ	有	土質細かく良い 外面に磨滅い種確状の圧痕あり毛髪か?
351	342	1 10住	310	壺	口縁-胴部	(19.8)	不明	1018/2 灰白色	長石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナデ-ヘラケズリ	黒	
352	340	1 10住	320	二重口縁壺	口縁-底部	(17.4)	24.4	1018/3 にふい暗色	長石 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ-ハケ後ナデ-ハケ ナデミハケミナデ	ナデ-ヘラケズリ後ナデ	有	
353	341	1 10住	334	壺	胴部	(不明)	不明	1018/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ-ハケ	ナデ-ハケ	有	
354	338	2 10住	324	壺	胴部	(不明)	不明	1018/3 透明褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ-ハケ	ヘラケズリ	黒	裾附らしき痕あり
355	339	3 10住	316	鉢	口縁-胴部	(28.8)	不明	5186/6 褐色	長石	良好	ナデ-ハケ後ナデ	ナデ-ハケ	有	胴部に二種類の施文具を使用
356	346	1 10住	328	鉢	底部	11.1	6.5	1018/4 透明褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ-ヘラケズリ後 ヘラミガキ	ハゲ後ナデ後ヘラミガキ ナデ後ヘラミガキ	有	やや大きい痕を含む細土 面である
357	348	1 10住	326	鉢	口縁-底部	(11.8)	4.4	1018/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ヘラケズリ後ナデ	ハケ	黒	
358	347	1 10住	306	坏	底部	10.7	3.4	5186/6 褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ-ヘラケズリ	ナデ後ヘラミガキ	黒	
359	347	2 10住	313	坏	口縁-底部	11.8	3.0	5187/6 褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ-指押さえ	ナデ	有	
360	348	2 10住	321	鉢	口縁-底部	(12.4)	5.45	1018/3 透明褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ヘラケズリ後ナデ	ヘラケズリ後ナデ	黒	
361	347	3 10住	38	鉢	口縁-胴部	14.2	不明	1018/4 透明褐色	長石 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ハゲ後ナデ	ハケ	有	
362	346	2 10住	329	鉢	底部	13.0	9.7	5187/6 褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ヘラ調整後ナデ	有	面である 底面に厚みがある
363	345	1 10住	301	台付鉢	ほぼ底部	14.8	10~10.5	1018/3 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ-ハケ-ナデ	タタキ後ナデ-ハケ 調整後ナデ	有	少し型
364	345	3 10住	325	台付鉢	ほぼ底部	14.3	8.8~8.7	2.5186/8 褐色	長石 石英 白粘土 赤褐色 雲母	良好	ハゲ後ナデ後ヘラミガキ ナデ	ミガキ-ナデ	黒	
365	348	3 10住	326	台付鉢	底部	不明	不明	2.5186/3 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ナデ-ヘラ調整後ナデ	有	
366	345	2 10住	331	台付鉢	ほぼ底部	10.5	5.7~5.2	1018/3 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ	ヘラ調整後ナデ	黒	
367	348	4 10住	319	台付鉢	底部	不明	不明	5186/4 褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 雲母	良好	ナデ後ヘラミガキ- ナデ	ナデ後ミガキ-ハケ 後ナデ	黒	
368	344	1 10住	333	高坏	口縁-胴部	18.8	不明	7.5186/6 褐色	長石 角閃石 雲母	良好	ナデ-ヘラケズリ	ハゲ後ヘラミガキ- ナデ	黒	
369	344	2 10住	322	高坏	底部	不明	不明	7.5187/6 褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色 白粘土	良好	ハゲ後ナデ	ヘラケズリ-ナデ	黒	

第19表 第2調査区出土遺物観察表⑤

調査区	遺物名	数量	形状	口径	器高	色調	粘土・混入物	焼成	外面調整	内面調整	裏面	備考
370 043	1 10住	315	高坏	口縁-底部 (25.8)	不明	2. 5YR5/8 褐色	長石 赤褐色粒 雲母	良好	ハケ-ハケ後ヘラミ ガキ-ハケ	ハケ-ハケ後ヘラミ ガキ-ハケ後ナデ	黒	
371 044	3 10住	318	高坏	口縁-底部	23.8	7. 5YR6/4 浅黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	やや 良好	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	黒	
372 042	3 10住	305	鉢	不明 底 (9.0)	不明	10YR7/2 にふい黄褐色	長石 角閃石 雲母	良好	ナデ	指押さへ-ナデ	有	焼成前穿孔 3ヶ所形で残る
373 042	2 10住	309	鉢	不明 底 (10.8)	不明	7. 5YR7/6 褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 白粘土	やや 良好	ハケ-ナデ	ナデ	黒	全体に磨減
374 049	2 10住	326	手皿 不明土器	口縁-底部 (11.9)	11.9	10YR6/3 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ハケ調整後ナデ	ナデ	有	型である
375 049	1 10住	314	甕	ほぼ定形 11.5~10.5	12~11.4	10YR8/3 浅黄褐色	長石 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ハケ	ヘラケズリ	黒	底部に1ヶ所焼成前穿孔あり 少し型である
376 055	1 11住	296	甕	口縁-胴部 (16.0)	不明	10YR8/3 灰白色	長石 石英 角閃石	良好	ナデ	ナデ-ナデ後ハケ	有	
377 052	1 11住	263	脚付甕	不明 底 (12.4)	不明	7. 5YR6/4 にふい黄褐色	長石 角閃石 雲母	良好	ハケ-ナデ	ナデ-砂型-ハケ	有	
378 052	2 11住	285	甕	口縁-胴部 (20.7)	不明	10YR7/3 にふい黄褐色	長石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ-タタキ-タタ キ後ハケ	ナデ-ハケ-ナデ	有	
379 052	3 11住	373	甕	口縁-胴部 (17.0)	不明	7. 5YR7/4 にふい黄褐色	長石 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ-指押さへ後ナデ- タタキ-タタキ後ハケ	ナデ-ハケ-ヘラケ ズリ	有	
380 050	2 11住	278	甕	口縁-胴部	14.0	10YR7/3 にふい黄褐色	長石 角閃石 赤褐色粒 砂粒多い	やや 良好	ナデ-ハケ	ナデ-ヘラケズリ	有	胴部に極浅めの沈線あり
381 055	2 11住	292	甕	口縁-胴部 (17.0)	不明	10YR6/2 反白色	長石 雲母	良好	ナデ-返状文-ハケ	ナデ-ヘラケズリ	有	
382 054	1 11住	289	甕	口縁-胴部 (17.0)	不明	7. 5YR6/8 浅黄褐色	長石 石英 角閃石 雲母	良	ナデ-ハケ	ナデ	有	内側面全体に赤色顔料付着
383 052	2 11住	274	甕	口縁-胴部 (14.2)	不明	10YR1/1 黒色	長石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ-ハケ後ナデ- ハケ	ナデ-ヘラケズリ	有	
384 051	2 11住	276	甕	口縁-胴部	13.3	10YR6/3 浅黄褐色	長石 赤褐色粒 雲母	やや 良好	ナデ-ハケ後ナデ	ナデ-ハケ後ナデ- ナデ	有	調整不十分で粘土層目わずかに残る
385 053	1 11住	357	甕	ほぼ定形	11.7	8Y 暗灰色	長石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ-ハケ	ナデ-ヘラケズリ- ナデ	有	底部に穿孔あり
386 051	1 11住	277	甕	口縁-底部	13.8	10YR6/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ-ハケ-ヘラケ ズリ後ナデ	ナデ-ヘラケズリ	有	底部にモミ類と泥状の附層あり
387 050	1 11住	277	甕	胴部-胴部 (不明)	不明	10YR5/1 褐色	長石 角閃石 赤褐色粒 雲母	やや 良好	ナデ-ハケ	ナデ-ヘラケズリ後 ナデ	有	
388 056	1 11住	275	甕	口縁-胴部 (23.5)	不明	7. 5YR5/4 にふい黄褐色	長石 雲母	良好	ナデ-削み目-ハケ後 ナデ-タタキ後ハケ	ナデ-ハケ	有	内側面口縁部に黒い漆の跡なものを 塗布してある
389 058	2 11住	260	小型甕	ほぼ定形	12.2	5YR6/6 褐色	長石 角閃石 赤褐色粒	良好	ヘラケズリ後ナデ-ヘ ラケズリ後ヘラミガキ	ハケ-ハケ後ナデ	有	型い調整
390 058	1 11住	361	小型丸蓋甕	ほぼ定形	11.6	7. 5YR7/6 褐色	長石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ後ヘラミガキ	ナデ後ナデ	有	
391 062	1 11住	268	小型丸蓋甕	口縁-胴部 (13.4)	不明	7. 5YR6/4 浅黄褐色	長石 赤褐色粒	良好	ハケ後ナデ	ナデ	有	外側面に吹き寄せた痕あり
392 061	3 11住	375	鉢	口縁-胴部 (12.2)	不明	10YR8/3 浅黄褐色	長石 雲母	良好	ナデ	ナデ	有	
393 060	1 11住	351	鉢	ほぼ定形	12.3	5YR6/6 褐色	長石 赤褐色粒	不良	磨減しているか不明	磨減しているか不明	有	

第20表 第2調査区出土遺物観察表⑥

遺物番号	調査区	通称名	P番号	種類	部位	口径	高さ	色属	粘土・埋入物	焼成	外面調整	内面調整	周壁	備考
394 060	2	11住	368	鉢	口縁-底部	(15.0)	7.6	10B7/1 灰白色	長石 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ	厚減しているが不明瞭	有	焼熱により色調が赤変している
395 060	3	11住	366	鉢	胴部-底部	不明	不明	2.5B6/6 褐色	長石 石英 赤褐色粒	良好	ハケ	ナデ	有	
396 059	1	11住	365	鉢	口縁-胴部	16.9	不明	10B7/3 にふい黄褐色	長石 角閃石 赤褐色粒 雲母	やや 良好	ハケ後ナデ-ヘラク ズリ	ナデ	無	全体にやや厚減
397 060	4	11住	284	鉢	口縁-底部	(12.7)	5.1	10G5/8 赤色	長石 赤褐色粒	良	厚減しているが不明瞭	ハケ-指押さえ	有	外周面が焼熱している
398 061	2	11住	277	台付鉢	口縁-底部	(12.0)	不明	2.5B5/6 明赤褐色	赤褐色粒	良好	ハケ後ヘラクズリ	ナデ	無	古代土器類か?
399 061	1	11住	279	台付鉢	口縁-底部	13.7	6.9	2.5B6/6 褐色	長石 赤褐色粒 白粘土	良好	ナデ-ハケ-ナデ	ナデ	無	焼成前穿孔4ヶあり
400 057	1	11住	281	高坏	口縁-胴部	(23.0)	16.1	7.5B7/6 褐色	長石 石英 赤褐色粒	良好	ナデ後ヘラクズリ	ナデ	無	焼成前穿孔1ヶあり、欠けている為 数は不明
401 057	2	11住	262	高坏	胴部	不明	不明	10B8/3 浅黄褐色	長石 角閃石	良好	ナデ	ナデ	有	
402 062	2	11住	364	器台	口縁-胴部	9.0	不明	2.5B7/6 褐色	長石 角閃石	良好	ナデ	ナデ	無	
403 061	4	11住	282	スプーン型 土器	破片	-	厚 1.7×1.6	10B5/2 灰黄褐色	長石 角閃石	良好	ナデ		有	
404 089	9	一括		胴皿	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	重さ1.2g
405 066	1	A-1	337	甕	口縁-胴部	(17.0)	不明	10B8/3 浅黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ-ハケ後ナデ-タタキ ナデ-ハケ後ナデ-タタキ	ナデ-ハケ-ハケ後 ナデ-ハケ後ナデ-タタキ	有	
406 066	1	A-1	147	甕	口縁-胴部	(16.0)	不明	10B6/2 灰黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒	良好	ハケ	ナデ-ハケ後ナデ-タタキ	有	外周面胴部に突き寄れ跡あり
407 066	2	A-1	338	甕	口縁-底部	16.6	(25.4)	10B7/3 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒	良好	ナデ-ハケ後ナデ	ナデ-ハケ-ヘラク ズリ	有	内周面全体的に赤色顔料塗りに付着
408 069	2	A-1	340	脚台付甕	胴部	不明 底部10.2	不明	2.5B7/1 灰白色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ハケ後ナデ	ナデ	無	
409 078	2	A-1	335	鉢 (土器類)	胴部-底部	不明	不明	5B7/6 褐色	長石 角閃石 赤褐色粒	良好	全体に厚減	全体に厚減	無	
410 083	2	一括		甕	口縁-胴部	(16.4)	不明	5B7/8 褐色	長石 石英 角閃石	良好	ナデ	ナデ	有	
411 068	2	A-2	377	小型九底甕	胴部-底部	不明	不明	10B7/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	やや 良好	ナデ-ハケ後ナデ-タタキ ナデ-ハケ後ナデ-タタキ	ナデ	無	
412 078	4	A-2	341	鉢 (土器類)	口縁-底部	9.7	6.0	2.5B6/6 褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒	良好	ナデ-ハケ後ナデ	ハケ-ナデ	有	胴部不十分
413 074	1	A-2	344	小型九底甕	口縁-底部	11.9	5.8	10B7/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒	良好	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	無	
414 074	3	A-2	343	鉢 (土器類)	口縁-底部	14.4	4.8	5B7/6 褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒	良好	ナデ-ヘラクズリ後 ナデ	ナデ	有	
415 074	5	A-1	338	鉢 (土器類)	口縁-底部	(12.2)	3.9	10B8/4 浅黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ-ヘラクズリ後 ナデ	ナデ	無	
416 074	4	A-2	342	鉢 (土器類)	口縁-底部	(12.2)	3.5	5B7/6 褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒	良好	ナデ-ヘラクズリ後 ナデ	ナデ	無	
417 076	1	A-2	346	鉢	口縁-胴部	(17.4)	不明	5B6/6 褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒	良好	ナデ-ハケ	ハケ-ナデ	有	胴部不十分

第21表 第2調査区出土遺物観察表⑦

調査番号	調査区	遺物名	位置	部位	口径	高さ	色調	粘土・混入物	焼成	外面調整	内面調整	黒灰	備考
418	076	3	A-2	鉢	口縁一断面	不明	2.5165/6 赤褐色	長石・石灰・角閃石	良好	ナデ後ハケ	ハケ・ハケ後ナデ	無	
419	076	1	A-2	鉢	ほぼ定形	7.7	7.5187/6 赤褐色	長石・角閃石・雲母	やや良好	ナデ・ヘラカズリ	ナデ	有	
420	069	3	A-2	鉢	不明	不明	2.5187/8 赤褐色	長石・石灰・角閃石	良好	ハケ後ナデ	ナデ	無	
421	069	4	A-3	小皿	口縁一断面	12.0	2.5166/6 赤褐色	長石・石灰・角閃石	良好	ナデ	ナデ・ヘラミガキ	有	
422	074	2	A-3	小皿	口縁一断面	9.4	5166/8 赤褐色	長石・石灰・角閃石	やや良好	ハケ後ナデ	ハケ後ミミガキ	無	
423	064	2	A-5	鉢	ほぼ定形	15.1	10166/2 赤褐色	長石・角閃石・雲母	良好	ナデ	ナデ・ヘラカズリ	有	
424	082	1	A-5	鉢	不明	不明	2.5168/2 灰白色	角閃石	良	ハケ・ナデ	ナデ	無	3ヶ所に通孔の下辺が見られる
425	069	5	A-7	高坏	底面	15.9	10164/1 赤褐色	長石・石灰・角閃石	良好	ナデ	ナデ	無	
426	076	2	A-7	高坏	不明	不明	10167/3 赤褐色	長石・石灰・角閃石	良好	全体に磨滅	ナデ	無	全体に磨滅
427	082	2	A-7	碗	底面	不明	10168/4 赤褐色	長石	良好	ヘラカズリ	ナデ・ヘラミガキ	無	
428	076	1	A-8	鉢	定形	6.0	5167/6 赤褐色	長石・石灰・角閃石	良好	ハケ後ナデ	ヘラミガキ	有	
429	069	1	A-8	鉢	口縁一断面	(14.6)	10168/4 赤褐色	長石・石灰・角閃石	良好	ナデ・波状文・ハケ	ナデ・ヘラカズリ	有	
430	071	1	A-8	鉢	不明	不明	10166/8 赤褐色	長石・角閃石	良	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	有	
431	063	2	B-4	鉢	ほぼ定形	15.8	10168/4 赤褐色	長石・角閃石	良好	ナデ・タタキ後ハケ	ナデ・ヘラカズリ	有	
432	080	1	B-4	鉢	口縁一断面	(19.3)	10166/6 赤褐色	長石・石灰・角閃石	やや良好	ナデ・タタキ後ハケ	ナデ・ヘラカズリ	有	
433	065	1	B-5	鉢	ほぼ定形	17.2	10167/3 赤褐色	長石・石灰・角閃石	良	ナデ・タタキ後ハケ	ナデ・ヘラカズリ	有	内器底部にお米の焦げ跡らしき物多く付着
434	065	2	B-5	鉢	ほぼ定形	17.5	10167/4 赤褐色	長石・石灰・角閃石	やや良好	ナデ・タタキ後ハケ	ナデ・ヘラカズリ	有	
435	087	2	通検外	鉢	不明	不明	2.5166/8 赤褐色	長石・石灰・角閃石	良好	タタキ後ハケ・不明	ヘラカズリ	有	全体に歪、内外共に磨滅している
436	063	1	B-5	鉢	口縁一断面	(16.2)	10166/2 赤褐色	長石・石灰・角閃石	良好	ナデ・タタキ後ハケ	ナデ・ヘラカズリ	有	下半は磨滅により割損
437	087	1	通検外	鉢	口縁一断面	16.6	10167/2 赤褐色	長石・石灰・角閃石	良好	ナデ・ハケ後	ナデ・ヘラカズリ	有	
438	064	1	B-5	鉢	口縁一断面	16.5	10168/3 赤褐色	長石・石灰・角閃石	良好	ナデ・ハケ	ナデ・ヘラカズリ	有	口縁底部内面に浅い文様あり
439	072	2	B-5	鉢	口縁一断面	(14.8)	10168/3 赤褐色	長石・石灰・角閃石	良好	ナデ・ナデ後ハケ	ナデ・ヘラカズリ	有	
440	073	1	B-5	鉢	口縁部	16.8	10168/3 赤褐色	長石・角閃石	良好	ナデ	ナデ	有	きれいに打ち欠いてある
441	070	2	通検外	鉢	口縁一断面	(17.0)	10166/3 赤褐色	長石・石灰・角閃石	良好	ナデ・ナデ後ハケ	ナデ・ヘラカズリ	有	二重口縁部の歪

第22表 第2調査区出土遺物観察表⑧

遺物番号	調査区	位置	遺物名	P番号	器種	部位	口径	高さ	色調	粘土・混入物	焼成	外面調整	内面調整	周面	備考
442	070	1	透模外	236	壺	口縁-胴部	13.5	不明	1078/3 浅黄褐色	長石 角閃石 雲母	良好	ハケ後ナデ-ハケ	ナデ-ナデ-ハケ	無	頭部内面の接合部が明確に露る
443	072	1	B-5	247	壺	頸部-底部	不明	不明	2.5187/4 浅黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ-ハケミミ-ヘラケ スリ-ナデ-ヘラケスリ	ナデ-ナデ-ヘラケスリ	有	
444	081	1	透模外	254	鉢	口縁-底部	12.8	9.45	1078/3 にふい黄褐色	長石 角閃石 赤褐色 色粒	良好	ハケ後ナデ	ハケ-ナデ	無	
445	077	2	透模外	237	鉢	縁は突起	13.0	6.7	1078/2 灰白色	長石 石英 角閃石	良好	ナデ-ハケ	ナデ	有	全体にやや隆減
446	072	3	B-4	286	杯 (土器器)	口縁-底部	(12.8)	3.3	2.5186/8 褐色	長石 石英 赤褐色 粒	良好	ナデ-ヘラケスリ	ナデ	無	
447	079	2	透模外	243	鉢	縁は突起	16.2	7.3	1078/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ-ハケ	有	
448	081	3	透模外	249	台付鉢	縁は突起	13.4	6.0	7.5187/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ後ヘラミミガキ- ナデ	ハケ調整後ナデ後 ヘラミミガキ-ナデ	無	底面は粘土
449	081	2	透模外	235	台付鉢	縁は突起	13.1	9.4~ 9.0	7.5187/4 にふい黄褐色	陶器	良好	ナデ後ヘラミミガキ- ナデ	ナデ後ヘラミミガキ- ナデ	有	焼成調整孔3ヶあり 杯部中央に3.5mmの円形のへこみあり
450	077	1	透模外	240	高坏	口縁-底部	20.0	不明	5187/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 雲母	良好	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ-ナデ	無	
451	075	1	透模外	248	高坏	口縁-底部	22.6	15.4	7.5187/6 褐色	長石 角閃石 雲母 赤褐色粒	良好	ハケ後ナデ-ナデ後 ヘラミミガキ-ナデ	ハケ ナデ	有	焼成調整孔4ヶあり
452	075	2	透模外	223	高坏	突起	22.6~13.1	13.9~15.8	1078/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒	良好	ナデ後ヘラミミガキ- ナデ	ナデ	有	
453	073	2	B-5	232	不明土製品	破片	不明	不明	1078/2 灰黄褐色	赤褐色粒 雲母	良好	調整	調整	有	跡か?
454	100		透模外	S-37	石片	破片	16.2×3.7	厚	-	-	-	-	-	-	全面にベンガラを塗布してある感じである 重さ1.846g
455	099		透模外	S-41	砥石	破片	11.3×5~8	厚	-	-	-	-	-	-	四角砥石として使用 重さ0.59g
456	103	4		S-40	砥石	破片	3.3×4.25	厚	-	-	-	-	-	-	重さ0.84g 4面使用
457	098		透模外	S-39	砥石	破片	13.0×3.3	厚	-	-	-	-	-	-	天然砥石 四角砥石として使用 重さ0.60g
458	101		透模外		砥石	破片	16.5×5.8	厚	-	-	-	-	-	-	砂岩製 四角砥石として使用 重さ1.186g
459	097	1	透模外	S-36	台石	-	24.2×22.4	厚	-	-	-	-	-	-	重さ10.546g
460	083	1	一括		腰	口縁-胴部	(14.5)	不明	2.5187/3 浅黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良	ナデ-ハケヘラケ スリ-ナデ	ナデ-ヘラケスリ	有	粘土の層目がよく分る
461	084	1	一括		壺	口縁-胴部	(15.8)	不明	1078/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒	良好	ナデ-ハケ後流注 文-ナデ	ナデ-ヘラケスリ・ 指押え	有	胴部に三本の流注文あり
462	095	1	透模外		壺	口縁部	(23.6)	不明	5186/6 褐色	長石 雲母	良好	ナデ	ナデ	無	外縁部口縁部に煤か漆の様なものを 塗布している
463	094	1	西		壺	口縁部	18.6	不明	7.5186/4 にふい黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ	ナデ	無	
464	085	2	北 南2層		壺	口縁-底部	(9.8)	12.0	1078/3 浅黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ-ハケ後ナデ- ナデ	ナデ-指押え	無	底である 重みがある
465	085	3	一括		小型丸底壺	口縁-胴部	9.6	不明	2.5194/6 赤褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ-ヘラミミガキ- ナデ	ナデ-ヘラミミガキ- ナデ	有	

第23表 第2調査区出土遺物調査表⑨

調査 番号	調査 区画	遺物名	P番号	設置	部位	口徑	器高	色調	結土・埋込物	焼成	外面調整	内面調整	底状	備考
465	085	1 北		型	口縁一底部	(13.2)	15.0	7.5YR5/3 にふいじ色	長石 石灰 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ・ハク後ナデ		有	
467	087	1 道徳外		小型丸蓋鉢	胴部一底部	不明	不明	2.5YR5/6 明赤褐色	長石 石灰	良好	ハラミガキ	ハク	無	
468	084	2 一括		小型蓋	口縁一底部	(12.7)	12.6	10YR8/4 浅黄褐色	長石 石灰 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ・ハク後ナデ	ナデ	有	
469	088	3 南 2層		環	口縁一底部	(12.0)	3.7	7.5YR7/6 褐色	長石 石灰 角閃石 赤褐色粒	良好	ナデ	ナデ	有	内面に灰行着
470	088	2 一括		環	ほぼ完全形	12.2	3.9	2.5YR5/8 明赤褐色	長石 石灰 角閃石 赤褐色粒	良好	ナデ	ナデ	無	全体にやや砂漠
471	088	4 一括		環	ほぼ完全形	14.8	4.4	5YR7/3 褐色	長石 石灰 角閃石 赤褐色粒	やや 良好	ナデ	ナデ	無	全体にやや砂漠
472	084	3 道徳外		小型丸蓋鉢	口縁一底部	(12.6)	9.6	5YR6/3 明赤褐色	長石 石灰 角閃石 赤褐色粒	良好	ナデ・ハク後ナデ	ハク後ナデ・ハラケ スリ後ナデ	有	
473	086	1 一括		鉢	口縁一胴部	(27.4)	不明	7.5YR5/4 にふいじ褐色	長石	良好	ナデ・ハク後ナデ ナデ・タタキ後ハク	ナデ・ハラケスリ	無	内、外側に灰行着
474	086	2 一括		鉢	胴部一底部	不明	不明	10YR8/4 浅黄褐色	長石	良好	ナデ	ハク・指調整	無	底である
475	087	3 道徳外		鉢 (土師器)	口縁一胴部	(8.6)	不明	5YR6/3 褐色	長石 赤褐色粒	良好	ナデ・ハラミガキ ハラケスリ	ナデ	無	指調整
476	087	2 道徳外		小型丸蓋鉢	口縁一胴部	(8.8)	不明	10YR5/1 褐色	長石 石灰 赤褐色粒 雲母	良好	ハラミガキ	ハラミガキ	有	
477	091	1 トレンチ内 南西		手組土器	胴部一底部	不明	不明	10YR8/6 明赤褐色	長石 石灰 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ	ナデ・指調整	有	
478	091	2 南 2層		手組土器	口縁一底部	7.3	3.8	10YR7/4 にふいじ黄褐色	長石 石灰 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	指調整	指調整	無	
479	096	2 道徳外		大型蓋	口縁部	(38.6)	不明	10YR5/3 褐色	長石 石灰 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	指調整	指調整	無	
480	088	1 一括		高杯	口縁一胴部	16.9	不明	10YR7/3 褐色	長石 石灰 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ	ナデ	無	
481	096	1 道徳外		不明土器 (須恵器)	破片	不明	不明	7.5YR7/4 にふいじ黄褐色	長石 石灰	良好	指調整	指調整	無	寄孔あり
482	087	4 道徳外		環	胴部一底部	不明 底部(8.6)	不明	灰色	長石 白粘土	良好	ナデ	ナデ	無	
483	093	2 道徳外		三足鍋	胴部	不明	不明	10YR8/3 浅黄褐色	長石 雲母	良好	指調整	-	無	
484	094	3 西側		焼成粘土塊	塊	不明	不明	10YR8/3 浅黄褐色	長石 石灰 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ	-	-	
485	094	2 3層		焼成粘土塊	破片	不明	不明	10YR7/4 にふいじ黄褐色	長石 角閃石 雲母	良好	ナデ	-	-	
486	093	1 道徳外		ミニチュア 鉢	口縁一底部	4.9	2.6	10YR8/2 灰白色	長石 角閃石	良好	指調整	指調整	無	
487	091	7 一括		手組土器	底部	不明	不明	2.5YR5/2 灰白色	長石 石灰 角閃石	良好	ナデ	ナデ	無	
488	092	4 道徳外		ジョッキ型 土器	把手	不明	不明	10YR8/3 浅黄褐色	長石 赤褐色粒	良好	ナデ	-	無	
489	092	5 道徳外		把手	把手	不明	不明	7.5YR5/4 浅黄褐色	長石 雲母	良好	指調整	-	有	

第24表 第2調査区出土遺物観察表⑧

調査 番号	調査 区画	調査 時期	遺構名	種類	部位	口径	器高	色調	粘土・混入物	焼成	外面調整	内面調整	黒斑	備考
490	090	1	遺構外	土製スプーン	破片	不明	不明	1018B/2 灰白色	長石 角閃石	良好	前調整	—	無	重さ12.5g
491	090	3	遺構外	土製石玉	破片	3.3×0.9	不明	7.5197/4 にじみ褐色	長石 石英	良好	前調整	—	無	重さ3.5g
492	092	3	遺構外	スプーン型 土器	把手	不明	不明	1018B/3 浅黄褐色	長石 赤褐色粒	良好	前調整	—	有	
493	089	6	一括	土罐	ほぼ完形	0.9×2.6	—	1018B/2 灰黄褐色	赤褐色粒	—	—	—	無	重さ1.7g
494	090	2	遺構外	土罐	破片	4.9×1.0	不明	2.5195/2 暗灰黄色	長石 石英 角閃石	良好	ナデ	—	無	重さ5.0g
495	089	5	一括	土罐	完形	2.1×5.1	—	2.5196/3 にふい褐色	長石 石英	—	—	—	無	重さ16.4g
496	089	7	一括	土製玉	完形	3.1×2.7	—	1018B/3 浅黄褐色	長石 角閃石	—	—	—	無	重さ23.5g
497	092	1	遺構外	壺	破片	不明	不明	1018B/3 灰黄色	長石	良好	ハケ後ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	無	内器面にペンガラ付着
498	092	2	遺構外	壺	破片	不明	不明	92/ 黒色	長石 雲母	良好	ハケ	ハケ	有	内器面にペンガラ付着
499	080	3	8・5	小型壺	頸部	不明	不明	1018B/3 浅黄褐色	長石 石英 角閃石 赤褐色粒 雲母	良好	ナデ・ハケ	ナデ	無	内器面、断面に無色顔料付着
500	095	2	遺構外	碇石	破片	7.8×5.2	厚 2.7	518/2 灰白色	—	—	—	—	—	— 砂岩製 重さ164.2g
501	091	8	一括	紡錘車	完形	3.4×3.4	厚 0.3~0.9	518/2 灰白色	—	—	—	—	—	— 安山岩 重さ12.5g
502	091	9	一括	石皿	破片	1.2×2.4	厚 0.3~0.9	—	—	—	—	—	—	— 黒曜石 重さ0.5g
503	106	1		石皿	破片	2.35×1.3	厚 3.5	—	—	—	—	—	—	— 重さ0.7g
504	089	1	一括	ガラス玉	完形	外径4.4mm 内径1.0mm	高さ 3.0mm	透明水色	—	—	—	—	—	—
505	089	2	一括	ガラス玉	完形	外径4mm 内径1.9mm	高さ 2.0mm	透明水色	—	—	—	—	—	—
506	089	3	一括	ガラス玉	完形	外径4.3mm 内径1.2mm	高さ 3.0mm	増緑色	—	—	—	—	—	—
507	089	4	一括	ガラス玉	完形	外径3.1mm 内径1.2mm	高さ 1.3mm	増緑色	—	—	—	—	—	—
508	103	1		深沢磁坪	破片	7.5×4.2	—	—	—	—	—	—	—	— 重さ58.3g
509	104	7		手鎌	破片	10.0×3.8	厚 0.3	—	—	—	—	—	—	— 重さ50.4g
510	104	3		鉄鎌	破片	5.4×2.4	厚 0.4	—	—	—	—	—	—	— 重さ11.2g
511	102	1	遺構外	鉄皿	破片	5.3×0.5	厚 0.5×0.5	—	—	—	—	—	—	— 重さ5.2g
512	104	5		鉄皿	破片	5.7×1.7	厚 0.5	—	—	—	—	—	—	— 重さ10.7g
513	105	5		鉄皿	破片	6.1×1.5	厚 0.2	—	—	—	—	—	—	— 重さ5.2g

第25表 第2調査区出土遺物観察表①

調査 番号	出土 位置	調査 区	遺物 名	P番号	器種	部位	口徑	器高	色調	粘土・混入物	焼成	外面調整	内面調整	原状	備 考
514	089	8	一括	Fe-9	鉄皿	破片	—	—	—	—	—	—	—	—	重さ3.0g
515	106	2		鉄皿	破片	1.8×1.4 0.2	厚	—	—	—	—	—	—	—	重さ1.6g
516	104	1		Fe-5	手鐲	破片	4.7×2.4 0.8	厚	—	—	—	—	—	—	重さ12.5g
517	105	6		Fe-21	板状鉄	破片	6.8×1.5 0.3	厚	—	—	—	—	—	—	重さ9.6g
518	102	遺構外		Fe-1	皿	破片	7.2×2.1 2.1×1.5	厚	—	—	—	—	—	—	重さ30.0g
519	106	3		Fe-31	鉄	破片	4.2×0.7 0.55	厚	—	—	—	—	—	—	重さ6.6g
520	104	4		Fe-34	鉄片	破片	6.6×0.7 0.3	厚	—	—	—	—	—	—	重さ6.2g
521	104	6		Fe-23	鉄片	破片	4.5×0.9 0.2	厚	—	—	—	—	—	—	重さ5.2g
522	103	3		Fe-32	棒状鉄	破片	3.8×0.65	—	—	—	—	—	—	—	重さ2.5g
523	104	2		Fe-4	釘状鉄	破片	5.3×1.3 0.7	厚	—	—	—	—	—	—	重さ5.7g
524	103	2		Fe-3	釘状鉄	破片	3.9×0.3	—	—	—	—	—	—	—	重さ1.2g
525	105	4		Fe-17	棒状鉄	破片	2.5×0.6 0.5	厚	—	—	—	—	—	—	重さ2.0g
526	105	2		Fe-15	鉄片	破片	3.6×0.7 0.2	厚	—	—	—	—	—	—	重さ1.7g
527	105	3		Fe-16	棒状鉄	破片	2.6×0.6 0.5	厚	—	—	—	—	—	—	重さ1.45g
528	105	1		Fe-14	鉄皿	破片	3.7×0.5 0.4	厚	—	—	—	—	—	—	重さ1.5g
529	089	10	一括		銅銭	破片	—	—	—	—	—	—	—	—	重さ0.8g
530	080	2	B-4	257	縄文土器	破片	不明	不明	10YR2/1 にふい黄褐色	灰石 石灰 角閃石 赤褐色粒 器母	良好 刻目	ナデ	—	—	—
531	091	4	西側		縄文土器	口縁部	不明	不明	7.5YR4/1 赤灰色	灰石 石灰 角閃石 赤褐色粒 器母	良好 刻目	ナデ	—	—	—
532	091	5	南側 2層		縄文土器	破片	不明	不明	7.5YR6/4 にふい褐色	灰石 石灰 角閃石 器母	良好 刻目	ナデ	—	—	—
533	091	6	一括		縄文土器	破片	不明	不明	7.5YR4/1 赤褐色	灰石 石灰 角閃石 赤褐色粒 器母	良好 刻目	ナデ	—	—	—
534	091	3	北 2層		縄文土器	破片	不明	不明	7.5YR4/2 灰褐色	灰石 石灰 角閃石 赤褐色粒 器母	良好 刻目	ナデ	—	—	—

写真図版

1 調査地遠景



2 第1調査区作業風景



3 1・3号住居跡





1 1～3号住居跡



2 3号住居跡



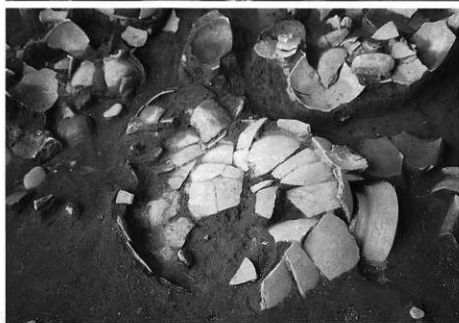
3 3号住居跡遺物
出土状況



1 土器溜め1 全景



2 土器溜め1 近景



3 土器溜め1 大型壺



1 土器溜め2 部分



2 土器溜め2 部分



3 第1調査区遺構
検出状況

1 1号住居跡出土遺物 (3)



5 2号住居跡出土遺物 (21)



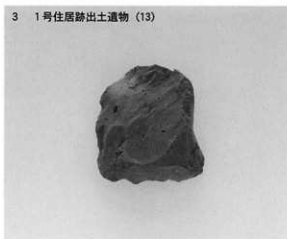
2 1号住居跡出土遺物 (4)



6 2号住居跡出土遺物 (22)



3 1号住居跡出土遺物 (13)



7 2号住居跡出土遺物 (23)



4 2号住居跡出土遺物 (20)



8 2号住居跡出土遺物 (24)



1 3号住居跡出土遺物 (27)



2 3号住居跡出土遺物 (28)



3 3号住居跡出土遺物 (29)



4 3号住居跡出土遺物 (30)



5 3号住居跡出土遺物 (31)



6 3号住居跡出土遺物 (32)



7 3号住居跡出土遺物 (33)



1 3号住居跡出土遺物 (35)



5 3号住居跡出土遺物 (41)



2 3号住居跡出土遺物 (37)



6 3号住居跡出土遺物 (44)



3 3号住居跡出土遺物 (39)



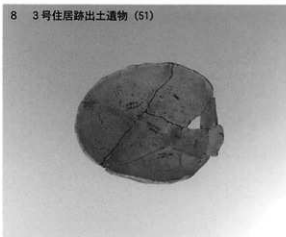
7 3号住居跡出土遺物 (49)



4 3号住居跡出土遺物 (40)



8 3号住居跡出土遺物 (51)



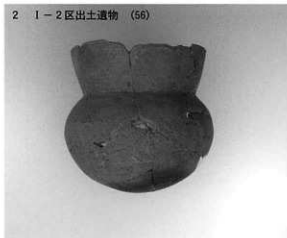
1 3号住居跡出土遺物 (54)



5 1-2区出土遺物 (57)



2 1-2区出土遺物 (56)



6 1-2区出土遺物 (62)



3 1-2区出土遺物 (57)



7 1-3区出土遺物 (65)



4 1-2区出土遺物 (57)



8 1-3区出土遺物 (66)



1 1-4区出土遺物 (70)



4 1-7区出土遺物 (79)



2 1-5区出土遺物 (72)



5 1-8区出土遺物 (87)



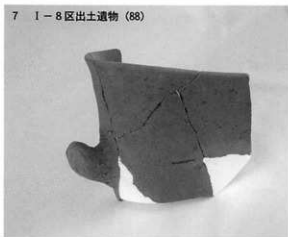
3 1-5区出土遺物 (73)



6 1-8区出土遺物 (87)



7 1-8区出土遺物 (88)



1 II-3区出土遺物 (92)



2 II-3区出土遺物 (92)



3 II-4区出土遺物 (95)



4 II-4区出土遺物 (97)



5 II-5区出土遺物 (98)



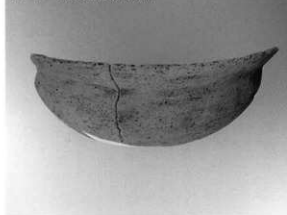
6 II-5区出土遺物 (99)



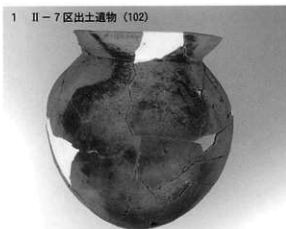
7 II-6区出土遺物 (100)



8 II-6区出土遺物 (101)



1 II-7区出土遺物 (102)



5 II-7区出土遺物 (110)



2 II-7区出土遺物 (104)



6 II-7区出土遺物 (112)



3 II-7区出土遺物 (105)



7 II-7区出土遺物 (113)



4 II-7区出土遺物 (109)



8 II-7区出土遺物 (114)



1 II-8区出土遺物 (118)



5 III-3区出土遺物 (129)



2 II-8区出土遺物 (120)



6 III-5区出土遺物 (131)



3 II-8区出土遺物 (121)



7 III-6区出土遺物 (132)



4 II-8区出土遺物 (123)



8 III-6区出土遺物 (133)



1 III-6区出土遺物 (134)



5 III-7区出土遺物 (145)



2 III-6区出土遺物 (135)



6 III-8区出土遺物 (146)



3 III-7区出土遺物 (141)



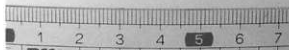
7 III-8区出土遺物 (147)



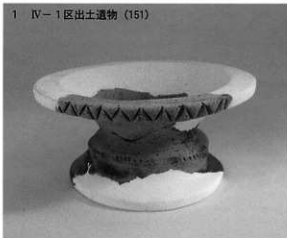
4 III-7区出土遺物 (143)



8 III-8区出土遺物 (150)



1 IV-1区出土遺物 (151)



5 IV-6区出土遺物 (160)



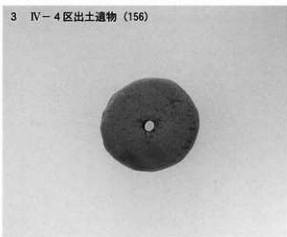
2 IV-4区出土遺物 (153)



6 IV-6区出土遺物 (161)



3 IV-4区出土遺物 (156)



7 IV-6区出土遺物 (162)



4 IV-6区出土遺物 (159)



8 IV-8区出土遺物 (164)



1 IV-8区出土遺物 (166)



5 W-3区出土遺物 (186)



2 E-2区出土遺物 (169)



6 W-3区出土遺物 (184)



3 W-1区出土遺物 (173)



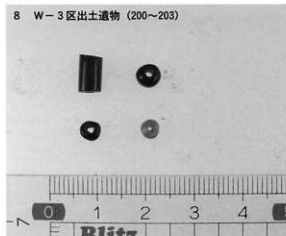
7 W-3区出土遺物 (196)



4 W-3区出土遺物 (182)



8 W-3区出土遺物 (200~203)



1 裝飾品 (204)



5 鉄器 (210)



2 軽石製品 (207)



6 鉄器 (211)



3 軽石製品 (208)



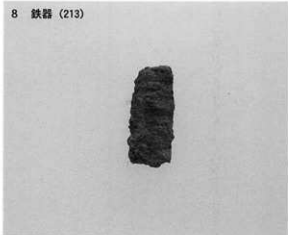
7 鉄器 (212)



4 軽石製品 (209)



8 鉄器 (213)



1 鉄器 (214)



5 鉄器 (218)



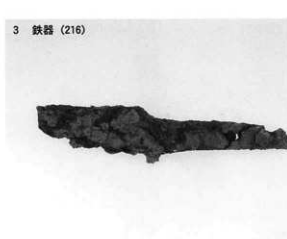
2 鉄器 (215)



6 鉄器 (220)



3 鉄器 (216)



7 鉄器 (221)



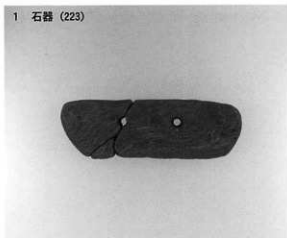
4 鉄器 (217)



8 鉄器 (222)



1 石器 (223)



2 石器 (224)



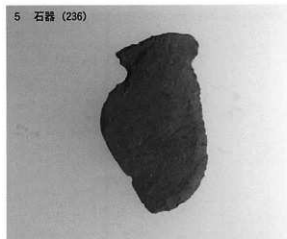
3 石器 (230)



4 石器 (235)



5 石器 (236)



6 石器 (239)



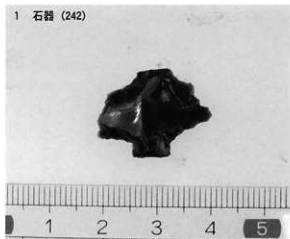
7 石器 (240)



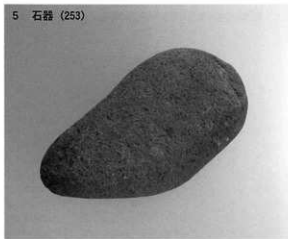
8 石器 (241)



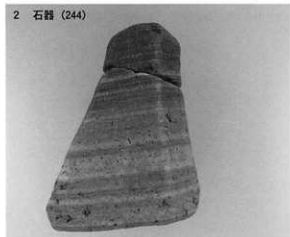
1 石器 (242)



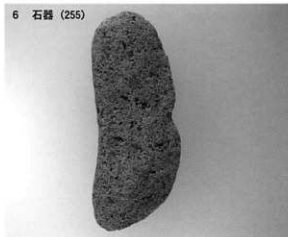
5 石器 (253)



2 石器 (244)



6 石器 (255)



3 石器 (245)



7 石器 (258)



4 石器 (247)



8 石器 (259)



1 縄文土器 (261)



5 縄文土器 (266)



2 縄文土器 (262)



6 縄文土器 (270)



3 縄文土器 (263)



7 縄文土器 (271)



4 縄文土器 (264)



8 縄文土器 (272)



1 第2調査区全景



2 遺構検出状況



3 3・6・8号住居跡



1 6号住居跡



2 6号住居跡



3 4~6号住居跡

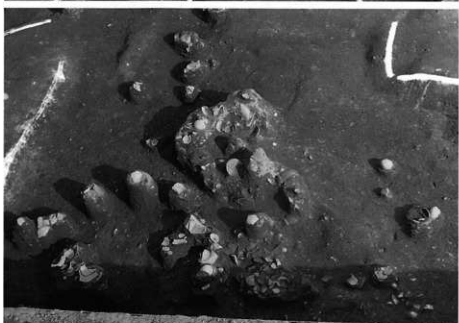
1 10号住居跡



2 10号住居跡



3 10号住居跡

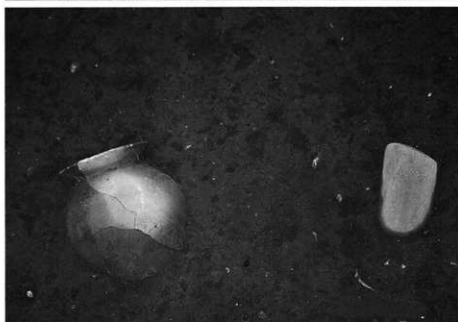




1 10号住居跡



2 11号住居跡



3 B-5区遺物
出土状況

1 1号住居跡出土遺物 (274)



5 3号住居跡出土遺物 (280)



2 1号住居跡出土遺物 (274)



6 3号住居跡出土遺物 (282)



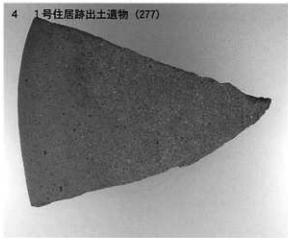
3 1号住居跡出土遺物 (275)



7 3号住居跡出土遺物 (283)



4 1号住居跡出土遺物 (277)



8 3号住居跡出土遺物 (284)



1 3号住居跡出土遺物 (285)



5 3号住居跡出土遺物 (289)



2 3号住居跡出土遺物 (286)



6 3号住居跡出土遺物 (290)



3 3号住居跡出土遺物 (287)



7 3号住居跡出土遺物 (291)



4 3号住居跡出土遺物 (288)



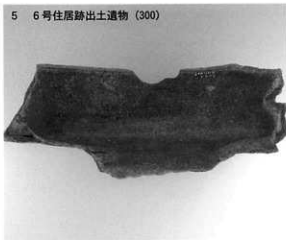
8 3号住居跡出土遺物 (291)



1 4号住居跡出土遺物 (294)



5 6号住居跡出土遺物 (300)



2 5号住居跡出土遺物 (298)



6 6号住居跡出土遺物 (301)



3 6号住居跡出土遺物 (299)



7 6号住居跡出土遺物 (304)



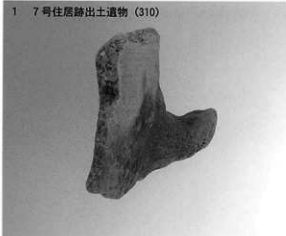
4 6号住居跡出土遺物 (300)



8 6号住居跡出土遺物 (305)



1 7号住居跡出土遺物 (310)



5 8号住居跡出土遺物 (318)



2 8号住居跡出土遺物 (312)



6 9号住居跡出土遺物 (321)



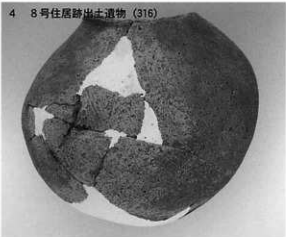
3 8号住居跡出土遺物 (316)



7 9号住居跡出土遺物 (324)



4 8号住居跡出土遺物 (316)



1 9号住居跡出土遺物 (325)



5 9号住居跡出土遺物 (330)



2 9号住居跡出土遺物 (325)



6 9号住居跡出土遺物 (331)



3 9号住居跡出土遺物 (326)



7 9号住居跡出土遺物 (332)



4 9号住居跡出土遺物 (327)



8 9号住居跡出土遺物 (333)



1 9号住居跡出土遺物 (334)



5 10号住居跡出土遺物 (346)



2 9号住居跡出土遺物 (336)



6 10号住居跡出土遺物 (347)



3 9号住居跡出土遺物 (340)



7 10号住居跡出土遺物 (350)



4 9号住居跡出土遺物 (345)



8 10号住居跡出土遺物 (352)



1 10号住居跡出土遺物 (354)



2 10号住居跡出土遺物 (356)



3 10号住居跡出土遺物 (358)



4 10号住居跡出土遺物 (362)



5 10号住居跡出土遺物 (363)



6 10号住居跡出土遺物 (364)



7 10号住居跡出土遺物 (366)



8 10号住居跡出土遺物 (368)



1 10号住居跡出土遺物 (371)



2 10号住居跡出土遺物 (372)



3 10号住居跡出土遺物 (374)



4 10号住居跡出土遺物 (375)



5 11号住居跡出土遺物 (380)



6 11号住居跡出土遺物 (384)



7 11号住居跡出土遺物 (385)



8 11号住居跡出土遺物 (385)



1 11号住居跡出土遺物 (386)



5 11号住居跡出土遺物 (390)



2 11号住居跡出土遺物 (386)



6 11号住居跡出土遺物 (399)



3 11号住居跡出土遺物 (388)



7 11号住居跡出土遺物 (403)



4 11号住居跡出土遺物 (389)



8 11号住居跡出土遺物 (404)



1 A-1区出土遺物 (405)



5 A-2区出土遺物 (411)



2 A-1区出土遺物 (406)



6 A-2区出土遺物 (412)



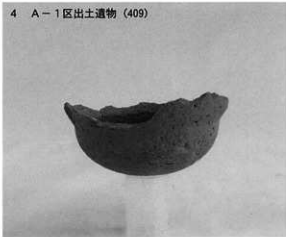
3 A-1区出土遺物 (407)



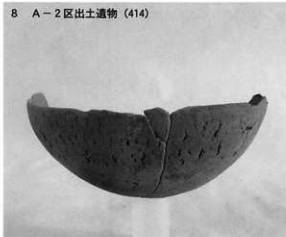
7 A-2区出土遺物 (413)



4 A-1区出土遺物 (409)



8 A-2区出土遺物 (414)



1 A-3区出土遺物 (422)



5 B-4区出土遺物 (431)



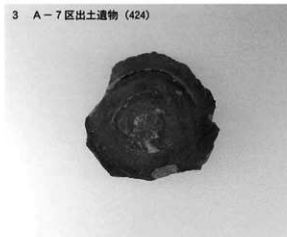
2 A-5区出土遺物 (423)



6 B-4区出土遺物 (432)



3 A-7区出土遺物 (424)



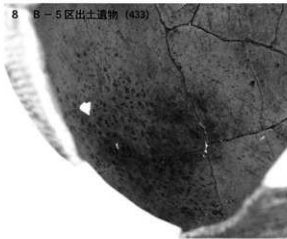
7 B-5区出土遺物 (433)



4 A-8区出土遺物 (428)



8 B-5区出土遺物 (433)



1 B-5区出土遺物 (434)



5 B-5区出土遺物 (440)



2 B-5区出土遺物 (436)



6 B-5区出土遺物 (441)



3 B-5区出土遺物 (437)



7 B-5区出土遺物 (442)



4 B-5区出土遺物 (438)



8 B-5区出土遺物 (442)



1 B-5区出土遺物 (445)



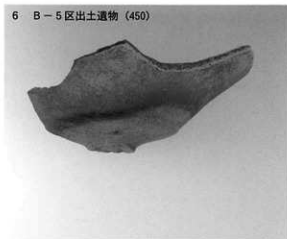
5 B-5区出土遺物 (449)



2 B-5区出土遺物 (446)



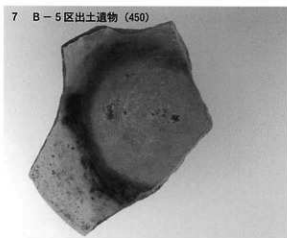
6 B-5区出土遺物 (450)



3 B-5区出土遺物 (447)



7 B-5区出土遺物 (450)



4 B-5区出土遺物 (448)



8 B-5区出土遺物 (451)



1 B-5区出土遺物 (452)



5 B-5区出土遺物 (454)



2 B-5区出土遺物 (453)



6 B-5区出土遺物 (454)



3 B-5区出土遺物 (454)



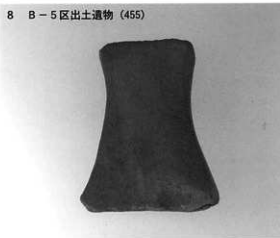
7 B-5区出土遺物 (454)



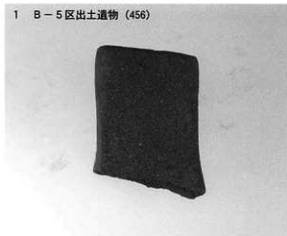
4 B-5区出土遺物 (454)



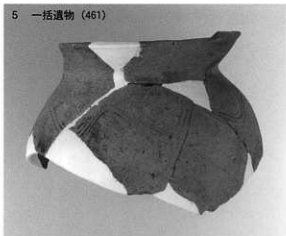
8 B-5区出土遺物 (455)



1 B-5区出土遺物 (456)



5 一括遺物 (461)



2 B-5区出土遺物 (457)



6 一括遺物 (462)



3 B-5区出土遺物 (458)



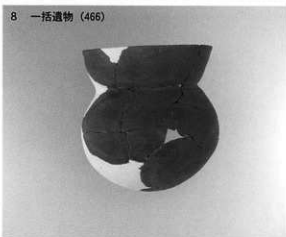
7 一括遺物 (464)



4 B-5区出土遺物 (459)



8 一括遺物 (466)



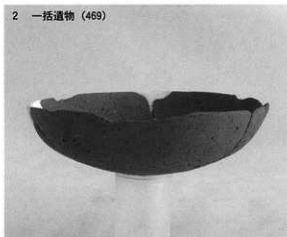
1 一括遺物 (468)



5 一括遺物 (477)



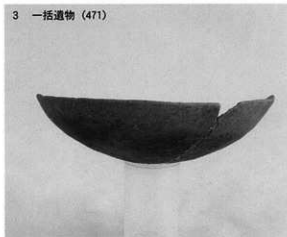
2 一括遺物 (469)



6 一括遺物 (478)



3 一括遺物 (471)



7 一括遺物 (480)



4 一括遺物 (472)



8 一括遺物 (481)



1 特殊遺物 (483)



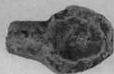
5 特殊遺物 (486)



2 特殊遺物 (483)



6 特殊遺物 (490)



3 特殊遺物 (484)



7 特殊遺物 (491)



4 特殊遺物 (485)



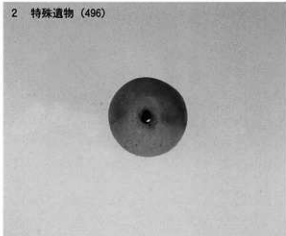
8 特殊遺物 (492)



1 特殊遺物 (495)



2 特殊遺物 (496)



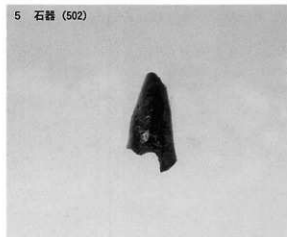
3 石器 (501)



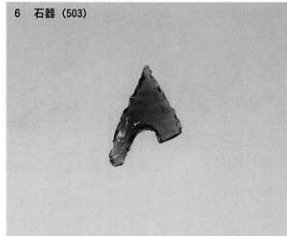
4 石器 (501)



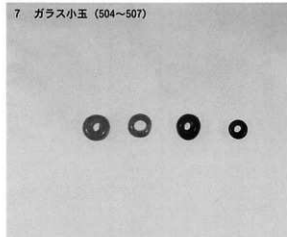
5 石器 (502)



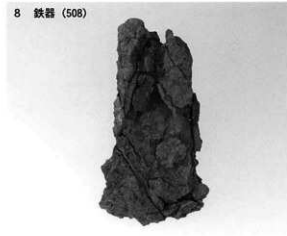
6 石器 (503)



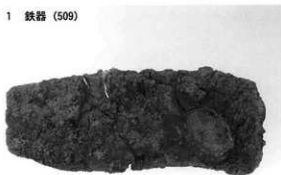
7 ガラス小玉 (504~507)



8 鉄器 (508)



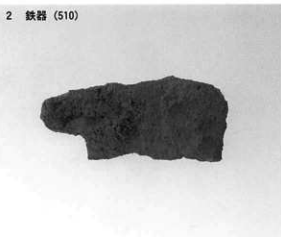
1 鉄器 (509)



5 鉄器 (513)



2 鉄器 (510)



6 鉄器 (514)



3 鉄器 (511)



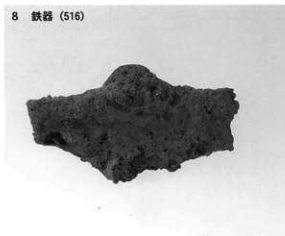
7 鉄器 (515)



4 鉄器 (512)



8 鉄器 (516)



1 遺構に伴わない遺物 (517)



5 遺構に伴わない遺物 (523)



2 遺構に伴わない遺物 (518)



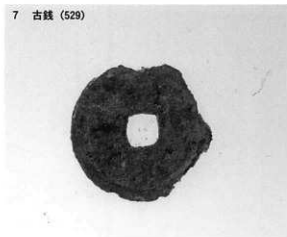
6 遺構に伴わない遺物 (526)



3 遺構に伴わない遺物 (519)



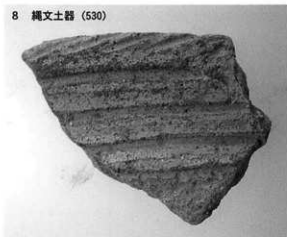
7 古銭 (529)



4 遺構に伴わない遺物 (520)



8 縄文土器 (530)



1 縄文土器 (531)



2 縄文土器 (532)



3 縄文土器 (534)



4 桶遺の遺物 (535)



5 桶遺の遺物 (536)



6 桶遺の遺物 (537)



7 桶遺の遺物 (538)



8 桶遺の遺物 (539)



1 補遺の遺物 (540)



5 補遺の遺物 (544)



2 補遺の遺物 (541)



6 補遺の遺物 (545)



3 補遺の遺物 (542)



7 補遺の遺物 (546)



4 補遺の遺物 (543)



8 補遺の遺物 (547)



報告書抄録

ふりがな	かとうだひがしづるいせき							
書名	方保田東原遺跡13							
副書名	山鹿市文化財調査報告書							
巻数	第11集							
シリーズ名								
編著者名	中村幸史郎							
編集機関	山鹿市教育委員会							
所在地	〒861-0501 熊本県山鹿市山鹿1026-2							
発行年月日	平成22年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
方保田東原遺跡	熊本県 山鹿市 方保田 186-1	43208	179	32° 59′ 51″	130° 43′ 2″	平成6年 9月20日 ～平成7年 3月28日	900㎡	遺跡 整備
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	包蔵地	弥生時代 古墳時代 古代		竪穴住居跡 土器溜め 道路状遺構		弥生式土器 土師器 赤色顔料精製用石杵 鉄器 砥石		赤色顔料 精製関連 遺物出土

山鹿市文化財調査報告書第11集

方保田東原遺跡13

平成22年3月31日

編集 山鹿市教育委員会

発行 山鹿市教育委員会

印刷 株式会社 城野印刷所

正誤表

『方保田東原遺跡(13)』 山鹿市文化財調査報告書 第11集 熊本県山鹿市教育委員会2010年

本文中

頁	左右	行	図番	誤	正
5			第2図	(図中に⑧表記無し)	(大道小学校敷地内に⑧)
23	左	5		小型の鉢の破片である。	91は小型の鉢の破片である。
23	左	43		112から117は土師器の…	112から116は土師器の…
59		5		(46号住居跡(第43図))	(46号住居跡(第41図))
68	右	14		388から399は	388から390は
72	左	8		424は脚付鉢の脚部である。	424は器台の下半である。

土器観察表

頁	遺物番号	誤	正
40~51、 92~102	表見出し	粘土・混入物	胎土・混入物
		器種	器種又は遺物名
40	006	器種:赤色顔料付着鉢 備考:全体に摩耗している	器種:壺 備考:全体に摩耗している 外面に ベンガラ付着
40	023	口径:13.4	口径:9.5
41	045	黒斑:無 煤:有	黒斑:有 煤:無
41	047	047	048
41	048	048	047
42	050	黒斑:有 煤:無	黒斑:無 煤:有
42	057	器種:不明土器	器種:釣鐘状土器?
42	061	器種:坏 土師器	器種:碗 土師器
42	062	器種:坏 土師器	器種:碗 土師器
42	065	器種:坏 土師器	器種:碗 土師器
42	066	器種:坏 土師器	器種:碗 土師器
43	074	器種:鉢	器種:碗 土師器
43	080	器種:鉢	器種:小型丸底壺
43	085	器種:器台	器種:高坏
44	115	器種:壺 土師器	器種:壺 土師器
44	116	器種:壺 土師器	器種:壺 土師器
45	123	器種:器台?	器種:支脚
45	132	器種:鉢	器種:小形丸底壺
45	133	器種:鉢	器種:小形丸底壺
45	139	遺構名:遺構外Ⅱ区	遺構名:遺構外Ⅲ区
45	142	器種:ミニチュア土器 鉢	器種:小形丸底壺
46	145	器種:高坏 遺構名:遺構外W-1	器種:台付鉢
46	151	遺構名:遺構外W-1 備考:内器面に 赤色顔料が薄く見える	遺構名:Ⅳ-1 備考:記載内容削除
46	159	器種:ミニチュア土器 鉢	器種:ミニチュア土器 壺
46	164	黒斑:有 煤:無	黒斑:無 煤:有
47	169	遺構名:遺構外E-3	遺構名:遺構外E-2
47	172	器種:坏碗	器種:坏壺
47	177	器種:器台	器種:器台?
47	180	器種:何かの脚台	器種:土師器 移動式壺?
47	186	器種:ジョッキ形	器種:笠形土製品
47	191	器種:ミニチュア土器 台付鉢	器種:ミニチュア土器 高坏
47	196	器種:甕	器種:壺 土師器
47	198	器種:碗 須恵器	器種:坏 須恵器
47	206	遺物名:不明土製品	遺物名:土製勾玉
47	209	遺物名:浮子	遺物名:蚌土製品
47	212	遺物名:鉤	遺物名:鉤
47	214	遺物名:鉄鏃	遺物名:三角鉄片
49	218	遺物名:鉄鏃	遺物名:手鏃
49	219	遺物名:棒状鉄製品	遺物名:不明鉄器
49	220	遺物名:鉄製品	遺物名:鉄挺
49	221	遺物名:板状鉄	遺物名:手鏃
49	222	遺物名:板状鉄	遺物名:鉄挺
49	225	遺物名:石包丁	遺物名:石包丁 未成品
49	225	遺物名:石包丁	遺物名:石包丁 未成品
49	230	遺物名:挟入柱状片刃石斧	遺物名:挟入柱状片刃石斧
49	231	遺物名:磨製石器	遺物名:挟入柱状片刃石斧
50	246	遺物名:砥石	遺物名:石杵?
50	248	遺物名:台石	遺物名:石皿
50	247	煤:-	煤:有
50	249	遺物名:台石・砥石?	遺物名:石皿

土器観察表

頁	遺物番号	誤	正
50	252	遺物名: 台石	遺物名: 石皿
50	253	遺物名: 擦り石?	遺物名: 石杵
50	258	備考: 緑色片岩	備考: 変成岩
50	259	備考: 緑色片岩	備考: 変成岩
50	263	遺構名: 遺構外Ⅱ区	遺構名: 遺構外Ⅲ区
50	265	遺構名: 遺構外	遺構名: 遺構外Ⅲ・Ⅳ区
50	272	器種: 縄文土器 深鉢	器種: 縄文土器 高坏?
92	275	器種: 甕	器種: 不明(絵画土器)
92	288	器種: 小形丸底壺	器種: 鉢
93	307	器種: 青磁碗	器種: 青磁碗
93	310	器種: 甕	器種: 甕
94	323	器種: 甕棺	器種: 台付甕
94	331	備考: 内器面全体に赤色顔料付着	備考: 記載内容削除
95	354	器種: 甕	器種: 甕
95	358	器種: 坏	器種: 鉢
95	359	器種: 坏	器種: 鉢
96	372	器種: 器台	器種: 台付鉢
96	382	備考: 内器面全体に赤色顔料付着	備考: 記載内容削除
96	385	器種: 甕	器種: 甕
96	389	器種: 小形壺	器種: 小形丸底壺
97	394・395・397	記数多数	下表と差し替え
97	404	遺構名: 一括	遺構名: 11号住
97	409	器種: 鉢(土師器)	器種: 小形丸底壺
97	410	遺構名: 一括	遺構名: A-2
97	411	器種: 小形丸底壺	器種: 小形壺
97	412	器種: 鉢(土師器)	器種: 小形丸底壺
98	425	器種: 高坏	器種: 台付甕
98	428	器種: 鉢(土師器)	器種: 小形丸底壺
98	435	遺構名: 遺構外	遺構名: B-5
98	437	遺構名: 遺構外	遺構名: B-5
98	439	器種: 甕	器種: 甕
98	441	遺構名: 遺構外	遺構名: B-5
99	442	遺構名: 遺構外	遺構名: B-5
99	444~452	遺構名: 遺構外	遺構名: B-5
99	446	器種: 坏(土師器)	器種: 鉢(土師器)
99	453	P番号: 232	P番号: 252
99	454~459	遺構名: 遺構外	遺構名: B-5
99	461	器種: 甕	器種: 甕
100	469	器種: 坏	器種: 鉢
100	470	器種: 坏	器種: 鉢(古式土師器)
100	471	器種: 坏	器種: 鉢(古式土師器)
100	472	器種: 坏	器種: 鉢(古式土師器)
100	477	遺構名: トレンチ内南西	遺構名: トレンチ内南
100	483	器種: 三足鍋	器種: 土製品(把手?)
101	492	器種: 把手	器種: 柄
101	493	部位: ほぼ完形	部位: 破片
101	494	部位: 破片	部位: ほぼ完形
101	509	遺物名: 手鎌	遺物名: 鎌
101	513	部位: 破片	部位: 完形
102	518	遺物名: 鋳	遺物名: 鉄片
102	519	遺物名: 鉄	遺物名: 鉄片
102	522	遺物名: 棒状鉄	遺物名: 釘状鉄
102	524	遺物名: 釘状鉄	遺物名: 針状鉄
102	525	遺物名: 棒状鉄	遺物名: 鉄片
102	527	遺物名: 棒状鉄	遺物名: 鉄鏃
102	528	遺物名: 鉄鏃	遺物名: 棒状鉄

差し替え表

遺物番号	図No.	枚数	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	土遺入物	焼成	外面調整	内面調整	黒灰	煤	備考
394	060	2	11住	368	鉢	口縁-底部	(12.7)	5.1	10 YR5/8 赤色	長石・赤褐 色粒	良	不明瞭 →調整	摩滅している為 不明瞭	有	無	被熱により色調が 赤変している
395	060	3	11住	366	鉢	口縁-底部	(15.0)	(7.6)	10 YR7/1 灰白色	長石・角閃 石・赤褐色 粒・霏石	良好	摩滅している為 不明瞭	ナデ	有	無	
397	060	4	11住	284	鉢	胴部-底部	不明	不明	2.5 YR6/6 褐色	長石・石英・ 角閃石・赤 褐色粒	良好	摩滅している為 不明瞭	ハケ→ナデ	有	無	外器面が被熱して いる

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市文化財調査報告第11集 方保田東原遺跡13』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市文化財調査報告第11集 方保田東原遺跡13

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL：<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025 年6月 19 日